

8・6の雨音

8・6水害についての55人のインタビュー

日高優介 編

鹿児島大学法文学部附属

「鹿児島の近現代」教育研究センター

はじめに

鹿児島大学法文学部附属
鹿児島島の近現代」教育研究センター
日高優介

このインタビュー集は鹿児島大学の共通教育科目「地域コミュニティ論」を受講した学生によって作られました。2023年は1993年8月6日の「8・6水

害」から30年です。本科目を受講している学生の全員が「8・6水害」を経験していません。ましてや、県外出身の学生にとっては、聞いたこともない災害です。インタビューをはじめの前に、彼らには「8・6水害」に関する動画を見てもらい、甲突川沿いと竜ヶ水駅にある石碑を訪ねて貰いました。その時点ではおそらく彼らにとって「8・6水害」は「本能寺の変」や「西南戦争」といった、歴史の出来事と同じような認識だったのではないのでしょうか。しかし、実際に災害に遭った人にインタビューをして、それを文字おこしする作業のなかで、

「8・6水害」を追体験することになります。

2023年現在、情報に溢れたこの社会において「8・6水害」についての記録を知ることが難しくありません。

降水量や被害の程度、亡くなった人の数などの情報は明確に数字として「記録」されています。しかし、当時実際に被害に遭った人々の様子は、これらの「記録」から捉えることはできません。このインタビュー集は、そういった「記憶」を集めたものです。

当時災害に遭った人々が、現在どのようにそれを捉えているか。これについての語りを集めたのが本インタビュー集です。そのため、これは過去についての語りであると同時に、現在についての語りでもあります。

「地域コミュニティ」についての様々な課題が顕在化している今日において、本インタビュー集がその一助となることを願っています。

最後に、本調査の目的をご理解くださり、貴重な時間を割いて語ってくださいました皆様に厚くお礼を申し上げます。
2023年8月6日

目次

はじめに

1

4 「もうほんの少しのことで、命が、危なかった」

「バスに乗ってたら、帰れなかったかもね」 5

「出るのが遅れてたら」9

「自分で考えなさいよっちゅうこと」 18

「変な予感」 30

「今だからこうやって話せるけど……」 33

「道路で鯉が飛び跳ねた！」 38

「土砂を乗り上げて帰った記憶」 41

「見てる前で橋がね、半分ドーンと落ちたんですよ」 45

「水が溢れてるところをバスが通る」 47

「水がわんさかと押し寄せて」 50

「1メートル先も見えない」 53

「くるぶしまで靴は完全に浸かっている」 55

「天災は、恐ろしい」 57

「もうどうすることもできない」 59

「自然には勝てないと思う」 61

「経験しないと分かんないですよね」

「列車が宙ぶらりんになっていた」 69

「未曾有の災害」 71

「大きなトラックが流れてきた！」 73

「どうなるのかな」 77

「車がもう水にかなり浸かっている状態」

「近くにいる人たちでみんな手をつないで」 82

「木造の3階建てを提案したの」 86

「水はあつという間」 95

「子供たちが遊びに行つたまま連絡がつかない」

97 「JRに乗ってて亡くなった」 102

「人がこうだから安全と思つてはいけない」 106

「雨が降つただけで断水するのっていうような意外な感じは、はい」 109

「自然の恐怖感」 111

「台風なんて甘つちよるい」 116

「道路が至る所泥だらけでぐちゃぐちゃ」

「道路がとにかく使えない」 121

「すごい怖い」 123

「すごい怖い」 123

「冷蔵庫も天井までプカプカ」 126
 「関心を持ってもらうことが、大事じゃないかな」 127
 「高校一年生の時の経験」 130
 「道路脇から水がどんどん落ちてきて」 137
 「橋も流された」 139
 「家にいてよかった」 144
 「線路伝いに歩いて」 144
 「家族と過ごした30年前の8月6日」 147
 「高いところに逃げる」 150
 「二次災害になつたらいけない」 152
 「8・6災害からの復旧に向けて」 155
 「自然の力は凄い……」 160
 「行政はなかなか来なくて」 167
 「台所に鯉」 171
 「家に帰ることができない」 173
 「怖かったよね、考えたら」 178

「もうほんの少しのことで、命が、危なかった」

前野昌徳さん

インタビュアー 前野杏奈

書きおこし 古賀董

「4時半ぐらいからね」

——4時半ぐらいから（降り始めたのですか）？

「降り出して、雨が。えー、県庁の周りも水たまりに（なっていて）、で、30分ぐらいすれば止むんじゃないかなと思っただけで、まずまず（雨が）強くなっただけで、あの、そばの駐車場に車を停めて。県庁（も）水がちょっと膝まで来て（いて）、それを、んで……普通のかねて通る道は……あの、水溜りがなってる（できている）かもと思っただけで、上野原団地のところを通過して戸松団地に通って、その途中、もうワイパーが、車のワイパーが、効かないぐらい（雨が降っていた）。んで、あの、坂本の方に、抜けて、そしたら、崖がちよっと崩れたりして（いて）、んで、あの……あれは、なんか、実方の方

ももう先に進まなくて（先に進めなくなっていて）、んで、実方神社の上を通過して、裏道を通ったら（裏道を通ったら）、裏道のところも崩れたりして（いて）、（そういう苦労をして）やっと、辿り（着いた）、家に。したら、家のところは、水が相当流れた跡があって、んで……したら、あの……えー、○○（娘）か。○○、○○も帰ってきて、犬が、もうそのときは、（家の）周りに、二匹いたので（犬を二匹飼っていたので）、んで、あの、風呂場のところに避難したとかね。もう途中いろいろ難儀してやっと帰り着いた」

——県庁（から）、いつも通ってる道はどこらへん（ですか）？

「通ってるのはあの、冷水……の、玉龍高校のそばの冷水大重（を）通っていて、したら、そのときはもう、あの、（その道で）がけ崩れがあったりして、もう通れなくな（てい）た。だからそっちに行かないで良かったけど、もし（行っていたら危なかった）、直前直前に……（危険を）何とか切り抜けて、家に帰った、辿り着いた。そうしたら家も……割と高台なのに、水が……えー、床下

浸水ぐらいのあれ（水位になっていた）」

——なんか駄目になったものとかは（ありましたか）

「駄目になった？」

——どんな物が駄目になった？靴とか

「うん、そうそう（靴とかがダメになりました）。んで、

あの、○○（息子）、○○は、山形屋（百貨店）の倉庫のアルバイトしてて帰れないけん、そのまま、一日あれした（帰らなかった）。それから、小野のじいちゃん、のところは、床上、60センチぐらい水につかった。んで、冷蔵庫とか、もう、テレビも全部駄目（になった）。んで、二階があったからじいちゃんは二階に一応避難して、助かった。で次の日、あの、掃除に行つて、2日ぐらいかかった。畳は全部捨てるし、タンスとかも駄目になつてゐる、ね、もう大変」

——なんか大変意外に感じたことある？大変だなんていうこと以外に感じたことある？

「もう、もうほんの少しのことで、命が、危なかった、なあということ」

——ありがとうございます。

「バスに乗つてたら、帰れなかつたかもね」

——松舞子さん

インタビュー 中村唯花

文字おこし 上野綾奈

——あつよろしくお願いします。

「お願いします」

——すみません、今日は8・6水害のインタビューというところで……

「はい」

——お忙しい中お時間いただいてありがとうございます。す。

「あ、いえ……分からないですけど」

——いえ。

「よろしくお願いします」

——お願いします、えつとじゃあ質問、していきますね。

「はい」

——えつとまあ予定では5分程度のインタビューになる

かなと思つてて。

「はい」

——あのあんまり時間気にしなくても大丈夫なんですか。
ど。

「はい」

——はい、じゃあちよつと質問していきます。

「はい」

——じゃあ8・6水害が起こった時は。

「はい」

——えつと、何歳で、何をしていらつしやいましたか？

「そ、えーと……19歳で」

——ああ、はい。

「大学2年生で」

——はい。

「夏休みでアルバイトをしていました」

——あーでもおんなじ、今の私たちと同じ歳ぐらいで。

「はい、そうですね……」

——そうですね、じゃあその日はどこで何をしていましたか。

「えつと、その日は天文館で、アルバイトをしていました」

——ああ、そうですね、えつじゃあその、水位が上がつてきたときとかはそのバイト先にいたつて感じですか？

「えつと水位が上がつてくる……直前、上がり出す直前ぐらいにもう天文館を離れることができて」

——ああ、そうですね。

「仕事が終わつたので」

——はい。

「それでバス、つあ、車に乗つて」

——はい。

「かえ、帰つて、あの、家に帰つたらすごいことになつてゐるらしいねつていつた、そんな感じ、だつた気がします」

——ああ、じゃあその水位が上がつてゐるよつていうのは家で知つたというか。

「そうですね、テレビとかで」

——そうですね。

「はい」

——じゃあそのバイト先とかは大丈夫だったんですか。
「バイト先も、多分水浸しになって掃除とかが……大変だったように覚えています」

——あつ、掃除もやっただんですね。

「そう……記憶はないけど、多分、その次の日とかは多分いってないのよ」

——ああ。

「水が引いてから、他の人が片付けたのかもしれないけど、それを手伝ったのかちょっとそこは記憶がないんですけど、はい」

——そうなんですね。

「はい、浸かったのは事実です」

——ああ、……車で帰ったってことだったんですね。

「はい」

——その時はまだバスとかは動いてたんですか。

「はい、そうですね」

——ああ、そうなんですね、

「動いてて、バスで帰ろうと思ってたんですけども、ちょっと友達が乗せてくれるっていうことだったんで、

そのバスの時刻よりも、少し早く帰ったんですね、15分か20分くらい」

——ああ。

「はい、そしたらあの……」

——はい。

「家は吉野町なんですけど」

——はい。

「あの……その高台にあるんで坂を上ってる最中に、あのー、雨がすごいねっていう話をしながら窓の外を見たら側溝の……蓋、蓋ですかねそこから水が噴水みたいに溢れ出してるっていうのは見たんですけど、すごいねって言いながら、まあ言いながら帰ってきて」

——ああ、で。

「そのあと」

——はい。

「はい、もうちょっとバスに乗ってたなら、ちょっと帰れなかったかもねって」

——ああ。

「言いながら」

——もう15分遅れてたら……

「ちよつと大変な……」

——動けなくなつた可能性があるつてことですよね？

「はい、そういうふうにした話、覚えがあります」

——ああ、そうなんですね……じゃあ自宅の方は高台にあつたから被害はなかつたんですね。

「そうですね、とても……何もなかつた」

——ああ……

「ラッキーでした」

——そうですね、確かに、えつでも天文館一体は。

「はい」

——その帰る時にはまだ人がたくさんいてつて感じだつたんですね。

「はい、むしろたくさん」

——ああ、みんなその、雨がひどいから帰ろうつて感じ——だつたんですね。

「どうだつたんでしょう？私が帰る頃までは普通にみんなしてたと思います、そんなもー早く帰つた方がいよいよとかそんなふうな話にはなつてなかつたので、ただ

みんな普通にしてたと思います、バス乗る人とかみんな普通に並んでたし」

——んーんー。

「買い物している人とかも別にいたし」

——そうなんですね。

「そうですね」

——えつじゃあ急に水位が上がつてきた感じですか。

「そうですね、はい」

——そうなんですね。

「ですね、もう腰まで浸かつてたつてこと、なかつたですもん、帰ろうとしたとき」

——ああ、はい。

「だから、夕方から急に上がったんじゃないかな、あがつた」

——んん。

「強くなつた」

——そうなんですね、えつその、その時にどのように感じたかつていうのを聞きたくて……。

「はあ……そのときというのは、えつと、水害のときで

すか」

——そうですね、はい。

「そうですね、私たちはラッキーだったけど」

——はい。

「ほんとに、すごい大変で、あの、テレビで見てたー
んでですけど、報道されてるの、すごいみんな車の上に
乗って助け待ってたりとか車が流されてたりとか、その
ちよつと、信じられないような状況だったので」

——はい。

「怖かったですね、ほんと、こんなことに……（涙で声
が詰まる）」

——そうですね……

「残念だなあつと」

——はい。

「うん、すごいあの……下の方ですけど、あの、ちよつ
と、低いと（聞き取れない）と思います（声が詰まる）」
——えつと、そうですね……えつとじゃあ、インタビュ
ーはこれぐらい……ぐらいにしたいと思……

「はこ」

「出るのが遅れてたら」

居細工修さん

インタビュー 中村唯花

文字おこし 古賀洗圭

——じゃあまず、その8・6水害が起きたときは、その
おいくつで、なにをしていらつしやつたのかなつていう
のを聞かせてください。

「えつと、二十五歳、二十四ですね二十四歳で、えつとー
公立高校の教師をしました。今もしてるんですけども」

——そうなんです。その日は学校だったんですか？

「えつとー、基本的には夏休みだったのでお休みしてた
んですけども、用事あつて学校にいました」

——あつそうなんです。

「はい」

——じゃあもう学校でそのー、水害というか、水位が上
がつてきてーみたいなのを経験された、つてことですか
ね？

「あつ、えつと私は、ちょうどいいタイミングで学校—あの、休みだったので自由に出入りができたんですけれども—」

—あー、はい。

「あの雨がーひどくなってくる、っていうことだったので、まあでもその時はまだ、それほど降ってなかったので自転車、通勤だったので、ちよつと急いで、帰ろうと思って、あの学校、あのー、本格的にその水害という雨が、ものすごく激しくなる前に学校を出て、はい」

—激しくなった時にはもう、家にいたって感じですか？

「いや、激しくなったときはちょうどあの、帰宅途中だったので」

—あーそうなんですネ。

「はい」

—ちゃんと帰れたんですか？その時。

「あの無事に、無事にといふかあのー、普通に考えたら無事ではないんですけども、まあ雨の多い年でしたし、8月6日、だったんですけど8月1日にはあのー、鹿兒

島市内とかあの始良とか、霧島とか、ちょうど国道10号線でもものすごい、こう水害とか、水害っていうんですかね、あつたりもしてるので、まあ少しは警戒していたというか、もともとその勤めていた学校は鹿兒島中央高校っていう学校なんですけれども—」

—はい。

「あの甲突川沿いで、あのちよつと低い場所でもあるのでー、ちよつと雨が、降るとあのー道路のあの、路肩っていうんですか端っこの方にすぐもう水たまりができた、靴が、つかるぐらいーに、あの三年勤めてたんですけど、そういうことが年にー何回かはあるような場所だったんで、まああのー、ほん本格的にー降らないうちにと思って学校、出たんですね何人か、職員や生徒がいるのも、見て、あんまりこの人たちも遅くならない方がいいのになーって思いながらー、自分は、もう自転車だったのと、勤務日ーではなかったんで、で出て、まあでも出たときももう、あのー、合羽はきてたんですけれどもーもう、あの、下はズボンだったんですネ、ズボンはもうびしょ濡れになるぐらいの感じ、で、雨が降って、はい

その時、加治屋町出たときには、もう、あの服が、びしょ濡れになるくらいの雨は、降っていたんで急いで帰らなきゃって思つて、まあ自電車を漕いで、はい帰りまし
た」

——あーそうなんですわね。

「はい」

——じゃあ帰つた時はまだ(自転車)漕げるくらいだったんですかねですかね。

「そうですねー出たところは漕げるくらいだったんですけど、もうみるみる、なんて言うんですかね、上からたくさん降ってくるというのもあるんですけども、あの下に、水がどんどんこつ、入ってくるっていうか、溜まっ
ていくっていう感じになつてきて、でーえつとー、ちよつと具体的にどこまでっていうのは覚えてないんですけども、電車沿い、電車通り沿いを、あの一、自宅は真砂町
っていう郡元のちよつと先なんですけれども、電車通りをずつとこつ、下つていくっていうんですか、そんなイ
メージで、学校から出たところにはーもうあの一、ひざ下くらいまでつかるような水に、なつていて、でーあの一、

もうとにかく急がないと、つて思つてひたすら漕いだん
ですけども、途中からはーもう下が見えないんですよ、
で、何かあるかわからないので、急ぎたいんですけども
う自転車を、漕ぐよりも降りて押した方が安全だつ
て思つてー、進めそうだったので自転車を、降りて、押
してーはいまあ歩くつて言うか、もう本当は走りたいぐ
らいなんですけれども、歩けない、前になかなか進めな
いぐらい水が、溜まつてきて」

——はい。

「で、車とかーもう、ちよつと覚えている範囲なんです
けども車とかももう、あのタイヤが、もうタイヤに浸る
ぐらいまで、で、クラクション鳴らしてる車とかも、いっ
ぱいいてあと、もう乗り捨ててる車つていうんですかね、
何かそういう感じの、車とかも何か台かは見かけました」
——ああじゃもう、なんていうか車ーが動かなくなるぐ
らいの水位になつてきてたー

「もうはい、もうなつてきてましたね、もうほんとにそ
のーあつという間でした」

——そうなんですわね。

「あのー、びつくりするぐらい短い時間でもう、あのー自分も、なんていうんですか、今ならまだ漕いで家まで、帰れるって思っていたんですけども、もう、びつくりするぐらいの時間で、ただなんか、濁流とかそんな感じはなくてもう、もうあの、みるみる水位が上がってくるっていう、感じで、あのー、もう、ほんとに、それこそ学校ー、にのこってまあ建物がー三階、まであるのでーこれなら、学校に残ってて上いたほうが安全だったかな、ちよつとほんとにあの命の危険を、感じるっていうか、あのどこまで上がるんだらうっていう、そのぐらいの感じで」

——うんうん。

「はい、もう、ちよつとこれはただ事じゃすまないやつてのは、帰りながら、はい、感じました」

——そうなんですネ。

「はい」

——その学校に残ってた人たちってのは、その上の方に逃げたりとか、だったんですかね？

「あつ、えつと、ちよつと後でお話しようと思ってたん

ですけれども、学校……に残ってた……人、からちよつとあとで連絡がきて、内情はそのあと夜中に電話がかつてきて聞かされたんですけれども」

——はい。

「はい、私は無事にー無事についていうか、腰まで水に浸るくらいまでは、あのー、被害についていうか、あつたんですけれども、どうにか、もうどのくらい時間かかったかわからないですけども、どうにかあのーえー今という郡元の電停えーと、イオンがあるところ、あそこ昔ダイエーっていう、そのまま同じ商業施設だったんですけれども、あのあたりにつく頃には、もう膝とか、足首ぐらいまでに水がなつてて、比較的まだあの辺は、あのー水没してないというか」

——うんうん。

「はい、そこまではどうにか、逃げてきて、逃げてきてっていうかまあもう、帰宅路でしたので帰ってきて、でもうあの辺りがそんなに水に、つかるっていう経験はなかったの、この辺りでもこんな感じなんだなーって思いながらー、まあでもそれでもまだその頃は雨も降って

ましたし、まあ、どうなるか分からないな―って思いながら―そこからはどうにか無事に、家に帰りついて、自宅はあの真砂町―っていうところに、親戚が―病院をやつていてその、看護師寮が空いていたんで、そこに―入れてもらつてたんそこは二階、だったので、その二階に、ただそこもあの―帰りつく頃には、くるぶしぐらいまではつかるぐらいはもう、水が来てゐるって―いう感じ―
―そんなんですね。

「ですね、もう全然無事な、完全に無事なところって―うはないくらいまで、降つてたな―って思います」

―もう、鹿児島市―帯が、すくなくともその―

「そうですね」

―くるぶしぐらいには―って―いう。

「はい」

―あ―そんなんですね。

「こう、甲突川沿い、とかあの辺、市内の中心地とか、あの辺はもう、ほんとに完全に、あの―、後でニュースとかで見て知つたんですねでも、一階部分がもう冠水するとかそういう感じだったみたいですね」

―学校も、一階は沈んだりとか、したんですね？

「そうですね、学校もあの一階はあの―、水に、浸かつてたつてのはまあ、二日後に、学校に実際に行つてみて、あこまで浸かつてたんだな―とかつてのは、見たんですけれども―、まあ帰り着いて―ニュースで見て―テレビつけてみたらやっぱり、その―もう、全国ニュースで出るくらいな感じで、えつとなんかあの、選挙ではないけれど、政治のニュースみたいなのを盛んにやつてるのに、あの、鹿児島その水害の様相がそのインサートされる―って―いう感じで、あのテレビですね、なんかもともとその、水害特集―って―いうか、もうもちろん、あの、他の局とかNHKとかは、そうだった（水害の様子を放送していた）んですけどまたまた自分がつけた局は、あの―政治のニュースみたいなのが―こう、ピクアップされてるのに、鹿児島の様相です、みたいな感じで―

―あ―そう、そんなに（ひどかったんですね）。

「はい」

―全国で言われてたんですね。

「そうですね―もう、今こんな状況です―って―言つて、自

分がさつき、通ってきたところとかがもう完全に、車かもうほんとに、もう動けなくなるとかそういう状況とか、あとやっぱりあの、テレビ局とかも、MBCとかは多分もう、甲突川沿いとかなの、でちよつと取材に出られなかつたんですかね？なんかあの、上の階から撮ってるような、映像とかを見た記憶はあります、もう完全に浸かっているとかですわねそれで、今みたいにこう、スマートフォンで画像撮るとか、そういうこと全くできない時代なので、あんまりいろいろそういうが残されていなかったりだとか」

——はい。

「だと思っんですけれど、はい、まあ、いくつか同じような場面が何回も、全国版のニュースで流されて、あーもうちよつと、出るのが遅れてたら……つておもつたり」

——あーそうですよね。

「はい、(思つたり)しながら見てました」

——あー、なるほど。

——その経験をして、どんなことを感じたのか、ということ(教えていただければ)

「そうですね、今はいつぱいこう、天気ของそういう一例えば、線状降水帯とかつていう言葉もそのころはなかつたですし、もう、予報で何時ごろにこんな雨が降るとかなにも分かつてなかつたので、まあ今はだいぶ、そういう天気予報の精度とかも上がっているとは思ってますけれども、あのやっぱり、水位に対してその、家屋が低い場所とか、どの経路を通つて逃げればいいのか、あともう、こういう時に動かない方がいいっていうのとか、例えばそれこそあと五分十分出るのが遅くて、あの中に巻き込まれてたら多分助かつてないよなーとか、雨が降るつていう時にも高い建物だったら、雨が止むのを待つて上で避難するとか、なんかそういうこともほんとに必要だつただろうと思えますし、結局後でほんとに分かつたことなんですけど、夜中に12時すぎぐらいに電話がかかつてきて、昔は今みたいに個人情報とかすぐく、こう、なんちゆうんですかね、大事に保護してない時代で、学校とかだつたら、職員とか生徒・保護者の、家庭全部の電話番号とかを載せた薄い本みたいなのを年度当初に配つて、緊急連絡とかがあつて、そのあと今度は、緊急

連絡のクラスごとの（ものになって）、だんだん変わっていつて今はなくなってるんですけど、そのころは多分冊子とかがあったと思うんですよ、まあ、職員の間先一覧があったのかはわからないんですけど、もうちょっと記憶がはっきりしないんですけども、うちに、そのある生徒から電話がかかってきて、その生徒はあのー学校に残ってた子だったんです、それで学校に残っていた子が、僕が自転車で帰る姿を見たらいいです。校舎内の上の方から見て、で居細工先生は無事だったかな？と思って、電話をしてきて、その子も実はもう、そこで被災してるんですけども、学校に残っていたら、あのーどんな水位が上がってきたので、残っていた職員の指示で学校の、中央高校の一階の入り口にすぐ事務室があるんですけども、事務室にある重要な書類とか、あのー水没したらいけなさそうなものとかを職員の指示で全部、二階の職員室に運んで、手分けして、何人くらい残ってたかまでは、詳しくは聞かなかったんですけども、その、事務職員のあのー引き出し、とかも鍵がかかっていない引き出しとかももちろん、書類とかあの運べるものを、

手分けしてみんなで運んで、で一階段を上ったり下りたりしている間にほとんど、もう水が上がってきて、一階にもう下りられないくらいになって、二階に避難してたらしいんですね、で、すこし雨がおさまって、九時過ぎか十時過ぎぐらいに消防の方が来て、でーもう水がだいぶ引いた頃に、あの、みんなもう校舎で電気つけてますから、であと窓開けて助けを求めてみたいで、消防の方とかに、こう、連れて行ってもらって、たまたま、交通網とかも何もありませんし、あと家の人に迎えに来てもらえるかどうかわからないような状況だったので、その学校近くの、加治屋町の病院、とかに分散して、あの、まあ（その病院は）避難所じゃないですけどそんなところに残り残された人とか、あの何人か、自宅にいてあぶなくなつた人とかが、近くの病院にこう、保護してもらって、それで病院でその子は保護されて、自宅に電話してーあの、学校にいたけど無事だったーって（その子が親に連絡した後）、そういえばあの自電車で帰ろうとしてた人は、大丈夫だったのかなーって思って電話をしてきて、でまあその、電話の中で学校の様子、とかそういうのも

こう、教えてもらって」

——はい。

「まあ、僕も学校に残った人たちは大丈夫かなーって心配したり、まあでも学校だったら上に逃げれば安全だったかなーっておもったりしたけど、まあどうにか、無事に、家に帰りつきましたよって話は、はい、そこで電話で（話して）」

——ああそうなんですネ。

「はい」

——貴重つていったらアレですけど、ほんとに、みんなができるような経験ではないので

「そうですね、あのーほんとにまあ、まず無事でよかつたなつていうのと」

——そうですね、たしかに。

「そうですねー、あのー、変な言い方ですけど、雨がすごい多い年で、まあ、八月の、七月の終わりぐらいからずっと降っていたので、みんななにかしか、ちよつとその心配はしてたと思うんですね、まあこんなレベルのものではないにしても、だからまあ、はやく帰らなきゃと

か、まあそういう判断もできたと、思いますし、ただやっぱり、何分その、（街が） こういう雨とかに弱いなつていうのは、凄く感じました、はい」

——なるほど。

「あつという間に水浸しになつて、でやつぱりーこう、大きな川が流れている周辺に、まあ、鹿児島自体がそのー平地が（広がっている）、もう甲突川つていうか大きな川沿いに広がっているようなーところなので、まあ、なにがしかやつぱりちゃんとその、避難をするとかー、まあ避難場所ーとかですネ、そういうものが、こう、日頃から示されるべきだろうなーつていうのは、その時には、はい（感じました。） もう降り始めたら慌てて動かずに、高いところに避難するとかー」

——はい。

「まあ、ええそうですね、その学校も体育館は下が学舎とか、二階が柔道場で三階が多分、あのーアリーナつていう大きな体育館になつてると思うんですけど、そういう上の方に避難するとか、避難場所として近所の人たちにもなにかあつたらここの、三階に逃げてくたさいとか、

そういうーあの、もう多分今はそう（避難場所を近隣住民に知らせるように）なってるとは思ってんですけどもー」

——はい。

「はい、でもあ、ここはあのー、海抜何メートルです、とかの表示も、その前までは多分、なかったと思うんですよ」

——ああもうそれ（水害）をきつかけにできたっていう。

「じゃないかなーっていうくらい」

——そうなんですね。

「はい。でやっぱりその、普通に生活してると分からないうですもんね、あの、自分たちがいる場所が（災害が起きやすい場所なのか）、あとそれと、次はまあ、だいぶ後になるんですけど東日本大震災とかのあともやっぱり、津波とかがあったので、水害っていうことに関しては、今はだいぶこう、そういう経験が活かされて、まあ逃げる場所とか高いところとか、すぐに動くとかですね、まあなってるのかな（身についている）って、はい、思ったりしてます」

——ああ、そうですね、確かに。

「はい」

——やっぱり経験からいろいろ学んでいくっていうことですよ。

「そうですねーまあ、はい、避難場所とか、方法とか、まあもつとこうよくなると思いますし、ただあのー三十年経っているので、まあ、なかなか鹿児島でもうちの子もそうなんですけど、僕らがそういう経験をしているっていうのは知らないですしー、あと私もまだ今教員してるんですけども、避難訓練とかでまあ、地震とかーあと火事はやるんですけども、あのー水難事故とかそういう、まあ教室掲示とか、そういう災害教育なんかは（地震・火事の避難訓練の）ついになって言ったらおかしいんですけど、（災害教育は）やるんですけどーこういう、被害があった場所だっというのとはほんとに被害があった地域、例えば中央高校とかそういう場所とかで、されてるぐらいなんじゃないかなと思うんで、まあ、鹿児島水害、こういう大きな災害を経験した地域、の防災教育のなかに、もうすこし取り入れられてもいいのになーっていうのは、個人的には思ってたりは、はい、します」

——確かに、そうですね。

「はい」

「自分で考えなさいよつちゆうこと」

折田俊也さん

インタビュアー 秋月佳奈 稲富叶都

文字おこし 秋月佳奈・川北実鈴・稲富叶都

鮮明に覚えているのは、

——はい。

「水害の危機感より、あんたなんかにもわからんかもしれんけど、この橋の向かいは今の所が見えるでしょ

——はい。

「あそこがパチンコ屋があったの。あつたつちゆうか、8月7日にパチンコ屋がオープンするという予定になってた。オープン前の直前前日だった、水害が」

——はい。

「私はパチンコをする人間だから、そっちの方に興味が

あつたつて」

——はい。

「うん。だからそういう意味で記憶は残ってんだけど、ちようどね、時間の記憶がはつきりしてないんだけど、ここの前の道路が、3時か4時か。どっかその（あたりの辺りの）時間帯だと思っただけど」

——はい。

「高麗町側が、水が来てるもんだから、ここが渋滞したわけ」

——はい。車とかがですか。

「車が」

——はい。

「普段こんな（風に）して、（車が）たまることはないのに車が詰まったから、『あれ何でこんな詰まってんだろ』と思つたら、あつちからね、高麗町側が、もう水が浸水してて、もう渡れなくなってるわけ。これ橋を渡れば天文館側ももう水が来てる。だからもう南にしか行けないわけよね車は、だからここに溜まったわけ車が、たくさん」

——あつち側の水が氾濫したってことですか。

「あの、この電車通りを渡った下の方はもう水が溜まっていた。こつちからすると3mぐらい低いからね向こう側は」

——それで天文館側まで浸水みたいな。

「自分は見てないけどこういう記憶によれば、結局草牟田とかあつちの方でも水が氾濫して、天文館側と西田側にそれぞれ流れて行き着いたのがここになるわけ。西田の方から出た水が。西駅（西鹿兒島駅）、（今の鹿兒島）中央駅を通ってここに最後たまるわけよね。だからもう車が渡れなくなつて、ここにちよつとした渋滞が起きたわけ。それが時間で3時か4時か。ちよつと記憶が曖昧だけだね」

——夕方前ぐらい。

「夕方前ぐらい。こういう薄暗い感じだったわけね」

——そのときは何歳でいらつしやつたんですか。

「30年前だから28（歳）かな。ちよつとここが実家だから、親父も健在で、親父と母と3人で仕事してて。それでちよつとその年……前の年の年末に自分はここ（地）に戻ってきたのかな。その車が渋滞しだしたからおかしいなど

思つたら高麗町側が水が氾濫してて、氾濫というか、溜まつてて動けなくなつて、ほいでもうここに車が溜まるど、お店の駐車場がちよつと下の方にあるんだけど」

——はい。

「最初の角のところにあるんだけど、車が入ってくるのができん（出来ない）わけでしょ。ですからお客さんも来ないって判断ができるでしょ」

——はい。

「来ようと思つても来れないわけだから。だから『もうこれは客は来んわ』と、だからもう俺パチンコや見に行つて来るつつて」

——はい。

「水害の恐怖よりそつちの興味のほうが強かつたから」

——はい。

「橋を渡つてパチンコや覗きに行つたらね、当時ここに働く予定の従業員の若い子も散髪に行きよつたから、はい。そういうのもあつて、情報は入つてたから覗き見た。隙間からそういう店を覗いたりしてて、（そうし）たら、そのパチンコ屋の従業員が土嚢袋を持って店を浸水しな

いように準備をし始めたから。あれ、何か情報が入ったんだろうなっちゅう。他の店からね、水が来るよっちゅうのを多分予測して、多分、準備し始めたんだと思う。それで自分も諦めて橋を、武之橋を渡つて戻つてきたわけ。でも、当然お客さん来ないからさ。暇やなと思つて」

——はい。

「タバコどん吸いながらその壊れた武之橋の上で、濁流を眺めながら、夕涼みっちゅうか」

——もうその武之橋はもう壊れたつてことですか。

「うん。そう。（君は）全く知らないわな」

——はい。そうなんですよね。

「（地図を示して）こちら辺がだから私の店」

——大分ですね、こんな水が上がつて来るつて相当ですね。

「こつちはもう、なんちゅうの水はこつちが天文館側だから、こつちが来るけど、こつち私がいるこつち側は全然水が来てない。でも川の傾斜を見ればわかるけどそこがカーブでしょ」

——はい。

「ここはカーブの出口なんだよね。水が流れる」

——はい。

「それに耐えられなくなつて橋が、崩壊したわけ。流木とかがね、この橋げたっちゅうかここにいつぱい溜まつてたんだよ。上流から流れてきて橋に引つかかつて、ほいで、自分（は）橋の上に眺めたから」

——はい。

「音が、ガンガンいろんなものが当たる音が……」

——聞こえるもんですか？

「うん橋上にいたからねそのときは。（そし）たらもう、消防の連中がもうここに公園の前に、一応、来てて」

——はい。

「ほいで、何て言うのかな。ちよつと危ないかもしれないから通行止めにするから、橋から降りてつて促されて、自分はもうしようがなく橋から降りて、部屋に戻つてきたんだけどね」

——（地図を示して）こちら辺で見るといふことですか。

「いやいや、この橋。元々この壊れた橋の、この辺いた

わけ。橋の上に乗ってタバコ吸いながら眺めてた。ここに消防の連中がいて」

——はい。

「どつかこの写真でこの辺に水位計のあれ（写真）があるんだけど」

——はい。

「高さが何メートル何センチって書いてるのは、消防のし（衆）がそれ確認しながら『ちょっと危ないからもう降りましょうか通行止めしてます』って（言って）自分も降りてきて、こつち戻ってきたね」

——それこそ僕がずっと桜島に住んでた（出身）んですけど。それでおじいちゃんおばあちゃんとかも結構いるんですけど、あんまり桜島って（8・6水害の）被害がなかった。それこそ、天文館とか……違う平地の方が結構被害出てましたって、いろいろニュースとかで見たんですけど、なんかこつちはもうほぼ水が来なかったってことですか。

「ここは全く水も来ないし、このどぶがあるでしょ、どぶっていうか側溝がある。ここの水もサラサラ流れてた

から。だから下から溢れることもなく、こつち一番（標高が）高いわけ」

——当時のニュース的には一番被害が大きかったのはどこらへんんですか。

「山が崩れたって言えば坂元の辺も崩れてるだろうし、ほいで、このときの水位で言えば新照院。新上橋があって、あの草牟田の3号線治い。あれが大体2メートル50（センチメートル）から3メートル近く。あの辺は。3号線治いは水が上がってるから」

——道路から2メートルってことですか？

「うん、人がもう完全に飲み込まれる高さあったらしいから」

——すごいですよね。

「友達の印鑑屋のあれでどつかこの辺に跡がついてたんじゃないかな。国道3号線治いの」

——だからやつぱあれなんですわね、ω号、ω号治いの家って基本1階がないですよ。

「あー最近……水害に遭った後の家はもう1階はもう車（の駐車場）だけにして、ちよつと底上げもしてると思う」

——この武之橋は崩壊してからどのくらいで復旧したんですか。

「いや、もう復旧してないよ。あのほら、ないもん、橋自体が」

——あれは新しくできた橋ってことですか。

「これはこれ。電車が走っている。(昔の写真を見せながら)」

——あもう一本あったってこと(ですか?)

「そう、もう一本石橋があった」

——それが壊れたってこと

「それが壊れた」

——その時って、ずっと雨が降ってたんですか? 前日とかからも。

「ちゅうかね、今(の)時期、梅雨の初めの、6月からいに梅雨入りするでしょ? 鹿児島の場合。普通に確か、自分の記憶じゃ普通に梅雨入りして、そこから、8月、この水害が起こるまで晴れた日がほとんどなかった。もうほとんど土砂降り、なりの雨、曇りって、自分の記憶がね、もう雨ばっかい」

——それで徐々に徐々に溜まって行っただけみたいな。

「うん、だから今で言うなんちゅうの、地下に地下水が溜まつてるみたいな言い方するの」

——結構、始良とかの方も結構被害が出てたんですよ
「前の週とかだったのかな」

——あ、8月6(日)じゃなかったってことですか?

「鹿児島市内、天文館がやられたのは8月6日だから

……」

——そんな感じだったんですね

「だからその前に台風が来て、霧島とかあつちが8月の初めくらいじゃなかったかな」

——先が、その台風が先立つ、台風の被害が……

「台風が来て、霧島方面が大雨で土砂崩れとかがあつて、そいで翌週が8月6日で今度はこの辺が、この辺がちゅうか、鹿児島市がやられて、んでその翌週くらいにまた台風が来て、また、川も氾濫して、この辺もまた高麗町が浸水したからね。2回浸水してるから」

——86水害の後?

「後の週の。だからずーっと雨って記憶。大雨、しとし

と雨、もう交互にずーっと」

——じゃあもう、その86水害で天文館とかが浸水してるわけですよ。で、それでまたずっと雨とか降ってたら1、2週間ずっと浸水してるってことですか。

「いや、一旦（水が）はけるのよね」

——また……はけてから、また

「はけてからまた、降る場所によるんだろうけど。結局、川の上流で大雨が降れば土砂崩れがあつて、その土砂が流れて木が引つかかつて、また低いところが氾濫して、2回目は天文館までは（浸水が）こなかつたんじゃないかな。高麗町側は来てたけどね、たしか」

——水害の当時とかつて、知り合いとかで結構被害受けた方つていたんですか？

「うん、さつき言った同級生の印鑑屋さんもだし、ほいで、天文館の飲み屋さんで地下でやつてる同級生が……飲み屋さんがいただけけど、そいつもちょうど、その8月の日の橋が壊れて、さつき見た橋が崩壊してから、自分なんか公園でウロウロしとったから、そいつが自転車で来て、『どこ行つとよ（どこ行くんだよ）』って言ったら、『店

を今から見に行く』っちゅうから、『あ、じゃあ俺も一緒に付き合うが』って言って、『ここは通行止めやっど』ちゅつて、天保山橋まで回つて、あつちから回らないところ、橋渡れなかつたから、自転車で天保山橋を回つて、ほんで天文館の方に自転車で行つて」

——そこも浸水していた？

「うん。その時間帯、9時から10時かだったと思うんだけどね、もう時間ははっきりしてないんだけど、水は天文館引いてるわけよ。もうその時間帯は引いてた。だから、自転車でお店の近くまで行つてたわけよ。それで、『あれ、もしかしたら大丈夫じゃない』って一瞬夢見たんだよね。で、お店の前に一本足をポチャつて入れたら、もう満水だったわけよ（笑）一歩目でぼちゃんだったの。もうそこ、浸水して、完全に満水で、ほで、翌日『手伝うが』つつて、あの、排水の手伝いに行ったのよね」

——そんな天文館の排水ってどうなるんですか、地下とかは、汲んで出す？

「いや、ビルの、あれがあるみたい。ポンプが一応、そういう（浸水した）場合に。でも結局、停電とかいろ

いるな影響でそのポンプが作動しなかったって。翌日行ったら、朝まで（作動していなかった）。だからもう満水状態なのよね。ほいで、自前で、買ってきたのかな、ポンプを買ってきて、小さいポンプで（水を外に）出したけど、まあ、なかなか減るもんじゃないよね。ほんでもう、バケツリレーだなんだしながらやってたら、その、ピルのポンプが作動し始めたのかな。そしたら、バーって結構なスピードで（水が）減っていったって、結局水、一旦排水できてそのお店のドア開けたら、天井に、あの、コースターってわかる？ コップを置く四角いの、あれが天井に張り付いてたの。ちゅう（という）ことはもう、完全満水。だからその記憶は鮮明に残ってる。もし地下におれば（居れば）死んでるなあ……って」

——死者とかも結構出たんですよ

「死者は、もう、自分の知り合いでは友達の前父さんが亡くなったのが……」

——（記録誌をめくりながら）ですね、9月くらいからどんだん……（雨が降って）それこそ、この前授業で動画があつて、86水害の。ずっと雨が降ってて、雨に慣れ

ちゃったみたいなの、市民の人が……（という証言があつた）

「慣れたちゅうか、その、また雨かつちゅう感じはあるんよね。でも、（川が）氾濫するとはみんな思つてないから」

——8月6日のやつ（大雨）は台風とかではなかったんですか？

「いまでゆう、線状降水帯ってやつじゃない？」

——被害、鹿児島以外もあつたんですか？九州の方は「いやこんときは、鹿児島がメインじゃない？全国ニュースになつたくらいだからね。それから10年くらいして、大分とかあつちが似たような水害があつたよね」

——（記録誌を見ながら）1年の中でずっと雨降つてた感じですよ

「1年のちゅうか、梅雨入りしてからね。6月のとか、まあ普通に6月初めぐらいから梅雨入りして、ずーっとダラダラと雨が毎日降つてたイメージ」

——それはその年だけだったんですか。次の年はあんまり（降らなかつた）みたいなの……

「普通は昨日みたいなき、晴れ間がある日があるよ。たまにあるよ。そういうのがなかったつちゅう記憶だけはあるね。ずっと、ずっとこんなどんよりした天気ばかり」

——その頃つて速報でニュースとかいろいろ出てたんですか

「今ほど情報は多くはないよね」

——基本、人伝え的なかんじですかね

「ニュースの時間帯だけ。特番が出るわけでもないし、(ニュース速報の)字幕が出るわけでもないから、ま、天気予報の時間に警報が出てますよ、とかレベルじゃなかったかな」

——そんなレベルだったんですね。緊急で、それだけメインとか(の番組が放送される)でもなく

「あんまりそういう記憶はないね、情報に関しては。だから、居るこら辺のことはわかるわけよ。実際こつから見ても川が溢れる気配はないから、こら辺はね。だからもう危機感全くゼロなのよ。自分とすれば。でも、車が溜まるくらい、『動けなくなるつてなんでだろう』つ

ちななるがね。(そし)たら、結局今パトカーがいるあつち側全部浸水してるから、『これじゃ車詰まるわな』つちゅう感じ」

——いや、だつて、あんまりだつて距離ないですもんね。そんなあつちが浸水してたつて。すぐそこですよ。

「うん距離で言えばね」

——結構怖くなかつたですか。

「自分たち(聞き手たち)はあつちから歩いてこなかつたつけ?」

——そうです、来ました。はい。

「あそこのパスタ屋分かる?緑の屋根のところ。あれが2階だからね」

——あそこら辺はもう基本一階浸水みたいなの。

「だから、ここの高さとか向こうの2階の高さがほぼ一緒だから」

——あー、そうか。そう考えると高さが全然違う。そしたら、浸水するか。鹿児島つてそんなに標高バラバラですか?」

「あんま(あんまり)普段気づかないよ。だから自分も

そんな意識なかったもん」

——鹿児島で水害とかで、武之橋壊れてそれ以外何かあったんですか？壊れたりとか。

「いや、この橋は、そのとき壊れて、五大石橋って、(石工)岩永三五郎さんが作ったあれ(石橋)があるでしょ。結局西田橋は残ったのかな。新上橋って聞いたことがあるかな？新上橋も崩れたから」

——(国道) 3号線扱いですもんね。

「うん。玉江(橋)も崩れたのかな。もちろん現場は見えないけど、それを石橋公園って言うって」

——清水(町)のほうですよ。

「うん。海岸沿いのあの公園に、あつちに移設したわけ」
——それで(石橋記念公園が出来た)ってかんじ……

「あそこに最初から石橋があったんじゃない。その遺産だから残そうということ、あつちに作ったわけ。水害の記憶も含めてだろうけど」

——高校、僕は玉籠(高校)だったんで、石橋公園とか結構友達と行ったたりしてた。

「ああ、広場だからね。遊ぶとこでしょ」

——そんなことがあると思っただけだった。だいぶ前からあるやつだと思っただけ。

「だから水害が30年前。移設したのが、そこから何年後だったのか記憶はないんだけどね。だから崩落したさっきの石なんかも全部集めて、運んであつちでまた作り直したんだから」

——そうだったんだ。あつち側はそれこそ被害はなかったんですか、その、石橋公園の方は。結構浅くないんですつけ？

「あそこから国道10号線ってわかる？加治木の方に行く」

——仙巖園のほうですつけ？

「仙巖園から始良、加治木に行く国道10号線で海岸線があるでしょ、海辺の。(8・6水害に関する雑誌をみせながら)これが国道10号線なの」

——こっちは桜島ですつけ？

「こっちが桜島。土石流で車立ち往生になって、こんなしてみんな避難して、それでフェリーが助けに来たりしたんだよね。もうこっからどっちにも(車が)動けなくなってるから、もうみんな車捨てて、船で安全なところ

に桜島に渡つたんじゃないかね」

——その後の車の処理とか（はどうしたんですかね）

「いやもちろん土砂なんかをどけてからしたんだろけ
ど、これに関わつた友達はいないから、あまり詳しくは
知らないけど」

——写真のなかに相当台数（被害にあつた車が）ありま
すよね。

「相当数あるはずだよ。ここ何車線け、片側〇車線だか
ら車線道路だから幅も広いからね。だから、そっか
ら翌年ぐらいから、100ミリを超えるような雨量のと
きには通行止めになつたんだよね。ここの山の勾配が結
構きついでからね。だから、大雨が降ると崩れると道路に
影響があるつちゅうのはもう分かつたから」

——この帽子かぶつてる人は自衛隊ですかね。

自衛隊、消防、警察。

——毎日駆り出されてますね。

「（写真を見ながら）これが、甲突川の上流。郡山つつつ
て。水源に近いところ。ここが崩れたから、ここは細い
川だつたはずなのよ。それが全部削れて、それが全部流

れてきて」

——これとかすごいですね。

「これはもう、翌日の残骸がもう水に浸かつたやつね」

——すごいな。

「これが武之橋だからね」

——あー、そこ（に昔あつた橋）ですか。

「うん。あつたやつ。今映つてるビルはこれ、だから店
がこころへんつちゅうこと」

——武之橋つて僕見たことないつてことですよ。

「もちろん生まれてないもんね。五大石橋つつてもさ、
わからんよね。（写真を指さしながら）ここが（国道）
3号線沿いのパチンコ屋の時間毎の（防犯）カメラの映
像。草牟田のパチンコ屋さんのカメラだつて。夕方の5
時ぐらいで（水が）膝ぐらいやったのが、6時で腰まで
きて満水だもんね。多分この頃が満潮の時間と重なつて
るんだと思う。（罹災した花倉病院の写真を見て）あ、
この人お客さんだ。警察官の人だね。私より（歳が）〇
つ3つ上の人なんだけど。だから、この『花倉病院の処
理に行つたよ』つって、『凄かつたよ』つて（いつてた）」

——原型ないですもんね、病院の。竜ヶ水授業で行きましたよ。なんか石碑が竜ヶ水(駅)に(あつて)。電停(駅)にあつて、8・6水害の。

「あー、じゃあ後(になつて)作ったんだ」

——作つて(あつて) それを見に行つた。

「私はまだそれを見たことないな」

——(写真を見て) すごいな……

「JRごとおつさられたんだからね、土砂で。これ(災害の記録誌)は大学には持つてないの?」

——多分、ないと思います。

「これ、持つて行つていいよ」

——いいんですか?

「二応、返して貰うことにはなるけど」

——なんかそれこそ、授業が8・6水害の被害とかをインタビュウして、なんか本を作るみたいな。各班(でインタビュウを集めて)。だから、見ます。

——断水とかあつたんですか。やつぱり。

「こちら辺も断水したよ。河頭の浄水場がやられたから」

——どんぐらい断水だったんですか。

「1週間近く、3日ぐらいは続いてたという記憶」

——どうしたんですかそのとき。

「だから、どうせ店開けられないし、うちは全く被害ないから開けようと思えば開けられたの。でもほら、みんな大変なときにしれつと営業してるのも無神経でしょ。だからもう自分はさつき言つた天文館のそのお店の手伝いに行つて、さつき言つた3号線の印鑑屋の友達もいるんだけど、そこにも終わった後、顔だしたら、もうそっちはゴミ出し終わつて、もう1人同級生が新上橋の近くでガラス屋さんを当時してたのがいたんだけど、そこももう泥だらけやったから、夕方そこに手伝いつちゅうか、泥かきに行つて。2日3日ぐらいは加勢、手伝いに行つたね」

——断水して、家での飲み物とか大丈夫だったんですか。

「ちよろちよろつて蛇口ひねつておけば、ぼちよぼちよぼちよぼちよと出るわけ。だからそういうヤカンに溜めて、ガスはついたから出す。お湯を沸かしたりとか、もちろん風呂とかは入つてないけど、シャワーもお湯にな

ることもないけどね」

——結構、後が大変ですよね被害出てからも。

「だから、泥が来てるから、そのω号線沿いの人は水で泥を出せないわけ。だから、いらん（いらんない）こういう机とかねもう使えなくなつたのは（建物の外に）出せるけど、泥かきをただ、手でかくしかできない。水で流すことができない」

——それ、めっちゃ大変ですよ。

「だからもう、かなり臭かつたし衛生的にどうのこうのつちゅうのは後でニュース番組なんかでほら、大腸菌とかさういうのも、そつから言うようになったのよね。水が出ないから掃除しようがない。だからもういらんものとりあえず外に出すだけ。使えなくなったものを。だからさっきのゴミの山が（記録誌に）あつたでしょ。あんな（風に）して、とりあえず道路沿いに出して、その業者が回収してくれたのか。自分たちでゴミ処理場を持っていったのかその辺まではわかんないけど」

——そのときに戻ったら何かしておいた方がいいみたいなおことはありますか。

「あのほら、今の報道は自分の命は自分で守れつつゆう言い方をするでしょう。（若い頃は遊びたい盛りだがね、年代的に。雨が降つても約束してたら出ていくでしょう。だからその辺は自分で考えなさいよつちゅうこと。もちろん経験値も浅いわけだから。さっき言つたようにこつちが低い高いも、みんな知らないわけでしょ。もちろん経験したらわかるけど。そこが大事だよ。わざわざ山の友達のところに行つたりするのはもうやめた方がいいと。それはもう、それぞれの自己判断だから。行つてから、『ああ、行かんから良かったん（行かんなければ良かったのに）、ほら、バカやが』って言われるわけだからね」

——全部自己判断になりますね

「変な予感」

福永裕美さん

インタビュアー 大久保和夏

文字おこし 大久保和夏

——8・6水害についていくつか質問させて頂きます。

「はい」

——その頃どこでどんなことをしていたのか教えてください。

「8・6水害の当日は私通常どおり仕事をしていました、会社は天文館にありました。私、集金の仕事をしてましたので、唐湊が担当地区だったんですね。で、ん？て思ったの。もちろん雨がずーと1週間ぐらいうずーと降り続いてたので。その雨の中でも集金のお仕事をして回ってたんですけど、寮のこの坂だけど、この辺も回ってたんですね。そしたら、えーっと、寮のその目の前の今ゴミステーションがある所かな、あの辺がこう坂（急な坂のジェスチャー）のはずなのになぜか側溝から水が噴水の

ようにこう（勢いの良い噴水のジェスチャー）出たの。こんな坂で、下りていくのになんでこの辺から噴水のように水が溢れるのかなーと思って、不思議だなーと思いつながらその日は仕事を済まして、えーっと何時くらいだったかな？3時ぐらいに天文館の会社に入りついたらかな？そこで仕事を済ませて4時ぐらいに、えーと、会社を出て自宅が小野町なんですけど甲突川沿いなので、自宅に帰るのには甲突川の橋を渡らないと帰れなくて……で、その時に普通に傘さして、橋を渡って自宅に帰りよったんですよ。そしたらその川の、水面が、いつもになくものすごく上がってたのね。で、まあ台風とか大雨があつた時に甲突川がやっぱり水位が上がるんですけど、なんか見たことがないような高さだなと思って、ちよつと怖いなあって感じたのね。本当に。で、なんか変だな。この甲突川って思いながら。おつかしいなーと思いつながら家に帰って、なんか変だよなーって。なんかあつた時のためにお水を貯めようと思って。お風呂の浴槽にお水いっぱい貯めたんですよ。なんかあつた時はいかんよねと思って、子供に言っつてすぐご飯を炊いて、お

釜でぐらい2回ぐらい炊いておにぎり作ろうって、なん
でか知らないけどね。8・6水害があるんだなんて思っ
てないんだけどなんか変な予感がおにぎりをいつば
い作っておいてたんですよ。で、まあ何かあった時のた
めに懐中電灯はもともと持ってたけどそれも準備して、
で普通にあとは晩ごはんのおかず作ったりとかしてたの
ね。そしたらなんでわかったのかな……テレビでゆつた
のかなあ、ちよつとそこも覚えてないんですけど氾濫し
たような事になっちゃって、でパツと外を見たらいつも
歩いて帰ってくる道路が川みたいになっちゃって、あの、
側溝も見えない。道路ってこー横に側溝があつたりしま
すよ。その辺もうどこが側溝かわからないぐらいバーっ
て、水が上がってきて……でももちろん家はちよつとこ
う坂になってて坂の上のほうに家が建ってるもんだから
別にそんなに被害はなかつたんだけど。坂があつて道路
があつてこつちの平地に家を建てている人たちは……あ
の、浸水あつという間にデデデデって川の水位が上
がって、浸水ですよ。で、みんなびつくりして、まだ歩
けるうちに隣にフジカラーっていうコンクリートの会社

があつたからそこにみんな逃げたみたい。そこ三階建て
だったかな？だからそこにみんなパーツと逃げたみたい
なんですけど、うちはほら高台でちよつとこう上がつて
たからそういう逃げたりとかしなくてもよかつたんだけ
ど。でも本当にその辺一帯、川状態。初めての経験でし
たよ」

——そのようなことがあつて変化したこととがあります
か？

「変化っていうと……例えばどういうことかな？」

——それがあつたからなんか……ここは家が壊れちゃつ
て困ってる人がいたとか。

「あーそういうのね。まあその日はそのままみんなほ
ら動けないじゃないですか。暗くなってくるし。その日
をとにかくやり過ぎしかなくて。私はもう自宅でよ
かつたんだけど、うちより下の人たちはみんなフジカ
ラーの建物に逃げ込んでとにかく一晩過ぎさないとなん
にもできない。周り全部暗いし、外に出ようにも川だし。
出ると、側溝に落ちたりすると怪我するじゃないですか。
だから多分みんなそうやって一晩静かに、暮らして日が

昇るの待つてたんだと思う。日が上がってきたら世間が見えるじゃないですか。で、その頃には、一晩たった次の朝ぐらいには水は引いてたけど。でも、やっぱり氾濫するとね泥水になるね。だからもう周り全部泥だらけの泥水で、においは臭いし……でそんな状態だったよね。

その中私は雨靴はいて、あくる日は仕事に行つて、天文館までどうにかこうにか仕事に行つて被害にであつた人たちにタオル一枚でもいいから自分の担当してるおうちに行つてちゃんと一枚ずつ配つてくさいつて言われて、雨靴履いて唐湊まで来たんですよ。そしたら、ここも大変な事になつて、うちは甲突川だったけど、こっちはその目の前の新川が崩れちゃつて、でもう泥水だらけで匂いもすごいし挙げ句の果てには川の鯉が道路にいつぱい死骸になつてあるんですよ。で、魚だから。しかも夏だから腐るの早いじゃないですか。泥プラス魚の腐つた臭いで、もうすごかつた」

——そうなんですかね。

「ええ、ええ」

——じゃあそのあと感じたこととかがあつたら教えてく

ださい。

「だからねえー。初めての経験だからそしてその後始末が大変なんですよ。その泥水を流して掃除をしないといけないじゃないですか。その作業は私は免れたけど、床上浸水とかした人たちは後片付けが大変で。1週間ぐらいはかかつたかもしれないよね……」

——そうなんですかね。

「そう」

——その後、教訓などがあれば教えてください

「教訓ね……でも自然災害というのはいつやつてくるかわかんないから。まあ今何だっけ？色々防災マップとかいろいろゆつてるけど、ああいうのやっぱ大事だと思うのよね。で、すぐ食べれるので缶詰とか非常食とかあんなのも大事だし、その頃はスマホなんてなかったから情報もあんまり入ってこない。テレビで見るからラジオで聞くぐらいいか情報も入ってこない時代だったからだから、やっぱそういう情報をキャッチする何かを持つておくのも大事だよね……」

——わかりましたありがとうございます。

「はい」

——以上です。

「今だからこうやって話せるけど……」

源川ともみさん

インタビュアー 上川夏未

文字おこし 上川夏未

——8月の30年前のお話をお願いしてよろしいですか。すいません。

「はい、わかりました。えっと、ちょうど、えっと、専門学校の授業が、えっと、(午後)3時半ぐらいに終わって、それから、えっと……今の中央駅、昔は西(西駅、西鹿兒島駅)と、そこから、電車で串木野(いちぎ串木野市)まで帰るつもりで、駅まで行ったら、大雨で、あの、運行できませんっていうアナウンスで、それから、えっと、天文館に向かつて、天文館からバスで串木野まで帰ろうと思って、えっと今のセンテラス(センテラス天文

館)の前の乗り場から、えっと、バスで、えっと、えっと、帰ろうと思って、バスが来たから乗って、で、5分くらい、10分くらいバスが動かなくて、で、あれっと思っていたら、『もうここで降りてください』って動かないまま『降りてください』って言われて、で、えーなんでだろうって思っ、あの一、降りると膝上まで水がある状況で」

(電波が悪く聞き取りにくくなる)

——つあ、もしもし、すみません、声が、電波がちよつと悪いみたいなんですけど、すみません。

「あー電波が」

——私の声聞こえますか？

「今大丈夫？」

——あ、今大丈夫です。

「あー、うんうん、大丈夫？」

——すみません……

「あー聞こえますか？」

——はい、今大丈夫です。

「大丈夫？」

——はい。

「うん、ごめんね」

——ごめんさい。

「で結局、えーどこまで話したっけ、えっと、とにかくどどん時間経つにつれて、水位が上がってきて、流れも早くなってきた、もー、川状態になって、でもだんだん暗くはなってくるし、で、なんかもーなんて言うんだろう、流れる勢いが速すぎて、車に乗ってる人もぶかぶか浮いて流されていく、感じで、車の中から顔を出して流されていく人とか」

——あー、そうなんですな。

「うーん、そうそうそ……なんか今も、なんか忘れられなくて……で、あともーいろんなものが、流れて、それに当たらないようにとか、もー必死に、もー天文館のなんて言うんだろう、今のなんて言うのかなあ……交差点みたいな所を渡って、いく感じで、とにかくもーなんか地獄絵図みたいな、もー、もーほんとに、もー何が起きてるのか分からない感じで……んー、で、結局、なんかもー、なんだっけ、あのー、ビルとか、あの辺もなんか、

もー避難さしてくれなくて、もー入れません、みたいな感じで、んーだからほんとにみんな途方に暮れて、もー、だから、天文館のところ歩いてるって感じで、もーだんだんもー、水の中につかっているから、足も、足も麻痺してきた感じで、なんかもーいろんなものがね流れた後だから、んー、今考えたら……ぞってするんだけど、その時はもう必死だったからねー、んー、なんか、で結局……なん、何時間、何時間だよ、夜中の12時まで……水がいつばいだっただけど徐々に引いてきて、12時から12時半ぐらいにはだいぶ引いてきて、そのあとはもう……なんか道路に、あの、故障になった車のクラクションみたいな音がずっと鳴り響いて、で、あともー、路面電車のあのあたりが魚が、ピチピチ……」

——あー魚が。

「んーんー、動いてピチピチしてるの、んーその光景がもー、今でも忘れられなくて……んー、でそのあとに歩けるようになったから、えっと、中央駅の方に避難しようってゆって、避難して、そー、一夜明けて……でーっという感じ……その夜まで、んーん、だったんだけど

……今だからこうやって普通に話せるけど、ねー、ほんとにあの時はもー必死で、家族にも……たぶん心配してるけどどうしよーみたいいな」

——連絡は取れなかったんですか？

「そう公衆電話しかもー連絡手段がないから……んー、だから並んでた記憶はあるんだけど……しゃべったかしゃべってなかったのかちよつと不覚で、んーなんかそこが飛んでるのよねー、んーでもかけた記憶はあるからなんかしゃべったのかなあと思ってんだけど、とにかくもー人が凄すぎて、後ろで待ってたりとかするから」

——人がもー多かったですか？

「そーほんとそこのなんか、一か所のところしか使えなくてって感じで……んー、今は携帯があるからねー」

——便利ですねー。

「ねー、ありがたいけど、もーその時は持ってた人がいるかいないくらい……なんじやないかなあっていう感じではある、私持ってたから、21、ぐらいで……そーだから、もーほんとに、ねーなんか、情報が少ないっていうのが……ほんとに、その当時は、みんな

の逃げることの遅れ、だったのかなって……時間もあつたのかなあ、んー……」「つあ、ほんとに普通の雨だった気がするのね……んー、だからあんなに思うなかつた……」

——当日の朝とかも普通だったんですか？

「そうそうそう、ほんとに傘さして、普通に電車も出てって感じで……つで、学校出るときも普通に、普通にどしゃ降りって訳でもなく、んー普通に傘さして駅まで行けたから……」

——急に降ってきた感じですか？

「そー、なんで？っていう感じ、まー所々で（雨が）凄かったのかもしれないんだけど、あのあたり（天文館や中央駅周辺）はそんなに降ってなかったよーな気もするんだけどねー、だから急にだったのかもねー、んー……だったからほんとにあつという間の……天文館に水があんなに入ってくるとは……んー、夢にも思わないことよねー……んー……」

——天文館が被害が大きいっていう情報は後から知ったんですか？

「っあ、そう、ほんと、もー何も情報（がない）、テレビも見れないしー、その時はねー、ほんとにもー行きかう人たちがあーだこーだってゆってる、話を小耳にするくらい、の情報……んー、だったから……ほんと、次の日の夕方にやっど家にたどりついて……」

——えー夕方にー

「うん、そうそう、夕方くらいについて、親の方が情報たくさんテレビで知ってるって感じ、んー、だったからたぶん、その周辺にいる人達は情報源が無かったんじゃないかなって……んーただそれだけ思ってるかなあ……」

——あと、なんか、あのー避難（避難中の様子）とか雨の中で（雨の中で立っている様子）が）テレビに映ってたつても聞いたんですけど、どうゆう状況だったんですか？

「えーつとねー……ちようど、あのー、たぶん、腰までつかって、そのー交差点をー、わた、わた、傘さして渡ってるところをちようど撮られてたみたいで……んー、それを家族がみて、見てたのかなあ、」

——リアルタイムで見てたんですか？

「たぶん、たぶん姉が見てたはずだから、たぶんそうだったのかなあ、私も後からなんか見て、あつと思つて、映ってるつと思つて、びつくりしたところだったんですよ」

——その映像は今の残ってるんですか？

「っあ、そう、なんか、あ、先月だったかな……MBCのなんか（テレビ番組）でねー流れて、そうそう、あつて、今じゃーねーこう、笑つてついうかもー、えーみたいな感じで見れるけど、もーその時はねー、もー絶望で歩いてたからねー、そー、だからもー、今やつと見れるかなつて感じ……んーそう、なんか嘘みたいな感じだよねー……んー、映像で見るとなんか……」

——私も映像でしか見たことがないんですけど、すごい衝撃的ですよー

「っあ、そー、だからそー、なんか泥水が流れてきているからー、ほんとに底も見えないまま歩いてるからー、ほんとに、側溝に足、ね、取られたりとか……ほんとに命がけで天文館のあそこ歩いてるって感じで……」

——怪我とかはされなかったんですか？

「つあ、おかげさまでねー、怪我がなくー……ほんとに、
そー、もうスカートだったからー……もーほんとに、もー
今考えると、ほんとにぞつとする、実感……ねー、生き
てるだけでっていうか、ほんとにありがたいことだった
なーっていう……んーだから、今なんかそのー、歩いて
避難してる、なんか赤ちゃんを抱いてお父さんがあげな
がら歩いている赤ちゃんもー、30歳かーとかもおもつ
たりもねー……なんかもーいろんなことを思い出す30年
だったねー、ほんとに……雨が降るたびにやつぱり、ね、
怖いよねー……やつぱりもー、竜ヶ水とかもあんなにひ
どかったとも思わなくてねー……今もあそこ雨が降ると
通りたくないよねー……だからもー今は情報源があるか
らありがたい時代だと思う、ほんとに……んー、だから
その当時はほんとに、もうちよつと、情報がいき届いて
たら、ねー、怪我する人も亡くなる人も少なかったのか
なあって……つくづく思う、んー……」

——なんかそのー災害を経験されて、そのー当時なんか
もつとこうしとけばよかったとか教訓とかありますか
ね？

「教訓ねー……ほんとに、そうー、30年前って、ほん
とに携帯もないからー、もーほんとに……どうしとけ
ばよかつたっていうことがー、思い返せない、ほんとに
なんかもー、あつという間すぎてー、何もできなかった
っていうのも、本音かもしれないよねー、みんなきつと、
んー、たぶん、もつと情報がいつとけばー、竜ヶ水のねー、
あそこも封鎖してー、いつたりー、電車とかもねー進ん
でなかつたと思うしー……んーだからほんとに情報、だ
いじー、んー、だからその30年前も情報さえあればって、
ただそれだけかなあー……んー、そう、その時に何かが
できたってみんなたぶん思えないかもしれない、ねー、
んー……ほんとに、今だつたらこうしとけばってねー思
うかもしれないけど、たぶんその当時は、も……」

——必死な感じですかね。

「つも、ほんとにあつという間すぎて、つて感じ、それ
で何もできなかった……んー、ねー、かわいそうって、
ねー……」

——すいません、いろいろと教えていただいて。
「いいよ、いいよ、なんか、ほんとにもー、水、もーほ

んとに……ねー、あんなにあふれるっていう怖さ……
んー、天文館がつて？つていう感じだった、ね、今じゃー
たぶん考えられない……」

——考えられない。

「でしよう、ねー、ほんとー、そこにいた人しかほんと
に味わえなかった、んー、怖さと、ねー、だったから、
ほんとにー、そうならないように、今後ねーなんかみん
なで伝えていけたらつて……ほんとに心から思います、
んー……ねー、んー、なんか、あれから水害も……ね、
また台風の時期になるだろうからね……んー、ほんとに、
ねー、なんか対策をねー、みんなで……考えていけたら
いいいなーつて……もう2度とハチ・ロクみたいな、こ
とがないようにね、んー、はーい、なんか」

——すみません、いろいろと……

「はーい、いいよー、味わったことがあるからこそ言え
るからー……この怖さと、ねー、みんなに味わつてほし
くないので……んーん、んーほんとに、情報を、ほんと
に共有しながら、助け合つていけたらつて思います」

「道路で鯉が飛び跳ねた！」

田中榮子さん

インタビュー 福田陽花

文字おこし 福田陽花

——よろしくお願いいたします。

「はい」

——お名前からじゃあ教えてください。

「田中です」

——その当時、30年前、8月6日のときはいくつ、何歳
でしたか？

「79歳から30を引いたらいくらけ？」

49歳。

「49歳」

——その当時は何をされてましたか？その日は。

「お弁当屋をやつてて、あのー、子供と一緒に鹿児島に
買い物に出てきた時だった」

——ちょうど天文館に？

「天文館に、はい」

——何時ぐらいから雨が降り始めたとか覚えていますか？どのぐらいの時間とか。

「何時かな……。お昼までお弁当屋をしてるから、その後出てくるから、2時くらいかな？」

——2時くらい。ひどくなつたのは？どのくらい……。

「あの、ビルの、お店に入つて、雨が降つてるつて気がつかなかつたんです。ほんで外に出たら、電車通りが大体もう5センチぐらいずっと水が……」

——浸かつてる？

「流れてるつていう感じで、靴からなんかもうびちゃびちゃだった」

——なるほどなるほど。なにかその時特に印象に残つてる出来事とかありますか？なんかこれを見て驚いた！とか。

「あのー、昔はこの郡元はダイエー（スーパー）があつたのね？鹿児島でおっきな。あそこを通つた時に、魚が、鯉が飛び跳ねてたのを見て、えー！つてびっくりしました。車を走らせて、車ももちろんちょっとタイヤ

が水に浸かつてる状態だった。でもう、ずっと車がいっぱいで全然進まないんですよ。だけどねなんか『ひゅっひゅっ』つて魚が飛んで、えー！つて。ほんとにそれはびっくりしました」

——あのさっきお話聞いてたんですけど（取材前にも少し話をしていた）、上のほうから決壊みたいなしてから（魚が）落ちてきた？

「それはね後、あと。後から聞いたの。そこで働いてる人に、知り合いがいて、その社長がもう『土手が崩れて、魚が逃げ出すから助けに来てー』つて。『ちよつと補修にきてー』つて。でももう雨が降つてて行けない状態だったから。そしたらもう全部壊れて、全部魚が、あのー逃げるていうか全部流されたのよね。魚が全部流された」

——なるほどなるほど。うーん、なんかその時怖かつたとかどういふ風に思ったとかありますか？

「車が進まないし、いつ家に帰るんだろう、家につくんだらうかとか、なんか後ろにも行けない前にも進めない。もうそんな状態だった」

——ずっと立ち往生みたいな？感じですか？

「そう車がね」

——どういう風に帰り着いたとか覚えていきますか？

「えーっとね、そこをねどうにかして抜けたら後はもうスーって行くの。その一角がね」

——すごかった？天文館のところが？

「いや、ダイエーのあたりが。郡元。あの多分、新川が氾濫したの。そうでした」

——なるほどなるほど。うーんと、何を聞こうと思ったんだっけ（笑）

「（話し始めてくださった）そしてね、私お弁当屋をしてるから、卸売屋さんが来るんですよ。そしてあの新川沿いにセイカ食品（食品商社）があつて、セイカ食品はあの、アイスクリームを売ってるんだけど、冷凍食品も卸売をしてるのね。そしたらね、庭の植え込みに魚がいっぱい引つかかって、もう枝のところは魚がこう、もう臭くて臭くて……。何日か経ったらね、もう魚が全部死んで。だからいっぱい庭の植え込みに魚が、なんていうの、逃げられなくて、木の間に、葉っぱの間にずっと魚がいっ

ぱいいたっていう。それを聞いた」

——なんかその臭かったみたいはあるんですけど、水害があつた後に天文館には行かれますか？何日か後に。

「何日（後）には行つてないかも」

——もう行けなかつたんですか？

「うん全然」

——復興というか復旧作業とか？

「いやーだからね、なんかあの知ってる人が、地下で飲み屋さんをしてたけど、でももう地下も全部あれして、なんかすつごい借金だけ残つたつていうのを聞いた。もうお店もつぶれて、もう営業ができなくなるつて言つて。そういうのを聞いた」

——なるほどなるほど。あ、ちょうど時間がきたみたいですよ。ありがとうございました。

「いえいえ」

「土砂を乗り上げて帰った記憶」

川北晃江さん

インタビュアー 川北実鈴

文字おこし 川北実鈴

——まず、現在の年齢と当時いくつだったのかを教えてください

「現在48歳で当時18歳です」

——1993年の8月6日の水害についてのお話を聞かせていただけるといいのでその当時どこで何をしていたのかというのを教えてください

「当時高校3年生で夏休みの間に原付免許を取るために帖佐の免許センターに行っていました」

——（帖佐に向かう時から）雨って酷かったですか

「最初のころはそうでもなかったかな？」

——試験の途中とか

「……も、そうでもない。まあ、まあ、雨は降っていたけれどもずっと土砂降りだとか、そういうわけでもない

く通常の普通の雨みたいな感じ」

——その時は電車か何かで行ったんですか

「その時は母の車で同級生2人で、2人連れて行ってもらいました」

——雨がひどくなったのはどの辺りからですか

「試験中だったから、雨が降っている状態はよく覚えていないけれども、帰りに雨がひどかったのは確か」

——帰り道、結構酷かったですか

「帰り道は結構酷かった。のと、ちよつと普段の雨とすると雨足が強いよね。つてことであのできるだけじゃあ、早く帰ろうつてことで帰路に着いた感じかな」

——道路の状況とかどうでした

「えつと、帖佐・始良方面は別にそんなにまだひどい状態ではなくて水没してるわけでもなくて、まあほんとに雨がひどいって話。まあ前が見えないくらい。ワイパーが回してもちよつと見づらくらいの雨」

——じゃあ結構強いんですね

「まあまあ強いかな」

——それって山道を走ったんですか、それとも海沿いと

か

「えーと、私たちが帰ったのは蒲生とえーと、蒲生方面に向かつて薩摩川内市に向かつてるから山、山手の方を通って、帰ってるかな」

——何か特に印象深いなっていう出来事とかありましたか

「帰りがけに、蒲生峠で前に走ってた大型ダンプが停車して状況を確認したら土砂崩れでダンプがもう通れない状態でその土砂崩れのまま待つと帰りが遅くなるからというところで土砂を乗り上げて帰った記憶があります」

——お母さんの運転で

「お母さんの運転で」

——結構、土砂（の量は多かったですか）

「土砂の量はそこまで多くはなかったけれども、トラック（大型ダンプ）が通るには、結局横が崖だから乗り上げて、たとえばトラックが傾斜がついてしまつたら落ちる可能性もあるということで多分トラック（大型ダンプ）は通らなかつた、……ダンプは通らなかつたと思うけど、……母親が乗ってた車は乗用車だったからそれを乗り上

げて……、木とかが落ちてるわけじゃなくて、ほんとに土砂崩れの土と砂利、大きな石があったわけでもない。大きな石はちよろつとはあつたけどまあ、まあ十分乗り上げて帰ってこれるくらい」

——その後、後ろで土砂崩れがあつたとかそういうのは「は、なかつた。……まあ要は、母、うちの母親がその土砂を乗り上げたことで他の後ろの車もずっと続いたのは確か」

——じゃあ、もう、先陣を切つて

「そうそうそう、それがなければ多分、あの段階で帰れなければ、家には帰り着いていないかな……、あの日。あれは、帰りがけに薩摩川内市に入って寺山公園っていう公園があるんだけど、その十字路のところ差しかつたところで……もうすでに道路が水没して……まあまだ、ドアよりちよつと低いくらい、ドアの……なんつーのかな、取手（ドアの）より低いくらいだったからそれをちよつと水の中を走って、水没した状態で走って行って、まあ距離がそんなになかつたから、アクセルを抜かずにそのまま走って行って、まあ車体が重い

車だったから浮きはしなかったから……あの時点でもし車が浮いていたらもちろん車もダメだっただろうし、帰り着いてもいなかっただろうと……。そのドアのところまでの水が一番酷かったところ。……まあその時点で、何時だったかな、帰り着く迄にね、確か、 ∞ 時間以上かかっているから、……うん」

——帰りついて、家の周りとかどんな感じでした

「家の周りはその日はそうでもなかった。たいして。……ただうちは、三方に橋が架かっていて、まあ、中洲のような状態で、橋を通らないとどこにも出れないところだから、結局その災害が起きた後は、道路が繋がるまでに、あの道路（主要道路）にでれるまでに場所によっては1週間以上かかったのかな。要は、あの家の近くの崖が崩れてるから、あのちょうど鋭角のところね、そこがまず1個目の大きな道路。大きな道路……主要道路（国道）三号線に出る主要道路のところから、土砂崩れで通行止め……で……入来方面に向かうかどうかあの、日通（日本通運株式会社）がある手前の方も結局、えっと、橋のところまで土砂崩れだったりとか、橋の、川の増

水で通行止……もちろんその隈之城小学校の方に向かう橋も水量が高くて通行止め」

——じゃあもう、外に出る道が全部……

「3つともダメ。てことはここは出れないってことだね」
——それって生活的には……

「そういう災害があったりとか台風があったりで、まあ、土砂が崩れたりとかってそういうのがあるから、うちは結構食品を備蓄してるから、……まあ、1週間くらいはどうつてことない」

——緒に乗ってたお友達とかは……

「一緒に乗ってたお友達はもちろん帰れなかったのだから……1個目の道路が繋がったのは3日（孤立してから）くらいだったかな、だから3日くらいはうちに泊まっていた。まあ、高校に一応申請を出して（運転）免許をとりに行ってるから、まあ、結局、その予定時間に、帰ってきてないことで学校からももちろんじゃんじゃん電話が来て、ちゃんと帰れてるかどうかの確認と、その時一緒に（免許を）取りに、……あの、一緒の日に受けた同じ高校で免許をとった（別の）子は電車で帰ったので、竜ヶ

水の手前で降ろされて、船で帰ったていうのは聞いてる。私たちは車だったからことなきを得て、普通に帰れたつていう」

——振り返つてこうすれば……（よかったというのではありませんか？）

「こうすればよかつたはないかもしれないね。結局あの時点でまあ、母親の機転で土砂を乗り上げて帰つてなければ多分帰つてこれないだろうし、もしかしたらそれ以上に水位が上がつて帰つてこれなかつた可能性もあるしと思うと、……多分ベストな判断だったのかな、と。

……なのでこうすればよかつたていうのは、強いて言えばまだ、天気予報がそんなに発達して……まあその、発展してつてわけじゃないから、それでも多分、……ああゆう雨はね、予測ができないと思う。てことは、多分こうすればよかつたていうのはない。正解がないかもしれないかな、私の中では。まあ、多分（あの状況が）ベスト」

——無事、帰り着いてるし

「まあ、こうすればよかつた、一つはその、男の子達（一

緒に試験を受けた別の子）も一緒に乗せて帰つてあげればよかつたかなつていうのは（あるかも）（笑）……かわいそうに、帰りついたの次の日だつたていつてもんね、確か」

——船の中で一泊？

「いや、多分、救助までに時間がかかつたんだと思う、……だから私達はまあ、無事に帰つてこれたからよかつたというところでしょうか。以上でございます」

——ありがとうございます。何か他に語りたいところとかは

「特にありません、こんな感じでいいかしら」

——（笑）ご協力ありがとうございました。

「見てる前で橋がね、半分ドーンと落ちたんですよ」

松崎初美さん

インタビュアー 上野心大朗

文字おこし 上野心大朗

——8月6日のことについて教えてください。

「その日はですね……水がどんどんどん甲突川に……あの入って膨らんできて、それでも……夕方5時過ぎくらいですかね、時間はつきり覚えてないけど。下に降りて橋（武之橋）を見に行ったら見てる前で橋がね、半分ドーンと落ちたんですよ。それで慌ててみんなに教えに行つて。今度は橋（武之橋）を渡つて帰る人（新屋敷側に向かう人）が、石橋が落ちちゃったから（渡れなくなつてしまった）。で、電車道の方にまだ橋があったからそこにみんな行こうとしたらそこは通れなくなつたの。（通行規制をして）通れなくしちゃつて渡らせなかつたんですよ。それで、その人たちはみんなここ

（『天ぷら 新橋』）へ入つてきて。ここでご飯食べさせたり。前のビルで仕事してる人たちは（雨で動けず）帰れないから。（『天ぷら 新橋』では）ご飯作つて持つて……食べなさいつて持たしてあげて（食事を）運んだりして……もうそれで、ここにきた人はみんな食べて帰つて」

——その日は朝まで帰れなかつたのでしょうか。

「いや、そうでもないかな。で、うち（の母）はなんか中央駅の前で……あの、バスが浸かっちゃつて。その近くの人が泊まらせてくれたのかな、お家に。それで……迎えに行こうと思つたらなんか。この道をね、下へ降りようとしたら……電車口の向こう側に、高麗町にね。降りようとしたらもう水がこの辺まで浸かっちゃつて……迎えに行けなかつたんですよ。でも母から電話かかつてきて『泊まらしてもらいます』って、明るる日迎えに行つたの。そんない人がいるんだなと思つて」

——当時はいくつくらいだったのでしょうか。

「これ何年だったっけ」
——今から30年前です。

「あ、もう30年前にもなんの」

(娘「もう30年前だよ」)

「じゃあ50歳だ私は」

——酷い雨の中、どんなことを感じましたか。

「すごい雨でした。あの橋(武之橋)が落ちたときは涙が出ました。もう主人なんか夜になるとここ(の営業)が終わったらあそこ、あの石橋のところの手すりのところに寝転がってたから。そんなに涼んでたから。それで雪が降ると橋をスケートにして滑ったりしていたからね。でも……ねえ(橋が流されてしまつてご主人は)すごい悲しかったみたいです。私も悲しかったけど」

——私は武之橋が流されたことを知りませんでした。

「ああ、そうなんだ。鹿大の人たちがよく……ね。まあ昔はあそこ(石橋)を通つて、鹿大祭みたいなのをやつて。まだ若いからね、全然知らないわけよね。そうね、全然……うん、大変だつた。だつて……この人(娘)はまあ帰つて来れなかつたし、橋の向こうだから。上の娘は……あの紫原、あそこは」

(娘「田上」)

「田上?」

(娘「武之橋?」)

「うん、武岡だ。あの……(上の娘は)幼稚園の保育者してたから。水がね、いっぱい……車が半分は浸かるぐらいで。タイヤなんかもうびっしりになるくらいに浸かつて。それでも帰つてきましたね。危ないけど」

——当手を振り返つて、どうすれば良かったかと思つてことはありましたか。

「私なんかもう何でもいいかわかんないもんね」

(娘「初めてだつたもんね」)

「……うん、あんなの(大雨)ね。だから、もうその後からはやつぱり雨がすごくなると……やつぱり心配で(外を)見えました。主人なんか川まで行つて見てましたよ。……もう亡くなつたけどね。そのくらい(8・6水害は)すごかつたと思う」

「水が溢れてるところをバスが通る」

安樂由美子さん

インタビュアー 安樂大和

文字おこし 権藤和希

——8. 6水書の日の話を聞きたいんですが、まずその日、何歳で何をしていましたか。

「はい、えっと、当時18歳の短大生で夏休みでした」

——夏休み……。夏休みでその時は何をしていたんですか。

「えっと……与次郎（与次郎ヶ浜）の米盛病院が建つた場所に当時は一階がレストラン、二階がボーリング場っていう建物があつてそのレストランでアルバイトをしていました」

——そののレストランは、どんなレストランだったんですか。

「一般の……そうですね……二階がボーリング場だったのでかなり広いレストランではありません」

——その日は人でいっぱい賑わっていたんですか。

「雨は降ってたけれどもまあ、いつもと同じような賑わいだったような気がします」

——それじゃあ子ども連れとかが多かったですか。それとも普通の大人の一般のお客さんが多かったですか。

「ううん……夏休みだったのでそこはだいたいいつもと同じくらいだったような気がします」

——それでレストランのそのアルバイトが終わってから、どんな行動をとりましたか。

「えっと、確かその日は17時にアルバイトが終わって、雨だったので、与次郎から歩いて荒田八幡のバス停から動物園行きのバスに乗ろうと思って……行ったような気がします」

——行く際には雨はもう結構降っていたんですか。

「結構降っていたというかその日は朝から雨がやまななくて、いや、やまなくてずっと降ってた気がします」

——その、ずっと降っててお客さん方に今日はずっと降ってるから何か……災害にならないかなみたいな心配をしてたりとか、ちよっと（状況が）変だなとか思った

人はいなかったですか。

「そうゆう感じでは無くて、本当にいつもと同じような『今日も雨だねえ』みたいな感じだったので、災害を心配しているような人はいなかったような気がします」

——あ、じゃあもう普通に梅雨時の雨の1日だなあぐらいな感じにしか捉えていなかった。

「梅雨時というか……8月だから8月でも『今日も雨だねえ』みたいなそういう感じだったような……気がしますね」

——まあ今日雨が降ってるなあぐらいの感じで、そのバスに乗ってて普段より人が多いなあみたいな違和感とかは何か無かったですか。

「いつもだったら座れているバスなんだけどその日は満席で、しかも立ってる人もいたぐらいでかなり混雑しているなあというような感じでした」

——乗った時にはもうほぼほぼ乗れるところが無いという状況だったんですか。

「そ……う、うんそうですね。そんな感じでしたね。珍しいなあと思いつながら乗った記憶が残ってます」

——もう、普通に立ってつり革を掴んでギリギリ入れられるかなあぐらいの。

「ええつと、入ったのがもう……あの……バスのあの、乗車口すぐのところ立つぐらいのところしか空いていないっていうそんな感じでした」

——で、そこから……どのタイミングで何か災害が起こったなあという風を感じたというか、知りましたか。

「えつと、バスがずつと進んでノロノロで進んでたような気がするんだけど、ええつと、途中で当時あの……大雨が降ったら凄く氾濫するって言われている新川を通るところがあつて、ええつと、その場所を通つた時に川が氾濫して……川が氾濫というか橋を通つた時にもう氾濫しているから、橋の上まで水がこう（手振り）来てるそこをバスがまあノロノロと、今だったら多分そんな水が溢れるところをバスが通るっていうことはきつと無いんだろうけれども、ノロノロとバスがずつと進んでいっててくれて、乗客同士で皆『まあ氾濫してる』って

言つてそこで初めて皆で『まあ今日の雨はいつもより酷かったんだあ』みたいな感じで知らない乗客同士なんだ

けど、バスの中で皆でざわざわって話をしたっていう記憶があります」

——もうその氾濫してる川のところを通過している中で、不安とか無かったんですか。

「今までそういう災害をした、災害にあったという経験が無いからわあああっていう不安より凄い状況なんだなあっていうような感じがありました」

——ちなみに、そのバスに乗って無事に家には帰り着くことはできたんですか。

「そう、そこを過ぎた後はもうスムーズに進んでいったので全然皆大丈夫でした」

——じゃあ、その時のことを振り返ってまあ、どうすればいい、(どうすれば) 良かったとか、今後どうしたほうが良いとかっていう考えはあったりしますか。

「今だったらもう皆さんきつとスマホを持ってると、あの……スマホから土砂災害警戒情報が来たりして、まあ、大雨が降った時に災害が起きるかもっていう考えがあるけれども、当時は全然無くて、じゃあ(どうする)ってなつた時にあの……それこそ与次郎から荒田八幡まで雨の日

に歩く時に当時、近くに川があつて、その川でカモカカルガモかいるのを見たことがあつたんですね。そういう川を見るということは、水の量が多い少ないっていうのも毎日じゃ無いけど何回か見てたらだいたいわかると、そうなった時に通常の水の量と大雨が降った時の水の量の違いっていうのがやっぱり目に見てわかつてたら、まあ、情報がそういう土砂災害警戒情報が無くてもそれなりに(変化に) 気づくことはあると思いますね。そういう通常はこんな感じ、もう……ちよつと雨が降ったら水の量が増えるというぐらいのそういう違いをもう肌で感じるっていうか見ることはちよつと大事だなあつて気がします。まあ、確かにその8・6(水害)の日もその川の側を通つたんだけど、かなりの水の量で今だったら多分まあ氾濫はしないけれども、今だったら多分歩かない方が良いんだらうなあつていうぐらいの感じでまあ……そういう自分に危機管理が無かつたということだから、そういう時は今後は気をつけなさいいけないなあと思いました」

——貴重なインタビューでしたが、ありがとうございます

した。

「ありがとうございます」

「水がわんさかと押し寄せて」

福田亮平さん

インタビュール 福田陽花

文字おこし 井上華

——本日はよろしくお願ひします。

「よろしくお願ひします」

——まずお名前を教えてください。

「福田です」

——福田さんは、当時8・6水害があった時、何歳でしたか？

「19歳、大学二年生でした」

——福田さんはその当時、その8月6日の日？どこで何をしていたときでしたか？

「……部活の合宿が出水であるということで、当時の西

鹿兒島駅（現・鹿兒島中央駅）から、朝10時頃出発する予定で動いていました」

——その、西鹿兒島駅から（朝）10時ぐらに出発するってなつた時には、雨はどのくらい降つていたとか覚えてますか？

「結構な大雨だつたと思います」

——福田さんが移動する時？にどういうトラブルが何かありましたか？どんなトラブルとかが？

「はい、えつと……出発して……串木野駅の手前で、線路が冠水しているということで一回（電車が）止まりました。そして、かなり長い時間止まつた後に、串木野駅までは行つたんですけど、また串木野駅で止まつて、また、長い時間かかつて……次は隈之城駅まで行つたところで、完全にストップしてしまいました。隈之城駅で降りてみたんですけど、隈之城駅ちょっとそのあたりでは高いところで、ちよつと外に出たら、もう水がわんさかと押し寄せていました。多分、夜の……8時とか9時ぐらいだつたと思います」

——（朝）10時に出発予定だつたのに、もうその時には

既に（夜）10時とか（夜）9時になつてしまつていたつてことですか？

「はい、そういうことです」

——じゃあその間、結構ずっと（電車が）止まつたりして動かなくて、結構きつい思いとかしみましたか？

「まあ、部活の仲間がいたので……おしゃべりしながらとかして過ごしたりはしてましたけど、もう周りのお客さんとかは、『西駅（西鹿兒島駅 現・鹿兒島中央駅）に帰れ』つて言つてたんですけど、もう西駅が冠水しているということ、もう動けないということで、一時はそこにいました」

——なるほど、なるほど。えっと……おうち？にはそこから、どういう風に帰りましたか？

「……合宿は、出水であつたので、予定通り行われました。なので、えっと、その合宿が終わつてから、家に帰りました」

——ああ、合宿があつた出水の方は、そんなに被害はなかつたですか？

「はい、えっと合宿は予定通り、まあ、その……最初の

日だけが、トラブルがあつただけで、後は予定通り行われました」

——ただその川内の隈之城の方とかは、結構水が来てるような感じでしたか？

「はい。結局は川内駅まで行つて、えっと、川内駅まで行くことができるようになったので川内駅まで行つて、そこからはタクシーで出水に向かつたという感じでした」

——ああああ、なるほど、なるほど。福田さんは、その当時？天文館の方で、バイトをしていたとのことですが、水害があつた後？天文館の方には行かれましたか？

「はい、バイトがあつたので行きました」

——その、水害があつて何日後？ぐらいに行つたとか覚えてますか？

「そこまでははっきり覚えてないですけど、合宿が……1週間？ぐらいいはあつたと思うので……合宿が終わつて……まあ、実家に帰つたりした後、まあ、だから大体2週間ぐらいいから行つたとは思います」

——水害から2週間ぐらいいあつたつてことですね。その

2週間経った後の、水害から2週間経ったぐらいの時の、その天文館の様子っていうのは、どのような感じでしたか？まだその、なんか水害の被害が残っている、とかありましたか？

「……あ、水がここまで来たんだあっていう痕は、ところどころに残っていたり、まだ若干泥が残っていたりするところはありましたけど、街自体表面上は、普通になっているようには見えましたけど、当時働いていたビルが、地下一階まである、地下一階から……地上六階まであるビルの私は六階でバイトしてたんですけど、系列店が地下一階にあつて、そのお店が水没してしまつたので、もう、そこで営業ができないということ……その地下一階のお店が、私がバイトしてるお店に、夜10時から……営業するという形で、あの、営業してました」

——あ、なんか店舗を借りる、みたいな感じでしたか？
「そうですね。(夜) 10時から居酒屋、えっと、(夕方) 6時から開店で……(夜) 10時までは居酒屋、(夜) 10時から(夜) 12時までが、あ、違う、(夜) 10時から夜中の1時までが、その、『オールデイズ』っていうバ

ンドが演奏するお店だったんですけど、そのお店が、私がバイトしてた店で営業する、という形になってました」
——なるほど、なるほど。当時その雨の影響とかで、なんか怖い思いをしたとかはありましたか？

「私自身は、なかつたんですけど……えっと、自分の両親が、ちょうどあの、竜ヶ水を通つたということで、その、崖崩れがある直前に通つていたということで、それは後から聞いた時は、もう本当に、冷や汗が出る思いでした」

——なるほど。インタビュは、以上になります。ありがとうございました。

「はい」

「1メートル先も見えない」

前野としえさん

インタビュアー 前野杏奈
文字おこし 山内さくら

——えっと、86水害から30年ぐらい経つと思うんですけど……

「うん」

——当時、大体どのぐらいの年齢でしたか？

「うーんと、そうねえ……あれから30年。45歳？」

——45歳ぐらいの時期だったんですね。仕事などはされていきましたか？

「仕事はね。実家の方にね。兄の会社の事務所を作ってたんですよ。それで私が事務員として、おばあちゃん家に行ってた」

——その日も（おばあちゃん家に行っていたんですか）？
「うん。その日も行って、もう5時になったので帰らないといけないと……準備してたのね。そして、まあ雨

が降ってくるから、雨が降ってるから、これは止んでか
ら帰ろうか。という気持ちで、軽い気持ちで、（おばあ
ちゃん家の）隣に姉の家があるもんで……そこに、姪た
ちが帰省して……来てたのね。じゃあ、ちよつと話をし
ようかと思って……その、姉の家に行って話してるうち
に、ますます雨がひどくなって……これは早くやつぱ帰
らないと駄目かな……と、思ってるるところへ、娘から電
話があつて。『お母さん、大石様河のところ降りてきた
ら、通れないよ。私もバスで帰ってきたんだけど……あ
の、そこ歩けなくて、人のおうちの庭を、何人かのおじ
さんたちと一緒に、こう、塀を飛び越えて、帰ってきた
んだよ』って言うわけ。えーっ、そしたら……遠回りし
て、平坦なところ、ちよつと、こう、その養護学校の吉野
養護学校の……ところなのよ、そのおばあちゃんの家つ
ていうのがね。今はそこに養護学校はないんだけど、ん
で、（養護学校の）裏の方がちよつと坂になって、ずつ
と行く（進む）じゃない。で、御召覧公園の、入口の方に、
出るでしょ。それから今度はピーコン（電灯）の方に歩
いていって……ほいで、おうちに帰ってきたんだけど

も……もーのすごい雨で、もうね1M先が見えないの。風がないもんだから、まっすくな雨なんだよね。けどもう周りが全然見えないし、それで20分ぐらいかかって家に着いたんだけど……人にも会わないで、車にも会わなかった。側溝は危ないということをよく聞くじゃない。水が出たときに（雨が酷い時に）……だから道路の真ん中を、そんな広い道路じゃないけれども、道路の真ん中を……歩いて、家に帰ったっていうのが、すごく印象に残ってる。それで大声出しても、全然周りには聞えない。あつ、こういう災害があつたとき、こういうことなんだなと思つて。助けを呼んで、大声を出しても聞こえないな（ん）だなつ、ていうことを（が）すごく印象に残ってる」

——そういう、1メートル先が見えないぐらいの大雨の中を歩いてどのように感じましたか？

「ああ、もう、これで車でも来るもんなら、道の真ん中にあるわけだから、で、（雨で周りが）見えないわけだから……あの、何て言うの、事故に合うかもと思いつつ……だから声を出しても、『ワーツ』て言つてもわかり

やしないしねえつて思いながら、もうとにかく怖かったです」

——うん。

「うん。すごく怖かつたつて思い。でも、だから車も1台も、通らないし、無事に……（家）に帰り着いたんだけど……ていうこと」

——家に到着した後は、家族とかどんな感じでしたか？

「家の周りがちよつと（周りと比べて）低くなつていったもんだから。家の周りに水があれば、何て言つたらいいかな、流れてて。それで（家が）道路の下（道路より下に位置していた）だから、ちよつとそこに（水が）流れてたけど。犬が2匹いたのね。（水がそこまで来ているから）すごく鳴いてて、それで慌ててお風呂のところに入れて行つて（リードを）繋いだんだけど、うん。それで子供たちはね、あの、3人いて、中学生と高校生（と大学生）ね。それで、一番上が今、アルバイトに行つてる先がちゃんと所在地がわかつてたから、まあ、いくらか安心してた……つていうかな。（下の）2人は中学生と高校生だから、（既に）帰ってきてたから」

——86水害があった当日のその後、色々片付けとかあったと思うんですけど、どうでしたか？

「自分の家は大したことないんだけど、おじいちゃんの家が甲突川べりにあったもんで……2階の、階段の、3つ目まで来た、らしい。それが大変だった。後片づけが。畳を……運んだりとか、床下の泥を……掃きだしたりして……というのはある、暑い時にね、蒸し暑かった時にね」

——今から30年前を振り返ってどのように改めて感じましたか？

「んー、だから……んー……そうねえ。自分の住んでるところは、そうそう被害があるところじゃないけど川べりって、まあ普段はいいけど……散歩もできたりしていいけれど、やっぱり……（氾濫のことも考えて）住む場所（を）考えないといけないのかなと思って。それから、その辺……その、おじいちゃんの家周辺は、床がだいぶ高く……して。家ができているみたい、今はね」

——ありがとうございます。

「くるぶしまで靴は完全に浸かっている」

前野昌一さん

インタビュー 前野杏奈

文字おこし 金丸和憲

——8. 6水害のときは、大体どのくらいの年齢でしたか？

「大学1年生だった。18（歳）ですかね」

——雨がひどかったと思うんですけど、どういうふうな行動をとっていたんですか？

「ちょうど夏休みのバイトで……バイトをしていました」

——どこでバイトを（していましたか）？

「山形屋（百貨店）の倉庫で荷物の仕分けのバイトだったです」

——その倉庫では、大体、雨がひどくなったのは4時半ぐらいだったと思うんですけど、雨の音とか聞こえましたか？

「雨の音は、まあ、ずっと聞こえていましたけど、そん

なにひどい雨だとは……その時間帯はわかってなかったです」

——倉庫だからやっぱり届かなかったっていう感じですか？

「そうですね、まあ……雨、ひどいなあっていう感覚はあったけどそこまで、そんな大きな災害になるとは、思ってたなかったかな」

——いつもの雨とは違うなと思ったのは大体どのくらいですか？

「バイトの時間が終わりに近づいてきたときに……その周りにいた人がざわざわし始めて、それで、外を見に行ったときに……もう、周りが少しずつ水が、冠水っていうんですかね、溢れている感じで……その倉庫の荷物を、水に濡れないように、2階に上げる……そうだったときに、あ、やばい。大変なことだなんていう感覚でしたかね」

——水が倉庫の中に入ってきたということなんですけど。家の帰宅とかどうなさいましたか？

「もうその日は、帰れない。ということ、バスで……帰る予定だったんですけど、もう道路も冠水しているの

で危ないということで、倉庫の2階にある休憩室で、みんなで泊まることになりました」

——その倉庫では、夜食みたいなものとかはどういうふうに調達したのですか？

「まあ、その日は、泊まる予定ももちろんないし。他の人も泊まる予定はないので、食べ物も準備してなかったですから、近くのコンビニまで、まあ……ちよつと、足濡れながら靴はいたままですけどもびしょびしょのままコンビニまで行って、食料調達に行つたのですが、パンとか、カップラーメン類はもうほとんどなくて、配送も届かないということで、お菓子か何かを、あと飲み物を買って、また倉庫に戻って……一晩過ごしたって感じですかね」

——買いに行かれたときに、大体足はどのくらい浸かりましたか？

「くるぶしも靴は完全に水に浸かっていた記憶があるんですけど、それ以上は……なかったかなと思います」

——夜倉庫で一晩過ごされて、どんな心境でしたか？

「そうですね、その倉庫にテレビはあったんですけど

……テレビ被害の状況、ニュースとかで見ながら……。どこか自分もその被害にあってる1人なんですけど、おう、すごいねっていう感覚で、そこまではそのときは、自分がその被害に遭っている感覚もなく……。ただ、倉庫の水が早く引けばいいなぐらいの感覚でしたね」

——夜が明けて朝起きたときに、もうその次の日は帰れただって感じですか？

「そうですね、まあ朝、山形屋の方で朝食を準備しているということ、結構、山形屋本館にも、帰れないで泊まっている社員の方とかいらっしやっただけです。社員食堂の方で朝食を食べて、で、父親に……。迎えに来てもらって帰ったっていう感じでした」

——今振り返ってみてどんな感じですか？

「そうですね、その後の被害状況とか……。自分でその周りの状況を見て、町の中も、地下の店とかは浸水したりして、たので、そういう状況を見てすごい大変な災害だったんだなど。がけ崩れとかもあったっていうニュースとかも、亡くなった方もいらっしやいましたし……。実際自分がそんな大きな被害に遭った記憶はないんですけど、

周りの状況を見たら、大変な災害だったんだなど。まあ、あの甲突川の橋とかも流されたり、すごい災害だったなと……。感じました」

——ありがとうございます。

「天災は、恐ろしい」

中島實さん

インタビュー 中島優志

文字おこし 岡田和叶

——本日はインタビューご協力ありがとうございます。
鹿児島大学の中島と申します。今回は、86水害を経験されたということで、インタビュー、質問を少しさせていたいただきたいんですけども、その頃あなたは何歳で、何をしていたらっしやいましたか。

「えーっと、58歳か(5)9歳。で、織物業、大島紬っていうのを自営業でやっていて」

——あー、なるほど。じゃあ、その日、どこで、何をさ

れていましたか。

「自宅兼作業所で、あの、仕事をしていた」

——あー、その、織物の？

「はい」

——じゃあ、その実際、自宅で作業されているときに、何かその日、特段変わっているなっと感じたことはありましたか。

「んー、いやもう、よくバケツをひっくり返したような(雨が)降るもんだなあ思った、ことぐらいだね」

——あー、ほかの雨と比べても特別降ってた？

「うん、降っていたね」

——では、その時、雨が実際多く降ったっていうことなんでしょうけど、どのように状況が変化しましたか。

「んー、えー、よく、もう降りも降って……仕事もできないうし、ただ通り過ぎるのを待つのみだねえ」

——その、急に降り始めたんですか？それとも段階を追って？

「んん、急に……そこらへんはちょっと、おぼろげだけど、朝からよく降ったっていう意識はありますね」

——では、実際雨が降ってるのは体験されたと思うんですけども、どのように、その日、行動しましたか。

「行動も何も、家でじっと、通り過ぎるのを待つのみ……と天災のことでなんも手を打つ、打つ手はないですよ」

——なるほど。じゃあその、情報とかは入ってたわけですか。

「状況はテレビ、ラジオでね、即刻、あの、交通機関の崩壊、あの、堤防の決壊とか、あの、車が流されていくの、家財、冷蔵庫とか流されていくの(が) テレビで映って、恐ろしいもないなあというふうに、ぐらいですよね」

——じゃあもう危険は感じてた？

「うん、危機感」

——じゃあ、自宅で作業してて、うちは大丈夫かなみたいな感じだった？

「うんうん」

——なるほど。じゃあ、大きな雨を経験されたんですけど、結果的に大きな雨がいっぱい降ったんですけれども、(大雨を)通して、どのように感じられましたか。

「うーん、天災って、突然予告もなく、あの来て、怖いもんだっっちゃうことだね、実感した。っちゃうことね」

——特に、一番不安だったことは何ですか。

「一番不安だったのが、あのー、県外で、働いている息子が帰ることで、帰る日に当たっていた(から)、ほんで飛行機で降りたはいいけど、あの、シャトルバスの通り道が全部ふさがってしまって、(国道) 10号線も高速(道路)もふさがってしまって、」(高速道路を) 加治木(インター)で降りて、どこ行っちゃったかっていうと、ずーと福山通って桜島で降ろされたっていう連絡があつて、それが一番気がかりだったね」

——じゃあ、息子さんがもう家に帰ってこれない(んじやないかって)

「どんなして辿り着けるかっちゃうこと、両方で心配していたね」

——それはすごい大変でしたね。では、このような天災があつたら、これからどうしていきたいですか。

「うーん、もう人の力じゃどうにもならないね。台風に

しろ、雨にしろ、あの、通り過ぎるのを待つしかない。んで後でまあ、いつものことだけ(ど)、台風で壊されたのを修理する、しかないけどね……。どうしようも、天災は、恐ろしいものだって、しみじみ、身に染みて感じた」

——わかりました。本日はインタビューにご協力いただきありがとうございます。

「はい。どういたしまして」

「もうどうすることもできない」

田嶋経助さん

インタビュー 田嶋愛維

文字おこし 中村飛翔

——経助さんこんにちは。今日は8・6水害についてのインタビューを行いたいと思います。まずその頃何歳で何をしていましたか？

「14歳中学生で自分のお父さんが、大工さんで大雨の中

でしたが、どうしても屋根の工場を終わらせないとけないっていうことで、仕事の手伝いに郡山まで行きまし
た」

——そしたら郡山から当時桜ヶ丘に住んでましたよね。
桜ヶ丘に帰るとき、(国道) 3号線とかを使うじゃない
ですか多分、そのとき3号線の様子はどんな感じでした
か？

「3号線。川沿いを通ったの覚えてるんですけど、みる
みるうちに川が氾濫していくっていうのを覚えてます」

——そしたらもう3号線とかもなので、その判断するか
もしれないということでも通行止めとか、あったじゃない
ですか、そのときに仕事って何時までやってたんです
か？

「お仕事は確か午前中までしたのを覚えてます。もう父
親がもうこれもちょっとやばいんじゃないかって、感じ
だったので、仕事を辞めて帰るっていうことになったの
は覚えてます」

——なるほど。そしたらどのようにそのとき行動しまし
たか？

「どのように行動してきた？」

——帰れなくなっちゃうじゃないですか、でも帰れなく
なりそうだったとき、道って朝通ってきた道と違うとこ
通ったんですか？

「確か、通ってきた道で帰ろうとしていて、朝通ったの
その橋だったんですよね。そこをまた通って帰ろうと
したら、その橋がなくなっていた、流されていたって
うのは覚えてます」

——橋は通れないっていう状況じゃないですか。そした
ら別の道を通らないといけないじゃないですか。その別
の道を通って帰ったときって、山道とかじゃないですか、
山道の様子からどんな感じでしたか？木が折れてるとか
そういうのはなかったのですか？

「すごい雨で土砂も崩れたりとか何個も何個も道を父
親が『ここは通れない』『ここは通れない』って言っ
てるんな山道通ってやっとな家に帰りについたっていうの
は覚えてます」

——そしたら山道をのらりくらり変えて家に着いたらも
う二ニューズでどーんと思うみたいなき感じじゃないです

か。もうニュースでたくさんさんの報道があつて、暗い倍増つて思うわけじゃないですか。そのとき覚えていたことってありますか？

「ニュースで見たのを覚えてるんですけど被災した方本当大変だったな、大変なんだろうなっていうのを覚えてます」

——はい。その8・6水害を振り返つて経助さんは、中学生だったということで、その子供の頃にそういう体験をして、振り返つてみてどうすればよかつたかなって思えますか？

「当時中学生だったんで、もうどうすることもできなかつたんですけど、この災害で怖い思いを経験したんで、覚えてることを何かしらの形で伝えていければなと思つてます」

——はい、ありがとうございます。8・6水害で、お父さんと仕事に行つて、そのまま何か帰りにくかつたりとか、その子供ながらに、思ったことを聞けてよかつたです。今日は8・6水害の話を開けてよかつたです、ありがとうございます。

「自然には勝てないなと思う」

上村修造さん・上村留美子さん・田嶋千紘さん

インタビュアー 田嶋愛維

文字おこし 吉園卓海・田嶋愛維

修造さん「ええつとね、この頃はね、公務員だったんだけれどもね、市役所に勤めてたので、8・6水害で今日の新聞にもなつてたけど、鹿児島に帰れない人たちが、伊集院の公共施設に泊まったのよね。泊まった人たちのお世話してた。ちょうど郡山のところの国道3号線が、崩落してもう全然通れなくなつたので、鹿児島に帰る人とかが、帰れなくなつて、伊集院に来たのかな。そのために、公民館とかいろんな施設で、泊まる人たちを引き受けたつちゅうのかな。泊めさせたのよねえ。なんとなくそれを覚えてるなあ」

——避難所みたいなことですね。

留美子さん「その人たちにはなんかパンやなんかを与えたけど、この人（修造さん）たちのご飯が無くて、私は、

一升ぶんおにぎりを握って届けた。公民館に」

——職員の方が無かったと……

修造さん「あの頃はまだ伊集院町だったからね（現在は日置市）」

留美子さん「だから役場に届けましたよね」

千紘さん「その時に修造さんはいくつぐらいなんですか？」

修造さん「30年ぐらい前だから40ちょっとだね。その頃だ」

留美子さん「お父さん（修造さん）が43、私が40ぐらいで、私はその土木事務所に勤めてて、そして川の水がだんだん上がっていくから、窓から見えて、『むかえ食堂』（『お食事処 むかえ』）の裏側の川の水がずっと上がっていくのが見えたので、（午後）3時に帰って言われた。女の人だけ3時に帰って。で、あたしなんかが先に帰してもらってのお父さんは待機だったの
で、私が夕方ご飯を炊けて言われて」

修造さん「職員もねえ、若い子達はねえ、天文館へあっちこっち遊びに行つててね、帰れない子達もいた。遊び

に行つてて。もうほらあつちはもう全然水が相当溜まったんじゃないけ。道路も腰らへんまで溜まつたところもあつたし。それ以上だったところもあつたのね。まあなかなか大変だったよね」

留美子さん「それと主人の姉の子がお産が。8月10日に生まれたんだけど、その前に入院してるでしょ？8月6日だったから。市立病院（鹿児島市立病院）って今、何になつてるけ？公園になつてる？」

——今の場所じゃないつてこと？

千紘さん「今の場所じゃない。中央署（鹿児島中央警察署）の前にあつたから」

留美子さん「だから市立病院に入院してたので、あそこもすごい水浸しだったんですよ。だから、姉は多分この辺まで浸かりながら（手でジェスチャーしながら）市立病院にこの子（写真を見せながら）のところに行つたはず。そんな話は聞いている。もうものすごい水だったつて言つて、姉は市立病院に仕事場が天文館だったから、市立病院まで歩いて行くのは、やっと行き着いたとかゆう話は聞いてましたね」

修造さん「鹿児島もこの頃何十年に、50年、100年に一回の大災害だーって言ってるね」

留美子さん「ただね、その夏はずーっとこれ見たらわかるけど、あつちこつちで雨や台風やすごくって」

修造さん「今で言うなんちゅうのかな。あの線状降水帯とかちゅう言つて、局地的に雨が降るよ。あんな感じがこの頃は続いたのよねえ。ただずーっと鹿児島市だけじゃなくてその後こちらへもやられたり、何年かこう続いたのかなあ」

留美子さん「この年が一番。この夏がね、梅雨からずっと」
修造さん「30年経ったから、後まだ20年近く続くこの災害が。だけでも今ね、だいぶほら、よくなってるからね、あの川にしてもね千光寺やらね改修してるし」

千紘さん「もうこつちの上の川とかはもう溢れるとかそういうことはなくて……」

留美子さん「溢れました。8月6日だったか9月4日だったか私もどつちだったか覚えてないですけど、街が浸かったんです。トンネルから郵便局までの間が浸かっ

たのね。床もギリギリでしたよねえ。床上か床下のもうギリギリのとっても畳ごと持ちあげたからねえ。畳まで浸かってたのよね。この辺はもう昔から誰もみんなが街の人たちが避難して上がってくるようなところだったの
で、まあこの辺はどうも無かったんですけど、銀天がちよ
うど何時だろう、お父さんにお弁当を持って行って」

修造さん「こつちらへんはね、街が一番低いでしょう。川を渡つていかんとすまんちゅうな感じでね」

留美子さん「あたしだから夜8時ぐらいにご飯を持って行って帰つて来れなかったの。もちろん電話が通じないし、それから急に携帯電話が普及しましたよね。よつぽど会社関係とかあんな人たちが持つてなかったですもんね。この辺は、ほんとちよつと床下浸水ぐらいで、二度浸かったよね、あの時。一年に二度だったのか、何年か後にもう一度だったのか覚えてないんだけど、街が浸水したのが大きいのが二度ありましたね」

修造さん「鹿児島にこつちから行く時に、今ゴルフ練習場がある鹿児島市の焼却場、あそこの手前がちよつと一番高いところなのよね。(国道)3号線沿いで。そこま

でしかいけなかったんじゃないかな」

留美子さん「そのもう一つ前が崩れて、『ニシムタ』（スーパーマーケット）の中川店がありますよ、あれのまだずーっとまだ伊集院の方にある食堂のところは崩れたんです。伊集院で1人死亡が出たのは、帰る途中の人が、もう動けないからと言って、電話ボックスで、お家に電話をかけようとした時がやられて。だから伊集院町で一人死亡が出る。それは、伊集院町の人じゃなくって他所の帰る人だった。だから8月1日も降って、8・6水害があつて」

——流れがあるってことですか、8・6水害までの。その日にめっちゃ降って8・6水害が起きたわけではなくて、その前触れがたくさん積み重なって。

留美子さん「すごい豪雨で、一回8月1日にあつての、8・6水害の。その後9月の4日に台風が来て、そうしてこんな私の実家の薩摩半島の方が相当やられたのね。だからその年の6・7・8月というのがすごかった訳よね。元々がね。だから堺ではサービスエリアがやられたりとか。桜島のサービスエリアがね、山からドワーって。

竜ヶ水もね。8月1日にも豪雨があつて。すごかったんですよ。続いたのがね。道路はやられてないけど、山が全部飲み込んだの」

——まさかのサービスエリアも……

留美子さん「あれも復旧に長くかかったよね。あの辺はずーっとちよつと高台になってますよ。あそこがもうずーっと爪痕がこう残ってた。時々ね思い出すよね。ニュータウンの方の人は大変だったのよね。竜ヶ水の土石流もね。河頭中もねそれこそ埋まっちゃったのよね。橋が壊れて。川沿いのお家がずつとね。散乱して。その後追い討ちで台風7号とか13号が来たのね。だから、あっちこちでこんな被害が起き出したのね。それもこの辺からずーっと水が増えて流れていくから、うちは下流の方だったので、うちもすごかったですよ。道路も寸断されて、何日も床下の土をあげに行きよつた。一番安全なところだね、その辺の人たちが集まつたみたい。で、20人だったかな？亡くなつてんの。すごかったよ。修造さん「30年前だから、今みたいにこう災害に対するその辺（対策）もできてなかったのよね、まだね」

——今みたいにそんな道具が普及してるわけでもないし、通信も弱いし……

留美子さん「昔から『ここは大丈夫だろう』と『ここが一番大丈夫だ』って言われたところに、集まってたんだけども、皮肉にもそこが」

千紘さん「今よりはね、こう協力意識は強かったでしょうけどねえ」

——でも協力意識があってもそういう今までそこは大丈夫だとして自分たちが信じてたけど、そこがダメだったから、協力したとしてもみんなでやられちゃったみたいなの。留美子さん「そうそうそう。あそこが……ってみんな言うてるよね。あそこがやられたのって」

千紘さん「だから今だったらね、ハザードマップとか色々こうちよつと根拠がある、地盤の硬さとかそういうのがあるけど、昔はそんなの無かったですもんね」

留美子さん「わからなかったしね」

修造さん「色々よね、研究もすぐく、30年経ってるからもう危機問題も良くなってるでしょうしね。性能が良くなってるから。雨が来ますよとか、そういうのが分か

るようになってきたからね、だいぶいいのよね」

千紘さん「それでもね。防ぎきれない、備えきれない」

留美子さん「大自然にはね勝てないから。自然に勝つには前もって自分たちが動くしかないってね。いかに自家は大丈夫って思っても、みんなで動かないといけないつていうようなありますよね。恥ずかしながら、私の父は避難してって言われたけど嫌って言って、一番最後に避難所に行ったとか。消防隊の人にボートに乗せられて連れていかれたと」

千紘さん「大丈夫っていうのと自分が家にいないとつていうね」

修造さん「昔の人もそういうところがあつたつていうから」

千紘さん「危ないんじゃないかと思つたら余計に離れられないつていう気持ちがあるしね。それも難しいところですよね。全てを捨てて何かが起こる前に避難するつて難しいことですよね」

留美子さん「決断だと思う。特にね、地元とか自分の田んぼとか家とかに思い入れのある人たちは特にねえ」

千紘さん「持って出れるものつて限られてるしねえ。自分たちはね田んぼを持ってないからさ、田んぼを頼りに生きてきたわけでもないからあれだけどき、昔の人たちが米を大事にっていうでしょ。それがほんと頼りだったからさ、やっぱり大事なもののよね。命よりも大事な物……」

——それが自分たちの生活を支えていく物だったから、その人たち田んぼなしには生きれないから。

千紘さん「じいちゃんばあちゃん親代々守り抜いてきたわけだからさ」

留美子さん「離れきらんわけよね。でもそれよりもやっぱり命が大事だつていうのをみんながね、わかんないとね」千紘さん「でもね、そうやってね実際役所に勤められてたりとか家族として過ごしたから、今でも薄れることなく、そういう気持ちを持っていられるのかもしれないけど」

留美子さん「この写真集はね、私はすぐ買わないと思うてね、自分で買ったんだったんです。もう忘れてはいけないと思つてね(8・6水害の写真集を見せながら)」

修造さん「学校にもあるかもしれん、図書館とかにね。昨日のNHKのニュースを見て、ハチロクのことが出たけど、若い人たちのハチロク水害を知っている人たちは少なかったよ。全然知らないっていう子たちが20何%いたね」

——だからそれを知るために、それを研究しようみたいな内容で、だから、若い人たちにハチロク水害はこういうものなんだつて伝えないといけないよね、自分たちも知らないといけないよねみたいな感じで、やつてるので、だから若い人たちにハチロク水害の恐ろしさを言うのであれば、何が一番怖いものだという感じですか？

留美子さん「自然には勝てないと思う」

修造さん「でも、だいぶ防げるようにはなつたよね」

——では、ハチロク水害のような災害が今後起きる可能性はないこともないじゃないですか？今温暖化で雨の降り方が異常だつたりとかで……。その時にこの教訓を生かして行動しないと思うんですけど、その経験されたことから、若い人たちはどう行動すればいいみたいなのがあつたら教えてほしいです。

修造さん「まず、やっぱり情報を知るべきだよね」

留美子さん「正しく知ってね」

修造さん「情報が今、いろんなところから流れてきて、嘘の情報が流れてきたり、どの情報を調べるかだよね。やっぱり自分たちがこういうのが起こった時に、まあ今お家にいるとして、危ないと思ったときにどこに一番避難するべきなのか調べておく必要があるよね。今、市町村がマップを作ってるけど、まあ見にくい！」

留美子さん「天神馬場は、4つに分けられているからもう……」

——ええつ。

留美子さん「つてことはまだ見てないね！」

千紘さん「いや、もううちは何かあったら伊集院中にと決めてるので」

修造さん「一番ここで何かあったとき行くって言ったと

きは、中央公民館なのよね」

——（川を）超えられないですよね。

留美子さん「下の街に降りることが危険なのよね」

千紘さん「家にいた方が安全なんじゃないかって思いま

す。家の前が崩れなければ、おそらく中学校に行くよりも自宅の方が安全なんですよ。でも、ただ非常食なんかをもらえないっていう」

修造さん「だから、やっぱりどこにどう動くかっていうことは自分たちでシミュレーションしておくことが必要かもね。家族でね。あと、非常食を買っておくことも必要かもね。インフラの電気、水道っていうのは一番大事だもんね」

留美子さん「まあ、電気と水道が止まるっていう経験がないからね。何日も停電するって考えられないですよ」

千紘さん「ならハチロク水害の時、この辺り（伊集院）は停電とかなかったんですね」

——質問をする前に全部、順番通りにお話してくださいだったので、よかったです。本当に体験したことも大事だと思うけど、その体験はしているけど、（鹿児島）市外の様子のお話を聞くことができたし、（鹿児島市内の家に）帰れなかった人を日置市でどのように迎えたのかというお話が聞けたので良かったです。今日はありがとうございました。

「経験しないと分かんないですよね」

平野小百合さん

インタビュアー 田嶋愛維

文字おこし 吉蘭卓海

——今日は8・6水害のことについてインタビュアーをお願いします。

「はい」

——まずその頃、何歳で、何をされていましたか？

「私が28歳で伊敷団地の方に住んでました」

——はい。ありがとうございます。その日どこでどのように過ごしていらつしやいましたか？

「その日は娘が3歳で娘と映画を見に行っていました」

——そしたらその映画を見に行っている時にどのような状況が変化しましたか？

「映画を見ている間は雨が少し降ってたんですけど、帰りにわりと雨がだんだん強くなってきて、家に帰り着いて、まもなく甲突川が氾濫して(国道)3号線が浸水し

たみたいですよ」

——そうなんですよ。その時どのように行動しましたか？

「えっともう家に帰ってたので、テレビで市内のニュースを見てました」

——そのテレビを見ている中で平野さんどう感じましたか？

「えっと雨……水害の勢いというか、出かけて帰りが少しでも遅かったらその災害に遭ってしまっていたのかなと思って、子供もいたので早く帰れてよかったのかなとは思いました」

——その経験を振り返ってどうすればよかったかなとか、そういう災害を経験して、どう思いましたか？

「あの……昔はそのスマホとか天気予報を見るところのはテレビでしかなかったんですけど、今はスマホで雨の降り方とか見れるので、それを見ながら雨の降り方を見て行動したり、食料とか飲料とか備蓄する形にした方が良いんじゃないかなって思いました」

——はい。ありがとうございます。以上でインタビュアー

を終わりたいと思うんですけど、他に何か体験して、私達全然8・6水害について知らないんですけど、何か若い人に8・6水害をどういうものだったよって伝えるんだったら、一番8・6水害で印象的だったものがあつたら教えて欲しいです。

「水の怖さっていうか、そこ数分っていう感じで川も氾濫したので、本当に水の恐ろしさっていうか、経験しないと分かんないですよね」

——はい。

「だからまあ、うちも子供下の子が5ヶ月だったので、その年が、だからその年でもう何年経ったんだなと思いつつながら、いつも思う時にはこうしなきゃ、あしなきゃって、思うんですけど、やっぱりまた忘れてしまう……その備蓄にしても何にしても忘れてしまうので、やっぱりそういうのを最近雨の降り方も違うので、気をつけながらしていかないといけないなあと思いました」

——ありがとうございます。貴重なお話ありがとうございます。これでインタビュを終わりたいと思います。

「列車が宙ぶらりんになっていた」

新内康子さん

インタビュ　王啓
文字おこし　岳山咲華

——その時(8・6水害時)は水道水が使えない状態になっていました。何か思いついたことはありませんか。

「えっと、自分自身は水道水が使える場所にいたんですよ。その……(職場から)早く帰りなさいって言われたから。鹿児島空港から高速道路に乗って運転していたんだけど、その次のインターチェンジの、加治木つとこでもうストップになったから、降りてそこで一晩車の中で過ごしたんだけど、水のある場所をちゃんと探して止めたから、大丈夫だったんですよ。で、一週間、職場の同僚の先生の家泊めてもらったから大丈夫だった。一方で、家族が鹿児島市にいたんです。で、家族に『水道どうだったの』って聞いたら、鴨池一丁目あたりは水道は止まらなかった……。私の家は鴨池二丁目、家族

も鴨池二丁目に住んでいたから、水道で困ったことはなかったけれど、鹿児島市内の色々な施設、色々なところの人が、『水で困ってる』っていうのは聞きました」

——その時にどういう行動をしましたか。

「あの、本当の話かどうか分からないんだけど、人から聞いた話。うちのように、水が出る地域の場所もあったから、そういった地域の人が持つて行ってあげたり、あるいはもらいに来たりっていうのが一つ。あと、鹿児島市が給水車っていう水のタンクを乗せた車を走らせて、皆にその水をあげていた、という話を聞きましたけど、どこまで本当か分からない」

——確かに、集中豪雨で水が溜まったという話は聞きました。天文館の地下が全部水で浸かったという話も。そういう状況はいつなくなりましたか。

「水が完全に引くのには、2、3日はかかったんだと思います。それも私はニュースでしか見ていないんですよ、鹿児島市内にいないから。隼人町……鹿児島空港の近くに一週間泊まっていたんですね。だから実際に見ていないんですけど、水が完全になくなるのに、少なくとも2、

3日、一週間くらいかかったんだと思います。で、水が引いても土が残ってる。泥も一緒に水と流れてくるでしょ。で、私が勤めていた志學館学園っていうところの本部っていうのが、高麗町っていう、今のMBC放送の横にあるんですけど、そこも、地下のある建物だったんですけど、地下は全部水に浸かって、一階のところの、腰ぐらいまで、水が溢れたっていう風に聞きました。それも具体的に何日とは聞かなかつたけれど、水が完全になくなるまで、特に地下は排水がそんなに良くないでしょう。っていうので凄く大変だった、時間がかかったと聞きました」

——ありがとうございます。その時は土石流も発生したそうですね。

「そうそうそうそうそう」

——その時のことを聞かせてもらえますか。

「それはね、それも、実際にその場を見たわけじゃなくて。あの、日豊本線？鹿児島島から、宮崎に行く、鉄道のところ……鹿児島市と、始良（鹿児島県中部の都市）っていうところの間に、竜ヶ水って駅があるんですけど、そ

この裏の山が土石流で、JRの列車が半分に……あの、宙ぶらりんになって、海の方に、鹿児島湾？錦江湾（鹿児島湾の別名）とJRの線路、山があつて、山から土石流が流れて、で、ここを走っていた電車が、土石流で、流されそうになって。完全には流れてなくて、途中で止まつて、宙ぶらりんになって、その救出の映像は、テレビで見ました。……で、8・6水害の一週間後に、大隅半島から桜島経由で、フェリーを使って車で帰ってくる時、その土石流の跡も、フェリーの上から見られたんですね。そしたら、あそこはもつと茶色い、凄い光景でしたよ。で、その、ニュースを、見た時は、列車の人たちを助けたり、あるいは、国道の三号線に車の人たちが何人も動けなくなつてるわけね。それで、船でその人達を救出するっていうようなことも鹿児島市はやつて、鹿児島市長もその手伝いに出てるニュースを見ました」

——ありがとうございます。竜ヶ水で土石流が起きたことは聞きました。JR線路が竜ヶ水の近くにありましたかね。

「そうそうそうそう。竜ヶ水の駅だから、あの、日豊線というのは、線路の横に駅があるわけ。だから、その電車がJRの電車が、こんなに……つていう」

「未曾有の災害」

中島祥太さん

インタビュアー 中島優志

文字おこし 李中優実

——今回は、インタビュアーにご協力いただきありがとうございます。鹿児島大学の中島です。今回は、ハチロク水害について色々インタビュアーしていきたいと思えます。まず初めに、その頃、何歳で、何をしていたらっしゃいましたか？

「えー……その頃は、24歳で、鹿児島大学で研究員として残つておりました」

——はい、ではその日、どのように状況が変化しましたか？

「その日、えー……鹿児島大学で、いつものように、えー……研究を、していたんですが、午後から雨が降っているなあというように感じて、過ごしておりました」

——あ、事前に情報として何か……大雨が降るといような情報はあったりしたんですか？

「事前にそのような情報は、ありませんでした」

——あ、なるほど……。では、えーつと、その……実際に多くの雨が降ったと思うんですけども、その日はどのように行動したんですか？

「えー、夕方から急に雨が強くなったので、夏場だったのでいつもの夕立だと思っていました。ただ、それが、えー、止まない、えー……、強い雨が止まない時間が長く続いた」

——なるほど。えー、えつと、実際その、長く続いたことで、弊害とかあったりしましたか？

「鉄筋コンクリートの建物の中にいたので、えー、普通に過ごしていました」

——なるほど。では、その、具体的にどのような状況でしたか、外は。

「外は、鹿児島大学のキャンパス内は、いつもの通り変化はなかったです」

——うーん、なるほど……。では、あつ、情報などは、実際は届いてたりとかしたんですか？

「後々、色々な、えー、情報が、えー、ラジオ等から入りました」

——なるほど。では、その段階では、特に何の情報もありません、強い雨だなと感じられてたんですか？

「そうですね。ただ、あの、降りやまないのも、えー、お店に行くこともやめたりとか、えー、建物の中へ、とにかく居ようと思っておりました」

——自由に行動ができない状況だったんですね。

「そうですね」

——はい。では、今回、この、あつ、今回つていうか……ハチロク水害を通してどのように感じましたか？

「このような未曾有の災害つていうのは、突然やつてくるんだなあというのを強く感じました」

——未曾有……あー……では、ハチロク水害を振り返つてみて、どのように行動すればよかったなと感じました

か？

「えー、このような災害の時、たまたま、えー、鉄筋の建物の四階にいたというのは、えー、結果的に、えー、身を守る行動に繋がったと思う……思うのですが、置かれている状況で、一番ベストな行動をとるってというのが、大切だと感じております」

——具体……あー、外にいたりとかしたらまた、変わっていたかもしれないね。何か、その、一番、そのハチロク水害の中で不安だったり心配だったりしたことは何でしたか？

「災害が、起こった後、えー、明け方の二時か三時ぐらいに、えー、車を運転して家まで帰りました。その後、その時も、雨はやんでいたのですが、道路は冠水していたので、えー、運転は道路の中央部分が、かろうじて、えー、路面が見えるような状況で、そこを、えー、安全に運転して帰ったりとか、あの、途中で物が色々な物が落ちていたので、それに、当たって、事故などないか、そのようなことが心配でした」

——なるほど。色々、車だったりとか、あの、家電だっ

たりとかが落ちていたりしたんですね。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

「大きなトラックが流れてきた！」

山口明伸さん

インタビュー 山口絵万

文字おこし 李中優実

——それでは、始めさせていただきたいんですけども、えーっと、ハチロク水害が起こった頃、その時、何歳で、えー、何をしていたかというのを聞きたいんですけども……。

「はい、1993年は、私は、23歳で、大学院生で、東京におりまして、えー、私の両親が、あー……51歳……父が51歳母が50歳で、えー、鹿児島市の自宅兼、えーっと、店舗ですね、で、えー、和洋菓子の自営業を、営んでいました」

——はい。東京にいたということもあったと思うんです

けど、その日、どこで、どうしていたのかということをお伺いできればと思うんですが……。

「私自身は東京にいましたけれども、えーっと、数日前から、鹿児島の方で、えー、大変な豪雨が続けているというニュースは聞いていまして、親戚含めていろんなところから、えーっと、こういう状況だという、連絡は受けていました。もう、あの、雨が、凄まじい雨が止まらなということなので、一体これはどうなるんだという、えー、話をしていました。もう、この世の終わりのようだという、えー、話を電話づてには聞いていて、非常に、あの、不安には思っていました。えーっと、当日も、本当に、あのー、甲突川から、けっ、決壊して浸水してきた時には、えー、もう、あつという間に、えー、水位が上がっていつて、2階が住宅で、1階が店舗でしたけれども、えー、1階のですね、国道三号線沿いの自宅兼店舗の、1階の店舗の方にはシャッターを下ろしていますけど、どんな水が入ってきて、えーと、いろんな物、大事な物を2階に移そうということで、えー、カウンターの上面に買ったばかりの、購入したばかりのノートパソコン、えー、

を会社として業務をちよつとデジタル化しようとした時期だったんだと思いますけど、一旦、腰の高さのところから胸の高さまでのカウンターに、こうちよつと移動させて、まさかここまではこないだろうと思つて、大事な物はちよつと上に置いておくというような状況だったらしいですけど、まあ、結果的にはもう2メートル沈んでしまつてるので、すべてが、あの、水の中、ということ、2階に持つて上がったもの以外は、もう、えー、全部ダメになつたと、機械も、あの、お菓子を作る色んな機械も、そのコンピューターも全部ダメになつたということでしたし、ショーケースも、えー、アイスクリームのケースだったり、ケーキのケースだったりとかいうのも全部、水の中に沈んで、土砂に埋もれていました。電話で、「今、家の前の三号線（国道）の道路が川みたいになつて車が流れていつてる」「あ、今、ベンツが流れていつた」「クラウンが流れていつた」とかいう話を電話で聞いたりして、えー、「大きなトラックが流れてきたーあー！」っていつて自分の家のシャッターにぶつかつてきて家のシャッターが開いてもう水が凄まじい

勢いで流れ込んできたっていうようなことも、聞いていました。で、当日はもうあの……家に帰れなくなってるその……被災者の人たちが、えー胸まで水につかって道路を歩いてるっていうか……道路でどうしようもなくこう……あちこちしがみついている人たちを家の中に入れて、もう当日は知らない人達も皆入れて避難所みたいにな、仮の避難所みたいになつて雑魚寝してとか、もう、あの……おにぎり作つて……とかいうことで、仮の……お互いに助け合うような、あの……小さな避難場所がいろいろなどころに実際出来ていたんだと思います。家の自宅の2階もそうなつていたという風に聞きました」

——へえー……。その時、東京にいたということもあつたと思いますが、状況が変化……その……ハチロク水害が起こつてその……起こる前の時にいた、鹿児島にいた状況と、まあ、その後、ハチロク水害があつた後、帰つてきたと思うんですけど、その時に、まあ、ここが変わつてるなあということがあれば、教えていただきたいです。「まあ、えーつと……状況は一変しまして、えーつと、まあ、甲突川沿いの地形なり、あの、浸かっていた場所

が全くなくなつてもう地形的に変化した、全く変わっちゃつた所もありますけれども、まあ、自宅の……自分たちの生活で言えば、店はもう完全に土砂が入つてきて全てダメになつたんで、えー、それで、家はまあ、そのまま家業を続けていくことを断念して、廃業するということになりましたし、で、私はまだ大学院生で、えーつと、授業料とか生活費とかのところで、えー、援助を受けていたところもあつたのが、なかなかその後難くなるよねという話になつて、えーつと、まあ、えーつと……授業料免除の申請をしたりとかつていう形で、なんとかまあ、えー、大学院は修了することができましたけれども、鹿児島の方では、もう、その……、雇つてた従業員達になんとか退職金を少し工面してというような形で、まあ、金策、お金の、あの……工面も相当苦労したという風に聞いていますし、えー、ただ、その時のあの、家の……店の中が全部土砂に埋まつてしまった時のその……片付けというか復旧作業には近くの工業高校のあの……生徒の方とか、先生方とかですね、あとは近所の方々、まあお互いにですけども、まあ地域で助け合つて、えー、ま

あ…かなり苦勞しながらも、皆でやって、えー、復旧復興に向けて、頑張った、取り組んだということは聞いています」

——その、ハチロク水害が起こったということで、まあ、その状況もあつたと思うんですけど、その時に感じた思いなどがあれば、お伺いしたいんですけども……。

「えーっと……まあ、1番は災害の怖さということだとは思いますが、人間の力が及ばないレベルのことだと来た時に自分たちは……まあ、太刀打ちできないなというところが1点と、ただそれを、いかにこの…少なくとも何か、被害を少なくするかということにはまあ、事前に対応しておけば違つた部分もあつたかとは思いました。で、まあただ……やはりそういったものを受けても、あの…協力して乗り越えることが、まあできるんだということでは地域の人たちを含めてですね、非常に力になりましたし、えーっと……やはり大事なことだと、コミュニケーションって大事だなということをもつて感じたというのは、両親からも聞いておりますけれども、一方で、例えば、あの……石橋のですね……近くにある前橋がそも

そもといった石橋のですね、川の流れを阻害して洪水になったんだという見方と、そうでないということで、その、えー、色んなところでお互いにこう……意見の食い違いが出てきて、結局石橋を移設することになりましたけれども、まあそういったところで、えーっと……これまでは、あの、なかったような対立というの、まあ、それに対する……どこか人のせいにするとか、何かのせいにしようというところもあると思うんですけど……えー、一体になる部分もありつつ、その……対立する場面も出てくるといところが、何か、1つ……災害なり何か課題……トラブルが起きる時っていうのはですね、そういうことが出てくるなあ、いかにこの、その……分かり合えるかとか話し合うかということはこういう時ほど大事ななんだろうなあと思いました」

——なるほど……。それでは、今伺った思いもありましたけれども、30年経つた今、振り返つて、どのように、まあ、こう対応すればよかったなど意見とか思いなどがあつたら教えていただきたいです。

「はい。えーっと、まあ、当時……どうすれば良かった

というのは、ハチロク水害を市民の立場でどうすれば防げたか、避けられたかっていうのは、なかなか難しい話で、えー……そういった予想外の……予想を超えるような日常がなくなるような状況になった時に、どう対応するかということ……そういう意味では地域の繋がりにていうのは、さっき言ったように、非常に……できていたので、水害に関わらず、何かあった時には助け合うというコミュニティは……まあ最低限は出来ていたというか……地域の繋がりはあったので、えーつと……あとは、行政的などここでできることということ……その後はいろいろと対策はたててもらっているかと思えますので……我々ができることは……当時も今も、まああの、淡々と日常生活を続けていく以外には……まあ周りとお互いに地域同士で誰がどこに住んでいて、どういう、あの、人たちがいるとかですね、まずはその人たちを助けないと、とかいうようなことを知ってなきゃいけないので、当時は逆に言うてできてたんですけど、今それできてますかねっていうところがあるかと思えますね」

——はい……ありがとうございます。以上で、インタ

ビューを終わります、ありがとうございました。

「どうなるのかな」

馬渡義隆さん

インタビュー 中島優志

文字おこし 安井誉

——えー、本日はインタビューご協力いただきありがとうございます。鹿児島大学の中島です。8・6水害についてインタビューさせていただきます。まず初めにあなたはそのころ何歳で何をしていましたか？

「えっと、その時はですねー48歳でした。交通局でバスの運転手をしていました」

——はい、なるほど。ではその、そのバスの運転手をさせていたということなんですけれども、その日はどこで何をしてらっしゃいましたか？

「あー、その日はですねえーあのく交通局の事務所です。ね、応援勤務だったので電話当番をしていました」

—— あつ、応援勤務というのは？

「えつとです。ね急に運転手さんがです。ね病気が出たりとかです。ね、おなかが痛くなったりとか緊急の場合に、あー運転をする役なんですよ。」

—— あつ緊急時の対応の役割をされていたと

「はい、はい。」

—— えーなるほど。ではその8・6水害のあつた日は外はどのように状況は変化しましたか？

「えー雨が降り続いてです。ね、まあ、お客さんからバスが時間になつても来ないと何本も電話があり、応対に追われていました。」

—— あーなるほど。では、えーと、その応対におわられたというお話があつたんです。けど、その日はどのように行動しましたか？

「えつとです。ねえ、まあ上司の指示です。ねえ予備車を出す準備をして出発しました。途中で車が渋滞して前に進めなくて警察の誘導が慣れない道路を走って心配しました。水かさかステップ（バスの）の半分くらいまで来てとても怖くて、初めて通る橋などは長く通っていない

バス道路（バスの通る路線）だったので大丈夫かなあと思ったりもして、まあ心配をしました。」

—— あーなるほど。では、そのバスから見えたその景色だつたりとかで印象的なものはありましたか？

「えつとです。ねえ、もう車がです。ねもうほとんど半分くらいこう、浸かったような状態のが前にいたりして、もうこれはどうなるのかなと思つて、初めての光景を見たのももうどうなるのかなと心配しました。」

—— ああ、すごいバスの運転手っていうすごい責任感のある仕事をされてて、やっぱりその他のお客さんに乗せている状況だつたから特に不安だつたって感じですね。

えーでは、この8・6水害というものを災害、鹿児島の中でも、すごいえーと印象的な災害になつたんです。けど、通してどのように感じられましたか？

「えつと、えーこんな状態です。ね、お客さんを無事送り届けられるか心配でした。けれどまあどうにかこうにか送り届けることができて安心しました。」

—— 良かったです。ね。えーとでは、最後になるんですけどもこの8・6水害というものは、振り返つてみてど

う、どうすればよかったと思いますか？

「今思えばですね、上司の人と相談してですね、周りの状態を把握して、もうちょっと色々考えて行動すればよかったですね、よかったですね」と

「あー、具体的にはもう少し考えてというのはどのようにしたらよかったですか？」

「あー、もう出る、えー出る、車庫を出るときですね、もう相当の水かさだったのでやっぱりその辺のところを心配をしたりしました」

「やっぱり、その雨がたくさん降って車も水に浸かっている状況だったって先ほどおっしゃいましたけども、やっぱりそのバスは普段よりは走りづらい状況であつたんですか？」

「でした、もう（バスの）ステップまであの、（水が）来てですね、もう初めてのことだったもんですからねえ、もうなにしろ。もう、どうなるのかと思ってもう、心配しました」

「やっぱり普段の大雨とはわけが違う？」
「全然、違いましたね。もう、これはどうなることだら

うかつちゅう思うてもう、心配しました」

「はい、本日はインタビューありがとうございます。貴重なお話を聞いてとても嬉しいです。どうもありがとうございます。ございました。」

「どうも、ありがとうございます」

「車がもう水にかなり浸かっている状態」

中筋健吉さん

インタビュー 渡部晴葉

文字おこし 紺野生喜

「まずは、8・6水害があつたその頃は、何歳で、何をされていましたか？」

「えー、既に鹿児島大学の教員でした。……何年前でしたっけ？」

「ちょうど30年前です」

「30年前ということは31歳、えー、31歳か30歳かそのくらいだったと思います。はい」

——その8・6水害があったその日はどこでどのよう
に過ごしていましたか？

「はい、まず、えー、会議がありました。土曜日だった
んですけども、えー、学内の、えー、会議があつて、
はい、それで会議が終わつて、で、その後それが昼過ぎ
でしたね、はい」

——では、8・6水害のその日はどのように状況が変化
していったんですか？

「はい、えーっと、その日だけという形ですかね。あの
年はもう、春先の3月ぐらいから、今のような梅雨のよ
うな長雨というか大雨もありました、豪雨も続きまし
た、相当数の雨が降つた異常な年だつたと思います。で、
えー、8月になつてもまだ雨が止まないという状況で、
えーっと、会議が終わつて家に帰ろうということでは文
学部前のバス停でバス待ちをしていました。で、鴨池方
面から来るいつものバスがあるんですけど、それが普段
よりもかなり遅れて、待てど暮らせど来ない。いつもそ
の当時、10分は遅れる状況だつたんですけど、それが
20分ぐらいかな、かなり遅れてやっとバスが来て乗り

ました。で、そのバスはあの、共研公園から、えー、ナ
ポリ通りに下りていくバスで今の鹿児島中央駅、えー、
昔の西鹿児島駅ですね、はい、えーっと、そこから降り
ようとしたところですね、ナポリ通りがもう、えーっと、
川になつてました、はい。で、バスを降りるんですけど、
おそらく、あのー、今の低床バスと違つて昔はちよつと
高いバスですよ、ステップが高いバスで、でー、昇降
口の一番下のステップすれすれのところぐらまでの高
さの、たぶん、水があつたと思います、はい、そこから、
えー、ナポリ通りに出たのはいいんですが、えー、車の
列がずーっと中央駅の方からぐるっと、あの、高見橋
の方向に向かつて、車がもう水にかなり浸かっている状
態つていうのが見えました。……もうちよつと続けます
か？」

——では、その時はそれからどのように行動されました
か？

「はい、あのー、そこから約1時間、あの、バスの中に
おりました。はい、1時間。で、ちよつと高見橋、一番
ちよつと高いところですね、えーっと、私は、あの、そ

の時加治屋町に住んでたので、加治屋町のちっさいマンションに住んでいたので、でー、もうこれは歩くしかないなど思っています、えー、ちょうど高見橋に来たところで、えー、運転手さんにお願いで、そこで降ろしてもらって、そこから、えー、歩いて自分のマンションに帰りました。はい、そうすると、まあその辺りの周辺の道路はだんだん水がこう流れてる状態で、私の、えー、マンションはですね、ちょうどあの、電車通りがありますね、えーつと、1系統谷山方面の、あの1系統に垂直の形で、ちょうどあの、えーつと、電車通りに通じる形の小さな、まあ、道ですね、そこに面して、えー、マンションがあったものですから、で、これはちよつともう、高さの関係からするとここは水が来るなどというのが分かりましたので、えーつと、近くのコンビニでとりあえず飲料水と食料を用意して、で、当時4階に住んでました、部屋に帰ってまず、バスタブにお水を全部張って、その他、えー、まあ用意できる容器全てに水を張って、それでちよつと、繋いだというような感じですね」

——では、当時のことを振り返って、もっとこうすれば

よかったみたいなきことはありますか？

「えーつと、私自身はというよりは、まあ、両親、あの実家がね、ちよつと、えー、山の方でしたので、えー、上町からの、えーつと、坂元の方の山だったんですね、で、当時携帯電話がまだ確か僕持ってなかったような気がします、まだそんなになかったような気がします。せいぜい、ポケベルかなんかじゃないかな。ほんとに家電なんですね。で、家に電話するけれどもちよつと人がいないということ、まあ結果的に両親は、あのー、それぞれ別々のところで避難して大丈夫だったんですけど、何をすればよかったかと言われると、えー、まあ、強いて、あのー……ない、なかったかなという今」

——最善の行動を

「最善だったのかもしれないけどね、まあ、水はもう、あの、夜の11時半ぐらいに、あの、引いて、で、窓から見ると、ほんとに、おそらく、いろんなところのビルに避難していた人たちが、あの、下に出て、あの、歩いてましたから、まあ、その代わり、もう大きな道路では、あの、乗り捨てられた車とかが悲惨なことになってまし

たけれども、はい」

——では、これでインタビューは以上になります。貴重なお時間ありがとうございます。

「はい、いいえ、こちらこそ」

「近くににいる人たちでみんなて手をつないで」

福重千和子さん

インタビュー 市来里那

文字おこし 市来里那

——これから、8. 6水書についてインタビューさせていただきます。

「はい」

——そのころ何歳で何をしていましたか？

「34歳で看護師をしてました」

——その日、どこでどうしていましたか？

「その日はですね、金曜日だったので、仕事が（夕方の）6時までであったので、病院で6時まで勤務をしています」

た」

——外の状況はどのように変化したか覚えていますか？
「はい。朝からずーっと断続的に、そんなに強くないんだけど雨がずーっと降り続いて、3時頃からもうあの
大粒な大雨。雨がすごくなって、で、でも市役所の前に
勤めてたので全然普通と変わらなかつたんです。で（い
つも通り）主人に迎えに来てくさいって（電話で）言っ
たら、（いつもなら）主人が中央駅（の近くの自宅）か
ら迎えに来るんだけど、（その日は）迎えに来れなくて、
こんな日になんて迎えに来ないのかな〜って言いながら
自分でバスに乗って帰ろうと思つたら、市役所でバスに
乗つたら、あの三越、今のマルヤ（マルヤガーデンズ）
ですよ。マルヤのところまで1時間かかつて、そした
らそこで1時間かかるならあと2時間ぐらいかかるなと
思つて、そこで降ろしてもらつたんです。『そこで降ろ
してください』って（運転手に）言つて。もうその時
にはもう雨がすこし止んでました、7時過ぎた頃には。
そしたら降りて、ケンタッキーを買つて、もう晩御飯も
できないからケンタッキーを買おうと思つて買つたら、

近くに（知らない）おばちゃんがおつて、おばちゃんが『私を（新屋敷の）公社ビル（鹿児島県住宅供給公社ビル）』まで連れていって言って。『おばちゃんどこから来たの』って言ったたら、『稲荷町から来た』って言って、『なんで稲荷町から来たの』って言ったたら、『もう川が氾濫をして、もう家がつかりそうになったからお金だけ、財布だけ握つて、あの、いとこの子が公社ビルにいるから行きたいのよ』って。『私を連れていってちょうだい』っておばちゃんが言ったので2人で行つたら、『向こうから来る男の人が『あんなたちどこに行くの』』って言ったから、いや、『中央駅（西鹿児島駅）に帰るんだよ』って言ったたら、『もうすごい水嵩がまして自分が180（cm）くらいあるけどもう首のところまで（水嵩が）来たからあんなたち2人じゃ到底じゃないと歩けないよ』』って（その男性が）言うから、おばちゃんと2人でずーっと水に膝の下までつかりながらずーっと歩けるところをずーっと下まで降りて行つて、そして歩けないから2人では、こう（ものに）つかまりながら（城南の方へ歩いて）行つて、そしたらあの、中央署（鹿児島

島県警中央警察署）の前のあそこにくう真ん中だけ、あの、植木がありますよね、あそこの上にはずーっと2人で（歩いて）行つて、そこをたどりたどり、あの中央署の前。で、今MBCがありますよ、あそこまで辿り着いたんですよ、そしたらそこまで行つたらそこはもうまたすごい水嵩があつて、もうそこまで以上は行けないから、『もう引き返しなさい』』って（誰かに）言われて、で、おばちゃんも公社ビル行つたらもう公社ビルもあの地下に、水が滝みたい流れ込んで、その時はもう雨は降つてなかつたけども川が氾濫してるから、その、水がすぐくて。また引かない状態、水が。そして、この家と家の間はもう水が流れるから川みたい、もうおばちゃんと2人で手を握らないともう流されそうになるぐらい。でその近くにいる人たちでみんなて手をつないで、とにかく。そしたら中央署に逃げなさい』って（誰かに）言われるから中央署に逃げて、そしたらそこがもう……みんなそこに、逃げてきてたんですよ。ね……。だから急に、あのー水嵩が、雨ももう止んでるんだけど水嵩がこう上がってくるっていう状態」

——そこから家まではどうやって帰られたんですか？

「(誰かに)『みんな中央署に行きなさい』って言われて、そこからもう到底じゃないけどおたくたちは、その、橋があつて、橋があそこ下がってますよ、あの、MBCのところ。そこ到底じゃないけどもう水嵩があつて泳げないし、危ないから中央署に逃げて、そこで、あの、柔道をする道場があつて、そこに行つて、そこにもうすぐく100人ぐらいかな？そこにもんな避難してたんですよ。そしたらそこも、あの1道場のところもだんだん水嵩が上がつてきて、でもう2階のあの観覧席みたいな、『そこにみんな逃げなさい』って。もうトイレも全部、道場も全部、浸かつて。トイレからもこう水が下から出てくる状態。で2階に避難して、そこで(夜の)1時くらいまでだったかな？そこにいたんですよ。で1時頃になつて、主人が泳いで迎えに来て、で1時頃になつたら私の足ではこの膝ぐらい。膝ぐらゐまで水が引いたので、2人でこう、それこそ高台をこゝう歩いて、帰りました。もうその代わりその足がほら、泥水だから下がね、粘土状になつて滑るから……2人で帰つたんですよ。それが

もう1時か2時でした、夜中の」

——どのように行動されましたか？

「だからもうとにかくみんなで、この、ロープがあるとこはロープを引いて、でそのおばちゃんを連れて、その、高いところ高いところ、そのちよつとずつ水に浸かつてないところで、こう水が引くのを待ったりして、ずっと高いところを自分たちでこう分かつてるところを、ここはちよつと高いここはちよつと低いつちゅうのをおばちゃんと話しながら行つて、とにかくそのあの1今のMBCの前の橋、橋もまだあとこれくらいかな？あと1Mくらいで(川の)水が上がるけどそこまでは上がつてなかつたから、そこまで行つて、でそれからまたもう中央署まで引き返したんですよ」

——そうだったんですよ……

「うん」

——水害を体験してどのように感じましたか？

「うーん、なんていうのかなあ？もう、怖い、怖いっていうのか急にほら、全然想像もしてない、想像もしてない、急にこゝう水嵩が上がるから、自分たちが考えてる

以上にその水嵩の上がり方が速いから……あの、本当に、なんちゅうのかなあ……水嵩があつという間に上がってくるからびつくりですよ。想像以上に、その、上からの雨とほら自分たちが感じてる雨とは水嵩がするのが速いんだなあつて、側溝とかからこう下から水が上がってくる量が恐ろしい感じですよ」

——水害を振り返つて、どうすればよかつたと思つていますか？

「振り返つてねえ……もう、とにかくこうちよつともう動かないで、こう、ビルの上とかに、ゆつくりするのが一番なのかなー。もうその時にはほら、もう家に帰りた一心で、その恐怖つていうのは、あんまり。最初はほんとに恐怖はなくて、わー水が降つてる降つてるつちゅう、その雨水がすごいねすごいねつていう、その、恐怖じゃなくて、まだ楽しいつちゅうのか、すごいねすごいねーつていう感覚。その怖さを知らないから。だから、だんだんこうしていく（水嵩が上がっていく）と怖くなつてきたんだけど、恐怖というよりも、わーすごいすごいっていう興味津々、な感じだったんです。だから

ら今考えるとやつぱり危ないので、やつぱりビルのところとかもうこう水が入つてないところに避難するのが先かなーつて、その家路を急ぐよりは、引き返した方がよかつたんだらうなーつて思う。この辺（職場付近）が全然どうもないから、元に戻る分が一番ベストだったんだと思います。その働いている職場のところに戻るのがベストかなーつて、今考えれば思いますけど、その時は恐怖はあんまりなかつたです」

——ありがとうございます。8・6水害についてあまり考えたことがなかつたんですけど、実際に体験した話を聞けて、色々知れてよかつたです。ありがとうございます。

「まだ詳しくね、教えられたらいいんだけど中々こう聞かれると、難しいですけど、まだ分からないことがあったらどうぞきいてください」

——はい、ありがとうございます。

「木造の3階建てを提案したの」

田平俊夫さん

インタビュアー 青木志歩実
文字おこし 青木志歩実・紺野生喜

「喋り始めて）いいの？ぼく、あ、まあ、あの、最初からね。あのー、ぼくー、建築会社にいたのよ。建築会社ー、でね、まあ、あの、働いてただけど、ちょうどその時に、始良か国分かもうよくもう覚えてないんだけど、30年前のことだからね？んで、まあ、あの、社員と二人であるのー、向こうに行つて、帰つてくる途中で、何時ごろだったかねえ、もう日が過ぎてただけど、あのー、途中ですこーく雨が降つたのよ。(国道)10号線沿いでね。ほんで、まあそんなに気にしなくてさ、来てただけど、そしたら、あの、鹿児島に入ってきたらね、あのー、なんだっけ、えーっと、どのあたりかな、あのー、県民交流センターってゆうところ知ってる？」

あー……。

「昔の(県庁)」

「どこらへんですっけ？聞いたことはありません。」

「うん、そうそうそう。そこんところおからね、ちよつとなんか、周りの車が、渋滞とかすんものがあつて、ほいで、僕はその、地方から鹿児島に帰つてきて、ほいで、あのー、原良に上ろうと、お客さんとこに、行こうという、考えだったの。そしたら、あのー、県民交流センター前を過ぎて、曙陸橋つてわかるかな？あけぼの……」

「曙陸橋？」

「うん」

「わかんない……。」

「曙陸橋わからなかつたらね、まああのー、曙陸橋からJRをこして、原良に行こうと思つたの。そしたらもうめっちゃくちゃ混んでさ、もうにつちもさつちもいかないのよ。動かないのよ。それで、もうお客さんに電話して、申し訳ないけど、こんな状態だからつてことで。もうそこキャンセルして、会社に戻つたの。そしたらね、まずー、第一にまあうちのやつが皇徳寺(ニュータウン)にいたつたつたけど、電話したら子供がもう外に出てる

から、ま、ちよつと心配だから、電話かけたんだらうな、な。そしたら、『天文館がすごい水浸しだよ』って。特にねえ、私も、地下室で職業するときには気を付けなきゃいけないんだけど。地下室のここにはさ、水がいつぱい入ってさ、大変だったのよ。僕のいとこが、あの、加治屋町で病院をしてたんだけど、もうそういうところはね、もう、なんていうの、役所のほうで、優先的に業者を手配してくれてて、ほいでー、あのー、土嚢を積んだりとかさ、そういうのをするような状況だった。ほいで先ほどうちのように、曙陸橋のとかも、ぜんつぜんもう、（聞き取れない）さん、あの、帰る時間、まあ、ひどかったから、早く帰ろうと思つたりしたんじゃない？そしたら、ぜんつぜん進まなくてさ、もうひどいもんだつたよ。そしてねえ、もうさつき言つたように、あのー、なんてゆうかな、お客さんに電話してもうことわりを入れて、了解もらつてさ、会社に帰つたの。そしたらね、あのー、今度は社員がさ、社員がみんな（行方が）つかめないわけよ。それでー、なんていうかな、あのー、とくにねえ、心配したのは、ちようどある営業マンが、あのー、松下

電工いまのパナソニックね？パナソニックの社員と同行してるって。同行してね、お客さんところに、あのー、行ってるんだと。どつか、河頭の上のほうでね。（と）いうのが一つ。それとも社員があ、連絡つかない。そしてまあ、あの、職人っていうのは僕もなんかそういうのはつかめなかつたんだけど、まず一番、その女の子おが、もう、ほら、僕ら会社として責任があるから、どうなつたんだろって心配でさ、そしたら、同行したやつがー、ちよつと遅くなつて、何時ごろだつたかな、10時か、11時ぐらいいかな。あのー、僕と連絡が取れて。もう先に、早めに帰つたんだと。（と）いうことでまず一安心。ね？やつばあ女の子だしさ、若いとおなんかあつたらあ……、大変だからね。ね？（そし）たら、僕のその一緒にいた奴はね、まあ、そんなほか（そのほか）に仕事があつて、（客先を）回つたと思うんだけど、もう私は家に帰れないというわけよ。うん。あのね、あの甲突川沿いがすごかつたんよ。ほんでもう帰れないと。ならいいから、どつか近くにホテルとかそういうのがあるから、そこに泊まれ。でいうことでまあ一人、一人は（部屋がとれて）

よかった。ほんで、もう一人はね、あのー、僕夜のー、
だいたい2時くらいまで会社におつて、みんなのほら、
連絡を、まあみんな返してね、あのーなんつうかな、あの、
待つてただけど、そしたら、一番最後に来たのが、あ
のー、工務の課長がね、あのー連絡が取れないってこと
でさ、ほいで奥さんからもさ、泣いて電話がくるわけよ。
それで僕も困っちゃつてさ。まあ何とか連絡つけたけど、
そしたら（課長から電話が）来てさ、本人はわりかしこ
う、もう冷静。そん工務課長のほうはね。うちのやつ（妻）
はそんなもうげねつちい（恥ずかしい）からどうのこう
の（連絡したくない）とかさ。ほいで、電話と電話を引っ
付けてさ、（課長と妻を）話をさせたことがある」

——あー、奥さんと？

「そうそう。それが伊敷のほらあの、高速の入り口やった。
伊敷の。一瞬そこまでできたのよ。ほんだからあとはもう帰
れるから、もうそのままストレートに谷山の奴だったか
ら、『もう帰れ』と。いうことで。そしたらね、次の日
にしたら、今度は、大工がね帰ってきてないのがあるっ
て。国分の現場があつてね。そこにとまったらしいのよ。

国分の現場に、建築現場に。だから、まあそういう連絡を、
たいしてまあ社員の被害はなかつたし、まあお客さんは
被害はあつただけどね、建築していただいた方。まあ
その人命的なものがなかつたつてのが一番やつたな。う
ん。ほんでもう僕もさ、もう眠くてさ、あのー椅子の上
でこうガクつてなつて寝てた。まあそれで、あのー、そ
こから家に帰つてと。それで今度は次の日にさ、今度は
あのー、まあわりかし、ほらー、（会社は）あの年間た
くさん（建物を）作つてるところやつたもんだから、
建築してるお客さんがいっぱいいらつしやるのよ。作つ
ていただいた。ほんでねえ、社員が手分けしてさ、何組
かに分けて（顔を出しに行った）。僕が行つたのはあ、
あのー、（高麗町の）MBCの本社知つてる？南日本放
送の」

——ど、どこにあるかはちよつと……。

「鹿大（鹿児島大学）……（の比較的近く）、甲突川のね、
まあ脇にある、ま、MBCのあの会社のすぐー、あのー、
隣ぐらいい、おばあちゃんが一人いたのよ。作ってもらつ
た人。でそこにー、何人やつたかなあ、7、8人、一緒

に行つて、家の片づけ。そしたらねえ、もう、2階建てをやつたからよかつたのよ。そこのおばあちゃんねえ、階段の、途中までは登れたから、まあそこで、あの一、一晩、あの一夜を明かしてる。ほいで一、まず一、なんだつけ、畳はだめでしょ？畳が一番重たいのよ。もう一人じゃ絶対持てないぐらい。そして、あの一、なんだつけ、タンスの中に水がいつぱいあつてさ、タンスを持ち出して水をサーっとこうして、うっふうふ、そんな、もうそういうので、あの一、うん。ああ終わったんだけど。まあわりかし、その（その）利便性よ。みんなに迷惑かけるよなところはもう、市役所が重点的に、あの一、職人さんつてゆうの、配置してるわけ。だからもう畳をね、道路に出せばもうすぐあの一（処分場）持つててくれる。あの一、うん、ちつさなショベルカーみたいな、こうやつて。だから一、何日か大変だったよ。そしてねえ、あの一、今度はまた、あの一、もうそんなもんかな。もうちつさく（細かく）言えばまあ色々あるんだろうけど。ほいで一、永吉地区つてのが結構ほら、甲突川のあの一、わきに永吉地区が広がつて、ある一つのとだけがまあ水につ

からなかつたんだけど、他は全部浸かつたのよ。それで、浸かつたんだけど、今度は、も一、そこにこれから家を建てるつていう時にはね、あの一、まあ、区画整理のことだつたもんだから、土地も狭いしつていうことで、僕なんかがだいたい最初のほうじゃないかな。木造の3階建てを、提案したの。うん、あの一、一階はさ、車庫とか、あの倉庫とか、そういうのですね。そして、あの一、（お客さんは）皆さん若い人ばかりだつたらうから、2階3階に住まい（の企画）を持つてくと。わりかし僕なんか最初だつたと思う。その一、木造の三階建てを提案したの」

——あ、災害受けてから……？

「うん、災害受けてからだよそりゃ」

——災害受けてから、3階建て作つたほうがいいんじゃないか、みたいな？ああ……。

「まあ狭いしね、結構ねえ、作らしていただいたよ。まあ、そういうとこかなあ。もう5分経つたんじゃないの？」

——いや、ありがとうござります。

「まだ話聞きたい？いくらでもあるんだけど」

——なんかこちらから質問しなきゃいけないこともあって……。

「あそうなん。なら聞いて」

——そのころ何歳でしたか？

「僕はね、長男が、15歳くらいだったから、41か2かな」

——その日どこでどうしてたかは、さっき、聞きましたね。

「うん、そうそうそう。会社は卸本町にあったの。わからないよね。谷山にある。鹿児島の人じゃないと、地名わからない」

——卸本町で、建築屋さんをしてた？

「建築の、あの、会社に勤めてた」

——建築会社に勤めていた。

「うん。鹿児島は、災害が……、ああいいよ、どうぞ、あなたのから聞いて」

——卸本町、谷山のほうだったけど、国分にいたって言ってましたっけ？

「うんそうそう。あのね、あの、その当時は、国分に営

業所があった。(営業所)を持って。鹿児島のねえ、国分に営業所があった。うん、多分始良やったと思うんだけどね、お客さんのところに行つて、二人で行つてね」

——あ、お客さんのところに行つていたってことですね。

「うん行つてた。それで帰つてきたらもう雨がすごくてさ、線状降水帯がザーつて」

——帰つてくるときに。

「うん、帰つてくるときに」

——あ、そっか。建築屋さんだから、色々家があるけん、そこに行くつてことですか？

「そうそう。あっちこつちね、まあ僕はなんか自分ももう営業主体だったからそんなに仕事ができるわけじゃないけど、だからあの、うんそうそう、社員を連れていくことはできたから結構もうあっちこつち。鹿児島災害が多いでしょう」

——ああ、そうなんですか

「うん、ほいでその時に僕のいとこがそれこそ竜ヶ水の落石のところ立ち往生して、それで、船で」

——船で

「うん、あのね、竜ヶ水のね、なんていったつけ……（カソリン） スタンドあるんだけどガソリンの安いところ、そのちよつと、あのー、下側のところが崩れて今ちよつとど、あのー、テレビなんかに出るよ、J Rが流されたりとか、海に」

——え、そうなんですか

「ああ、知らなかった」

——知らなかったです

「そういうのを聞くんだったら、たくさん見とかないといけない、あつはつは」

——あ、見ました、見ました

「車とかさ、あのー、J Rとか」

——見ました

「結構ね、みんなね、まあ、僕のその知ってるのはみんなラッキーだったんだよね、ラッキーというか、あのー、事故がなくて、お客さんにも、そんなふうなくて、それが一番良いよね。心配だよねー、だけど、あのねー、互なんかやられて（い）ればね、職人さんはもう下におろすまではやっぱりこう全部が大変ね、気を使う。あの

ね、滑るでしょ、うん、まあそういうのが台風の時なんだけど、それとまあ先ほどその竜ヶ水の話をしたけど鹿児島は（土地が）シラスでさ盛土の多いもんだから、盛土ってどういう風にいったらいいかな」

——しらす？

「うん、シラス、カタカナでシラス。うん、そつちから見ればね、マグマがこうあるとして、ここにさ、あの溶液を作つてね、ここを盛つてくのよ、こういうなの（土地）が結構あつちこつちにあるのよ、ここもそうだしね」

——盛土が……

「うん、だから、山が崩れて、そそ……山つていうのはさ、ここが崩れるのはね、普通あのー、僕は、ああなるほどなつて思つたのは、あのー、山の一角の崩れるところに木を植えてるでしょ、腐らないように、そこは崩れずにその脇のなんていうかな木が茂つたところが崩れるんだつてね、らしいよ、だから一時は、ああ、あの国道10号線を通るように……災害とかそんなのぼつかりしかね、災害の時に結構動いてるからさ、もうその、8・6水害もそうだけど、（南さつま市の）万之瀬川のとこ

ろもそうだったし、いろんなところの災害の時に、台風の時隣、あのー、下の方からおたくの建物の下が崩れるっていうことで台風の中を走ったりとかさ、建築屋さんそんな感じだねー、っていうのが大変だった…：大分はそういうのはないの、災害ってあんまり」

——ありました、なんか私の住んでいるところは結構ひどいやつ来ます、結構なんかだいたい、氾濫して学校浸かったりとかもたまにあつたし、結構すごい。

「永吉ではね、うちの会社ではないんだけど、あのー、ライバルのところの人が、あのー、下の、なんていうかな、基礎のところの中身を床のところの土を、あのー、土がいつぱい入ってきてるから、取り出せばね、そういうところでママシに噛まれたとかさ、それはわからないけどね本当かどうか、まあ、そういう話もあつたよ」

——ママシに噛まれた？8・6水害の時に？

「だから、どつから来るのかなと思つて、川とか砂に流されてくるんだらうな」

——ああ、水害で流されて、ああ

「ほいでね、その甲突川のことを話をすればね、今度は

…：ミスミ（株式会社MISUMI）はガソリンスタンドとかいろいろやってるんだけど、うちの販売店さんで、あのー、他の建築屋さんで作ってる人がいたんだ、で、甲突川の脇にあつて、まあその土砂でね、水で、ガラスが割れてさ、もうその作った建築会社さんはもう来れないって言うんだつて。ほいで、あのー、僕はさ、あのー、走つたの（向かつたの）伊敷に。ただ、県の職員がねバリケードをしててね、うん、ほいでそこに立つててさ、なんかあのーまあその、なんていうの、中に住んでいる人だけを通すということを、があつただけど、ちょうど僕が行つたときはその人たち（県の職員）がいなかったのよ、で、僕はその中を、僕の手だけ走る。甲突川の脇をずーっと走つていつて、そして、現地に着いて、河頭まで行つて、ほいで、あのー、工務（店）の方にガラスの手配をするようにしてもらつて」

——こうむの人？ガラスの手配？

「うん、SS（サービステーション）なんかガラス張り、あ、スタンド、ガソリンスタンドがガラス張り、で、中がよく見えるようになってるの、で、作った人か

らも見放されて、うちはほら、あのー、ガソリンかガスか知らないけど、卸してたから『うちの意見聞かしてくれ』って言って明日にしてって、ほんで、すぐ修理してもらって、まあ結構ね、あのー、支払代とか、あのー、よかったんだから業者も協力的に動いてくれたの。まあそれが一番だねえ。お客さん困ってるのになさ、雨漏りしてるのになさ、来ないとかなるとき業者が。(お客さんが)可哀想……今日のはこういう感じかな、ござか(細かい話)は結構あるんだろうけど、もう思い出せない」

——いやあ、ありがとうございます

「あんま覚えてたら大変だよ、ね」

——どのように状況が変化したか(教えてください)

「状況が変化した?」

——普通の時からどんな風に(変化した)ってことですかね。普通の、どういう感じで、なんか、そのこんな豪雨になった、今の普通の状況からどんな風にすごい大雨になったのかなって

「ああ、それはわからないけどね、要するに、今でいう線状降水帯という感じじゃない?……まあね、途中、な

んか、もう、昨日、昨日か、NHKのテレビでやってたけど、もう前が見えないぐらいの激しい雨がだったよ(降ったよ)、僕なんか一人で(車に)乗ってたから良かったけど」

——ああ、車? 帰りよったんか、帰りよって、ああ、そうかそうか

「だからこう、早めに避難することと危ないところには近づかない、そうだよって言うてればさ、川に落ちて死んでたとかさ、ほな(そんな)わからないよー子どもは動かないもん、ドアも開かないしさ……。よく田んぼをほら、あのー、見回りに行つて帰つてこないって人がいるでしょ、そういうのはね、もう、僕なんかの見解はどうしようもないわ、そら雨よね、あのー、洪水を止めるってことはできないわけだから、どのを積むぐらいならね」

——泥を積む?

「土嚢、土嚢ね」

——どの?

「土嚢」

——土囊

「うん、あの、ほら、水が入らないように、あのー、土を入れた袋を置いてく」

——あー、それ土囊って言うんですね。なんて書くんですか？土囊って、土に囊……え、なんか、振り返ってどうすればよかったのかとありますか？この時、こうすればよかったとありますか？

「どうすればよかったというのはあんまないね、ないっていうか、さっき言ったように、その、早めに避難したりとかそういうの、あのー、そういうのが、危ないところに近づかないとかさ、そういうのが基本だと思うんだけどね、僕なんかとしては、やはりこう、お客さん困ってるから早くね、対処してあげるかって、そういうことです」

——どちらかというと自分が避難するとかっていうよりも自分が作ったおうちのお客さんのおうちの修理みたいななそういうことですね

「まあ、お客さんも理解してくれるけどね」

——あ、ほんとですか

「うん、あのー、そのおうちだけじゃなくてさ、他にいっぱいあるわけだから、だけどそんなには無かったような、僕は実際、そういうのでは動いてはいないよね、現場の補修とかね、そんなに動いてないんだけど、お手伝いはやったけど、補修にはあんまり動いてない、まあできないもん」

——あー、そんなに補修には行っていない

「うん……そんなあんまないもんね、新川沿いとかあんなところとか拠点だったらあったかもしれないけど、鹿大の裏ちよつと南側に新川つてのが流れてる、あそこはね（土地が）低いよ、あのー、なんだっけ、高いところと、鹿大側は高いんだけど川を挟んで反対側に、昔低くて排水口の方から逆にこう、水が流れてきた、今はほら、あのー、結構、あのー、改善されてるけど、甲突川も綺麗になったもんね……もう、流されたらどうしようもないもん、もう動けない、いくら達者な人でもね……だいたい、みんなこんな感じじゃない」

——ああ、もうすごい、いい話が聞けました。

「いやあ、そうっはっはっはっはっ」

「水はあつという間」

佐藤和子さん（仮名）

インタビュール 皆村羽月

文字おこし 皆村羽月

——水害の時には（どこにいましたか）？

「その日は、水害が来る前は仕事をしていました。5時まで」

——5時まで。はい、天文館（繁華街）のどこら辺でしたっけ。

「三越の、友の会の受付をしていました。52（歳）ぐらいだったかな」

——はい。

「あ、8. 6水害の時は、あの、仕事は5時に終わって、そして、前もって約束してたのね。今日はお食事に行きましようっていうことで、はい、数人で。ほいで私は鹿児島に来て1年も経ってなかったから、あの、今考えると、千日町の地下の食堂でお食事していた」

——ああ、地下の。

「そう。あの、私はついて行っただけけど。連れて行ってくれる人がいて、食堂。そして、あの……足を何気なく床につけようとしたら、もう水浸しになってたの、8. 6水害の日。だから、午前中はなんでもなかったんじゃないかな」

——ああ、働いてる間というか。

「これは事務所の中だし。はい、気づかなくて。ほんで、足を床につけようとしたら水が入ってて、慌てて電車通りに出たら、バスはストップしてるし、電車もストップしてるし、そこら一面水だったの」

——どこら辺まで（水は）きてました？

「そう、その時はね、あ、ここらへんまでだったけど」

——ああ、くるぶしぐらいまで。

「ほいで、あの……公衆電話を探し歩いたのね。その、数人でそれぞれ家に電話しなくちゃいけないって。そして、その公衆電話を探すのには、もう、あの、足の付け根まで水があつて、そう、女性だったから、ほら、下半身を濡らしちゃいけないっていう気もあつたし、その

頃はパンプスも履いてたから、パンプスを、背伸びして、そしてスカートをこの足の付け根にまでもって、公衆電話をずっと探し歩いて、あの、ずっと歩き回ったの、今考えたら、あの、ザビエル教会とか、はい、なんとか、あぜちさん？あつじさん？病院の」

——厚地（病院）さんじゃなかったですけ。

「あそこから、近辺をみんな歩いて、そして、公衆電話があったら。あったけど。はい。みんな公衆電話に並んでらっしゃる。でも、電話が通じなかったのね。ほんと、その数人のうちの1人の方が、あのー、千石馬場のマンションに住んでらっしゃる方で、そこまで行くのもね、転んではいけない、ほいで、ドブ水でしょ。もうトイレも、普通の水もごちゃ混ぜだから、流れて出てきちゃって、そう、汚いと思つて、ゆつくりゆつくり、ずっとぐるぐる回つて、やつとそのマンションにたどり着いたの。でも、その時は、あの……着替えもなく、マンションには泊めてもらつたけど、はい。一睡もできなくて、あの、一夜を過ごさせてもらった。ほいで翌日、あの、もう（国道）3号線沿いとはこつちの、あ、もう同じ高さだった

の、水しなくて。ほいで、あーと思つて、これじゃ帰れないと思つて、夕方までそのうちにさしてもらったけど、食事抜きでしょ。食べ物なくて、お店はもちろん空いてないし。あの……少し水が引いた頃に、1番端っこの大丈夫そうところをね。私はこつち方面（伊敷方面）1人だったから、ゆつくりゆつくりフラフラ、フラフラしながら帰ってきた。だから、自然災害で、とつても怖いけど、水もまた怖い」

——水は怖いですよ。

「怖い」

——少しの高さでも流されるって言いますもんね。怖いですよ。

「ほんでも、甲突川には、軽自動車とか浮いてるの」

——浮いてるんですか。

「うん。流されて。……だから、本当はテレビで8.6水害のことをおじさんが話していらしたけど、思い出しなくなつた。うん、怖くて。なんの自然災害も怖いけど、台風とかは、あの、予報で今どこ、大体どこら近辺。沖繩とかどこら近辺とかつて言うんでしょ。種子島とか。

もう水はあつという間でしたもん。うん」

——ですわね。早いでもんね。

「早い。だから、その食堂で、いつの間に水が階段落ちてきたのかも気づかなかつた。楽しく食事していたから」

——それまでは外も見えないでもんね。地下の方でしたっけ。

「そう、地下だからね。何にも見えない」

——見えない状態で。

「ほいで、お店の方も。はい。気づかれなかつたんじゃない」

——ああ、気づいてたら言われますもんね。

「そう、ほんとにね。怖かつた」

「子供たちが遊びに行つたまま連絡がつかない」

皆村のみ子さん

インタビュアー 皆村羽月

文字おこし 清水春菜

——何歳ぐらいの時だつた？

「そうね、44(歳)ぐらい……うん、ぐらいのところで。

うん、ばあちゃんは仕事はちよつとだけパートでしてたけど、その日はお休みで家にいました。それで夏休みだから子どもが3人は家にいて一人は上の兄ちゃんがアルバイトに行つた。うん、そんな状態でしたわね」

——あれ、じいちゃんは沖永良部行つてたんだよね？お父さんも行つたつて言つた。

「あ、じゃあお父さんも……そう、そしたら家には2人だつた。それは覚えてなかつた」

——なんか、いなかつたんだよねつて言われた。

「そうねえ、じゃあ、そしてねその時は、まあ災害自体は、すぐその我が家のあのね目の前の法面つて分かる

法面」

——ああ、法面、斜面じゃないけど……

「そういうところが崩れたんだけど、その日はね昼過ぎからすごく降ってたね、雨がね。すごく降つてとにかくすごいなあすごいなあとずっと思つて、滝みたいなの。と思つてたんだけど。そのうちにまあ、停電にもなったよ。うな感じだよ。だから実際に情報は全く入らないで、テレビも点かないし、ラジオだけがあれ(情報源)だった」

——その時は固定電話あつたんだっけ？

「あの、固定電話があつて携帯はない。だからまあ、そうね、えーラジオで分かった。いろいろこう情報がね(入つてきて)、甲突川が大変な状態にあるつて。でもその何日か前から、竜ヶ水でなんかとか、どこどこが崩れたつて鹿児島は大変な状況だつていうことが全国的に広がつて。それでちようど電話でね、お父さんの友達という人から『鹿児島大変だつたらしいですよけど大丈夫だつたですか？』つて電話が。ばあちゃんそれに対してね、おじいちゃんいなかったから、『その前まで大丈夫だったんですけど今が大変なんです。今がすごいです』つ

言つたの覚えてるね」

「ほいてまあ、それはそれで。とにかく停電になつてラジオつけてたら、ラジオの中でね今あの、うんまあ状況、ちよつと説明があつたり避難してる人達のの、『私は何とかです、今どこにおります、大丈夫ですから』というよ。うな、そういう安否のお知らせの……」

——ラジオの？そんなのあるんだね。

「常にあつたの。特にあの河頭に住んでたから、あの辺の人たちがやつぱり大変だと思つてね。知つてそんな名前の人が何人かいてね。『今どこにいますので大丈夫です』とかね。うん、そういう放送がずつとテレビじゃなくてラジオで流れてて」

「その後……でも記憶が正確じゃないんだけどその後ぐらいに、電気はもうしばらくつかなくなつただけど、そのうちに(電気が)ついて、でテレビを見たら流れてるの見たんだけどね。その後にもちよつと遅れて断水だつたよ。水が出てこなくなつて。でどつかにこう、あのタンクが来てそこで抜くというようにやつたね」

——やつぱりようろとかなんか……市外の人たちが……

お母さんだったかな、なんかじょうろを全部持つてこいみたいな。買えるだけ買って帰って来いって言われたつて。

じょうろとかは使った？

「じいちゃんが帰ってきた頃だったんだらうね。じいちゃんに行つてもらつてからあんまりその記憶ないんだけど。とにかく水がなくなつたね。それでこも法面が崩れたんだけどでも道路全体に土砂があつて。隣にある家のおじいちゃんたちが行つてる、床下に泥が全部流れて。その家だけこのあたりで巻き込まれた」

「それでえー、じいちゃんの妹がああ伊敷の下の方にいたんだけど。その人は働いてて病院で、子供たちが遊びに行つたまま連絡がつかない。その時は伊敷小学校に避難だったんだけど」

——伊敷小か……下の方だよね。

「うん。伊敷校区の人だったから。長井田川っていう川がもう一つあつて。その裏の方の川があつて。そこも危ないからつて、まあそれで見に行つてちょうだいって言われたんだけど、こども崩れてるし、行つたら最後上つ

て来れないよねつて思つて。伊敷団地上つてくる坂ももう崩れてるんじゃないかなと思つて。さすがに行けなかつた。心配だったけどね」

——お父さんから連絡きた？電話かなんか。電話がつかなくてしばらく……

「電気であれして（動いて）いるからね。コンセントが繋がらなかつたかもね。あちらはテレビがつくから状況がわかつて、それよりこつちはもう全然状況がわからなくて、テレビが見れないから。ただなんかすごい雨で甲突川が氾濫しているらしいつていうのがわかつたんだけど、それ以上はわからなくて。したらまあ、後でテレビがついてからすごい状況だつていうのが分かつた。あとまあ5時か6時ぐらいから8時までの2時間ぐらいの間の出来事だったよね」

——結構短い間……

「そうそう、それでねその後に仕事で何日後だったかな……次の日だと思つてたんだけど次の日は土曜日か日曜日になつて。次の日じゃなかつたもんね、仕事に行つたつてことはね。仕事は土日しないから（笑）そしたら

ねもうあのバスでね。一応伊敷団地のバスが降りていったときに見た光景が……あの電柱とか木があるでしょ、あそこにタンス、冷蔵庫。要するに家具がもう全部引っかかって流れてて泥になって、その大きな家具とか畳とかが全部くっついていたんだけど。うんすごい状態だった。でも水は流れてたんだけど。で帰りはもうそのバスもなく歩いて登った。ずっと伊敷まできて、そこからバスがちよっと来たかかって。帰ってきたんだけどね。でその1週間後ぐらいにはそれらの粗大ゴミが全部撤去されて」

——1週間！？早いね。

「うん、綺麗になってたような記憶がある」

——泥とかってどのぐらい？

「かなりの高さあったと思うよ。何メートルだったのかちよっとわからないけど」

——メートルなんだ。

「だったと思う。床下……それでこの辺りはボットン便所だったから、汚く上がってしまって、っていう話もなんかこう聞いてね」

——やっぱり下水とかも逆流してきた？

「逆流してきたね」

——大変だったね。

「大変だったねあの時は。そしてその後にお父さんと一緒に昔住んでた河頭のところ……次の日に帰ってきたから、見に行ったら。そしたらもうあの辺りの、ちようどこうカーブになってるとこだったからね。家がもう何軒か流されて無くなってた。もう下のセメントの部分だけが残って。そんな家が2、3軒あって」

——完全に流されて？

「もう本当に完全に何にもなくなつてるところが3軒か4軒あって。で昔住んでた自分の家はちようどこの半分からなくなつてて」

——その時はそのお家には住んでなかったんだよね？

「そう、その時はこちらの方に引越してきてたからね。助かったんだけれども、あの時ここにいたらやっぱり怖かったんだろうなと思った」

——大変だったことかある？

「おばあちゃんたちは、まあ家も別に被害は受けなかつ

たから。水道はまあちよつと一週間とか、ちよつと遅かったような記憶が……それがちよつと大変だったかな。でもまあ飲み水もどつかタンクが来てて、それがあから大丈夫だったと思う。電気はそんなに長くまでは停電はなかった。でその時の甲突川のある状態見たらもう大変なことになってたっていうのが、それを見てから初めて」

——氾濫しているんだ、って？
「うんうん、そうだったんだっていうのがね、びっくりして後から。その後は片づける人達が、床下浸水になつてて置はほらだめだし、泥を片付けるのに大変だったって」

——みんなで泥とか出して？

「うんそうだね。そう、アルバイトに行つてたその一番上の兄ちゃん、遠回りをして帰ってきたようなこと聞いたけど。どうにかこうにかして帰ってきた」

——それは帰ってきたのは、そのあつた日とかではなく治まつてから？

「治まつてからというか遅く帰ってきた。天文館の方はひどかったけど、他の方でアルバイトしてたから。あの

時は、なんにもこうなくなつちやつたからね。あの河頭の状態だね。大変だったっていうの聞いてて……あの辺でもこうお菓子屋さんがあつただけで、そのお菓子屋さんみんなに配つたりっていうの聞いてたね。したんだよっていう話をね。協力して皆やつたね。ずっと夜遅くまで名前……『誰はど』こいいます。大丈夫。』つて流れてたね。ラジオだけだったから。そうそう今の状況が分からなかつただけでも、すごい雨と……ただその8時ごろにはもう確かあんまり、まあ降つてたんだとは思うんだけど。2時間とか3時間ぐらいのこと。天文館までこうずっと上がつてきてっていう話よね。何か思い出すことがあつたかな……」

——振り返つて何かこうすればよかつたなとかはある？
「うーん。やつぱり自分たちは家がどうかやつたわけでもなかつたから、全然まあそういう（困つた）のはお水ぐらいたつたからね、でもまあその飲み水も、どつかに汲みに行けば大丈夫だったから良かったんだけど。やつぱり、予測しておく必要があるんだというか準備しておく必要があるっていうのはね。それと食べ物と少し1日、

2日ぐらいのね、食べ物と水と」

——災害バックみたいなのも？」

「そんなものね、やっぱり必要でトイレね。トイレが一番大変だなと思った」

——断水して？」

「そうそうそう。役に立てたでしようか」

——ありがとうございます。

「JRに乗ってて亡くなった」

室田みしほさん

インタビュアー 古市蓮

文字おこし 清水春菜・明星利幸

「もう三十年前だから……本当に」

——そうですね、ほんとに30年前ですね。

「ただ雨がすごいなと思いつながら……えっと、みんなその日は出勤する人たちがみんなというか、あの、ほら、交通が多分もうストップしてるから、時刻がちょっと遅

くなりますよとか……そういう連絡が入って。自分は当直明けで、ちょっと遅く、あのー一定時には帰れなかったけど」

——うん。

「帰ったら、あのー、脇田？あの車屋さん、あれは、なんだ？……中村？えーと……」

——脇田の方ですか？

「脇田の、あの川はなに？あの、あのあたりで」

——あー、はいはいはいはい……ああ！

「分かる？」

——分かります分かります！

「分かる？あのあたりで、一回。一回というか、あのー国道がもう完全に水没してて。歩いて帰るしかなかったから。ひざ下くらいまで多分」

——あつ、そこでもそんなに浸水してたんですか！？」

「あそこつてめつたに……浸水っていうか、無かつたんじゃないかなと思っただけ。で、その時は、南（鹿児島）駅のマンションに住んでたから……新川、よく氾濫してた」

——はいはい。

「新川の近くももちろん、ひざ上ぐらいまで、浸かったんじゃないかな？」

——新川ってあの涙橋の？

「そうそうそうそう！あそこは、雨が結構降るとよく氾濫してたから、まあそこは、氾濫をするだろうとは思って帰ったんだけど、まさかあそこで、あの脇田の所で浸水してるとは思わず」

——ああ。

「ただもう、あのー、今みたいにスマホとか携帯が普及してる訳じゃないから。ただ天気が、あの、まあ雨がすごいなあという感じで帰ったけど」

「後でもうその、電車が、あの、流されたりとか……そういう、水害がひどかったっていうのは後で、ニュースなどで知って。あー、やっぱり凄かったんだなーっていうの pensando」

——その時、お仕事はなにされてたんですか？

「看護師です」

——あー、看護師で、当直明けでって感じですか？

「そうそうそう、そうです」

——えっ、そこからなんか……その雨の後の生活とか、ちよつと変わったりとかしたんですか？

「自分たちは特に変わらなかつたけども、えっと……あの、その勤務先に入入りしてる業者さんで、やっぱり奥さんがその、JRに乗ってて……亡くなったっていうのは」

——ええ……

「聞いて、えええーっ！？って」

——えっ、JRに乗ってて亡くなったんですか！？

「そうそう、JRが流されたの知らない？竜ヶ水で」

——ああー！はいはいはい。

「あの電車に乗ってて、流される」

——はっ！そうなんですか！？

「そうそうそう、んー、だからそれでいや、すごく身近に感じるというかなんか……ああ、やっぱりこう、他人事では無いんだなあっていうのを感じたね」

——ああ……恐ろしいですね。えっ、もう雨っていうのはもう、なんか最近凄い雨降ったじゃないですか？（イ

インタビュアの) 3日前4日前ぐらいですか?あれの強いときがずっと続くってぐらいだった(つていう感じですか?)

「すごかったと思う……」

——それぐらいの印象、やっぱりあったんですね……
「うん、酷かったよねえ……で今みたい、多分もう災害を繰り返して、今みたいな警告とかそういうのがもう出てきて」

——そうですよね。

「前もつてこう、準備ができるように。避難とかそういうのが多分……まあ、そういうのを繰り返したらいけないんだけど、んー(そうやって) 出来てるんじゃないかなあとは思うけど……」

——へえ……その病院自体は、その、住まれてた所とは近かったりとかしたんですか?歩いて……?

「えーと、いや、通常……はね、歩くとあのー、小松原だから。電車通勤だったのね。でも電車もストップしてるし……」

——あぁーそうですね、たしかに……えっ、その次の日

とか出勤とかできたりは一応したんですか?

「あんま、こっちつていうかこの辺、あのー、自分の住んでる辺りは特にはまあ、あの、水没をした所はあるかもしれないけど、自分たちに直接、影響はなかったから」
——そうなんですすね……あそっか、そうですね。やっぱり天文館とかそこら辺がやっぱり凄かったつていう……
ですすよね?

「たぁー、もう記憶がないねえ(笑)」

——あ、そうですね(笑)

「けどあの竜ヶ水のあれはもう、やっぱり、あぁー、そこそんなに凄い雨だったんだあつと思つて。しかもテレビに出てたニュースで、その知ってる人の奥さんが亡くなつたつて聞いたら、ええ……つてやっぱり思つてしまふよね……」

——はいはいはい、ええ恐ろしいですね……

「うん。へえー鹿児島大学なんだね」

——そうですね。結構いろんな人に当たつたんですけど、なんか、何人かにインタビュしたんですけど当時の事ほんとに小学生ぐらいの、若くてその(インタビュを

した) 親が、小学生くらいの時だから覚えてない、みたいなので断られたりとか。行ったりはしたんですけど……とかもあって、聞けなくて、やっと室田さんに聞けたって感じです。

「もう、あのー、多分今思うと、多分あの、浸かって帰る、浸かってっていうか足……、もこの辺ひざ位まで浸かって帰る、歩いて帰るっていうのは、やっぱり危ないのかなあと(笑)」

今思えば(笑)」

——そうですね(笑)

「やけど、帰らなきゃー!」と思ってるからこっちは(笑)」

——はいはいはい(笑) あそっか、病院から家までも、歩いて帰ったってことですよね?

「うん……ずっと歩いて帰ったよ。交通手段がないから」

——確かにそうですね……

「電車が止まるなんて珍しいもんね」

——そうですね……

「ご両親は覚えてないの?」

——種子島の人で、自分たちが、だからここにはいなかったん

たんですね。

「そっかあ、鹿児島市民じゃないのかあ」

——なんも知らないって言われました。

「うん……テレビで見ただけだもんねえ?」

——そうですね、雨がすごかった、もうちょっと強かったくらいの(ことしか)覚えてないって言われて……

「いま携帯ではほら、警告とかで、うるさいぐらいに警告が鳴ったりするけど、うんうん、それ自体が無かったからねえ」

——ああー、ちょっと雨強いなーと思つてたらもう、すぐそこまで来たって感じ……

「そうそうそうそう。みんな、職場の人が通勤で遅れるくらいだからよっぽどなんだろうと思つて」

——ああ、確かにそうですね……え、もうそっからはなんか、あれだったんですか? 一時は生活に不便があったとかそういうのは覚えてたりします?

「えー、自分たちはもうほんとに、生活に不便は無かつたけども……」

「ええーつとそこら辺は……住んでるところも3? 4階

だったしねえ。で翌日にはたしかもう引いてたんじゃな
いかなあと思う」

——ああ、そうなんだ。

「確か引いて、うん……うん、だいぶね。その災害を、
受けたところはもう大変だったと思うけど……」 「今は
スマホとか便利だからいいよね」

——そうですね、すぐ教えてくれるから。

「知れるから、そうそう！情報が分かるから、やっぱり
情報が分からないと……」

「人がこうだから安全と思ってはいけない」

田畑浩子さん

インタビュアー 石橋俊太

文字おこし 藤井元希

——お願いします

「よろしくお願いします」

——86水害当時その頃、何歳で何をしていましたか。

「えーと、30歳頃で、主婦をしました」

——はい。その日、どこでどうしていましたか。

「自宅で、お家において雨の音を聞いてました」

——どのように（雨の）状況が変化しましたか？

「だんだん雨の音がすごくて、屋根に降りつける雨の音
でテレビの音が聞こえないぐらい雨が降ってきて。で、
近所の消防の人がお休みで。なんかね近くに川が流れて
て、その川の水位が上がってきて、（田畑さんの）駐
車してた車ももしかしたら雨に浸かるかもって気を遣っ
てくれて（近所の消防の人が）私のおうちのドアを叩い
てくれるんだけど、その叩く音が聞こえなくて、ほ
んどすごい一生懸命叩いてくれて怒鳴る声で気づいて、
やっと車を高台に上げることができたってことはありま
した」

——そのときどのように感じましたか。

「ちよつとびっくり。そんなこと今まで経験したことが
なかったから、そんなことがあるんだっていうのでびっ
くり。で、近所に文房具屋さんがあって、次の日にその
文房具屋さんも商品が水浸しで、もう使えなくて、大変

なことになってたとか。自分の車も（高台に上げたが）結局少しは水に浸かってて、ブレーキ踏もうとしてたら砂が絡んで、ブレーキが効かなかつたりとか、ちよつと怖い思いはしました」

—— 灯台に行ったの、避難をしたってことですか。

「灯台（ではなく）、高台に車を避難したってことで、自分たちはお水に浸かることはなかったので自宅には居ましたが、やっぱり何かスパーとかね、お店が商品がなかったりとか、断水したりとかで、何日か不自由したのは覚えてます」

—— 振り返って、どのようにすればよかつたとおもいますか。

「そうですね避難勧告とかもね、そのときは無かつた。なので、やっぱり臨機応変で自分で対応しないと行けなかな。ニュースを見て。ニュースも避難しなさいとかいうこともなかつたので。私は（当時）始良市っていうところに住んでただけで、鹿児島市に仕事に行つた近所の奥さんは、帰って来れないっていうかな、その竜ヶ水の、海岸線の崖崩れで電車が海に流されたりとかして、

車も流されて、海にこぼれたらしくって、で、近所の何か、漁船に救われて帰ってきたっていう人もいて。それは毎日、毎日のようにテレビに流されていて、で、そのテレビを見て自分の近所がそういう状況だったっていうのを初めて知って。そういうことがあってやっぱりその（川畑さんの家の）近くのなんとかっていう老人ホームはもう、道路で埋まつて死亡者がいっぱい出たとか、そういうニュースもその近所にいるニュースで知つたみたいなそういう状況があつて、やっぱり……情報をキャッチするって難しいなとは思いました。何日かすごい雨だったんだよね。1週間ぐらい雨がずっと降りっぱなしで。（河川の）水位が上がって上がっていつて、鹿児島市の石橋が崩れたりとか、そういうのもニュースで（聞きました）。近所にいるのにニュースでしかわからないっていうこともあつて、その後も鹿児島市内も汚泥で埋まつて、トイレとかのそういう汚物もいっぱい上がってきててもう臭くて、大変だったっていうのは後から知りました」

—— 復旧期間とかは……。

「結構長かつたよね。もうね、なんだ、使つたもの（家

具など)がね、使えないわけだから、その粗大ゴミに皆出すんだけど、それを回収されるのに結構時間かかったよね。1週間以上かかった。1ヶ月間はかかったかもしれない。断水もすごかったね。暑いし、うん。暑いし、臭いし。この(粗大ゴミの悪臭の)進化もすごかったよ。……だからそれからうまく5年10年かけて河川を広げて、底を掘り上げ(訂正掘り下げ)たりして。高月川、新川もまだ細かったもんね。で、ここを広げて広げて、底を掘って。で、新川、高月川、稲荷川、これぐらいいはそういう作業、工事を結構長年かけてやったんだと思う。で今は多少のことでは氾濫しないしね。新川なんてほとんど毎年氾濫してたと思う。8・6水害の前も。川幅が狭かったし。だから(鹿児島大学)寮の下の(に住んでる)人たち、梅雨になったら畳を持って上がってくるから、畳を2階に持って行ったりとか、(畳を)上げて梅雨の時は生活してるって感じ。もう浸かる家は決まっているから。ほら。水位より下のところね。だからその人たち(寮の一階の人)は、住民の人たちは、8・6水害じゃなくても、あの梅雨の時期には、畳を上にあげたり

とか、冷蔵庫を上を上げたりとか、そういう作業をされたよ」

——ここ最近結構雨降ってますけど、全然比べ物にならない感じですか？

「全然。もう音が違うね。音で分かる。新川がグアアって溢れるくらいにはならないもんね。やっぱり。工事して川幅が広がってってそういうのが、良いんでしようね。氾濫しないからね。だからやっぱりね、高台に住みたいとは思う。今住んでる家の高さ測ったりとか。70メートルあるから、セーフかなって思ってる(笑)。測ってみたら70はあった。だから鹿児島市は柱にさ、津波が来た時ここは何メートルの水位とか書いてある。それ見ると、まあねえ、自分家はセーフかなって思ってる。車が見みんな水浸しだったもん。知らないでさ、こうなるとは知らないから皆、自分家の横の駐車場に車を停めてるじゃないですか。家が床上浸水まで来るっていうことは、車は半分以上つかってるから、全部使い物にならない。一晩空けてみると。(浸水した)車が売れたかも分からない(笑)。だから私思ったよ。危ない時は車はやっぱり

り高台に持っていかないとだめだ。……今、そう思いました。浸かります」

——では最後に、この経験を経て若者にメッセージはありますか？

「お家は(場所が)高いところに変えましょう(笑)。でえ、まあ、いざつていうときには、人を信用しない、自分を信用して、人がこうだから安全と思っはいけない。自分で判断して行動することが大事だと思う」

「雨が降っただけで断水するのっていうような意外な感じは、はい」

林弓枝さん

インタビュアー 船蔵朱花

文字おこし 藤井元希

——始めていきます。

「はこ」

——8月6日の当時はどこで何をされていましたか。

「えーとですねそのときはちょうど高校3年生の夏休みで」

——はい。

「姉の……ちょうど実家から鹿児島市の(姉の)家に泊まりに来ていて、夏休みですね、はい。そのときにちょうど水害に遭ったということで。目の治療で来ていました」

——当時、家の周りというか、自分の周りはどうな感じになっていましたか。

「えーと、ちょうどその姉の家が紫原だったので、高台で……強い雨が降り続けているのわかったんですけど、お水が増すとかそういう感じは、無かったんですけど、坂があつたので、水が川のように側溝とかに勢いよく水が流れてるなっていうのは感じてました」

——どんな感情を抱きましたかね。

「……えーと、元々自分が……南の島の出身なので。なんかスコールとか大雨とか、慣れてはいるので鹿児島で(も)こんなに大粒の雨が降るんだなっていう……印象でした」

——島にいるときにそういう災害が……大きくはないけどちよつと水害とかあったことはありましたか。

「えーつと、島はですね、山というか、大きな鹿児島のような川がそんなに無いので、土砂崩れとか、川で川の水かさが増えて洪水になる。水が溢れてっていうのが無かったものですから、もう……なんていうのかな、また違った、川とか山があるところの災害っていうのってこんな感じなんだっていうので、どうなるんだろうっていう……恐怖がありました。……バスが止まったよとか(はあ)あつたけど)水害(はなかつた)……(だけど)紫原は雨がつよく降ってただけで水かさが飽和してるとかではないのに、断水になったんですよ。なので、断水になったので、雨が降っただけで断水するのっていうような意外な感じは、はい(あつた)」

——断水になったんですね。

「はい」

——断水以外そんな感じですか。

「そうですね、時々停電はあつたのかなとは思うんですけどそんなに、あの一……長いこと停電したとかいろいろ

じゃなくて、パッてこう(すぐに点くような)今あるような感じ(状態)になったような気がするんですけど、断水がしばらく続きまして……大雨が降り続いた最初に、ちよつとこれ……そういう(大雨の)水害になるかもしれないよっていう話を聞いて、うちの姉と2人で浴槽に水を溜めて。こう、元々こういう防災というか向こうの島ではよくそういう停電したり断水は頻繁にあるので、そういう経験をしたのですぐにお風呂場に水を溜めて、水の確保を生活用水の確保をしたんですね」

——なるほど。

「何か家にある鍋とかとか例えば……ポットとかそういうものに飲み水とかそういうのを、水道水を溜めておいてあつたんですけども。で、断水は結構長く続いて、うん。それで困つたのが……あの一、うちの姉も学生の一人暮らしだったので、周りに大人がいらないというか、お知り合いがいなくて、タンクとかですよ、なんかこう、やっぱり学生が持っているもの、最低限のものしかないのて防災靴とかありませんし、手に入れる手段がなかったというかお金もそんなないし、なんかどうしようって。

頼れるところがないっていうところですね。一人暮らしで、兄弟……（ではなく）姉妹2人で、どう乗り切ろうかみたいな」

——そうだったんですね。

「はい」

——では、貴重なお話をありがとうございました。

「自然の恐怖感」

陳曜さん

インタビュアー 久保蓮佳

文字おこし 久保蓮佳

——では、1993年に（86水害が）起こったんですけど、先生は当時何をされていたんですか？職業は、たぶん大学にいらっしやっただと思っただけですが…

「93年？」

——1993年ですね。約30年前になるんですけど…「長男が生まれたから、生まれた年だから、当時私は鹿

児島大学法文学部の大学院生でした」

——あつ。そうなんですね。

「長男が生まれた年だから。そ。大学院生でしたよ。法文学部。同じ法文学部」

——そうなんですね。それで（先生は）何を学ばれていらっしやたのですか。

「あ、はい。専攻は民俗学。人文科学部……文化人類学だったか、その……民俗学だったかはつきり、どつちなのか……要は私の選択ではなく、大学の、その時のその、学科の名前がどつちなのかは、私ははつきり覚えてません。実際にやってることは、民俗学です。はい。下野敏見先生という大先生がいました。昨年亡くなりましたけどね。私の教官、指導教官でした。フィールドワークを中心としていた。そのー、よく田舎……だからたぶん伊集院も行きましたよ」

——そうなんですね

「でも、（インタビュアー）さんがまだ生まれる前」

——そうですね笑。生まれてないですね。その86水害というときに先生は鹿児島にいらっしやったのですか？

「そう鹿児島に。当時はもう結婚していたから、結婚してた。妻はもう実家に帰って、出産、……86、なんと言いました?」

——86水害

「8月6日で……。長男は10月の20日に生まれたから、8月6日には加治木産婦人科……と言う、どこに通ってましたね。だから妻は実家から、実家はその、始良の仲津野というところにあるから、そこを（奥さんの）お母さんと、一緒に、まあ行ったと思いますねー。そこから加治木産婦人科に通っていた。うんうん。で、私は、今も星ヶ峯（ニュータウン）にいますが、星ヶ峯からこの大学に通っていた。うん。その、でも雨の怖さはあの経験がなかったら、そんなにわかんないよ」

——えーと、先週の金曜日ぐらいの雨も酷かったですけど、それより酷かったですか？

「うん。それより、ずっと酷かったよ。大雨の、降雨量だけじゃなくて、何日も続いていた記憶がありますよ。でも、はつきりは覚えていない。で、雨のこと、雨の状況はどういう、その状況だったのか、はつきり覚えて

いなくて、その、……その時は安心してた……（国道）10号線を、要はそのー、崩れる可能性があるところを、行き来する、ことは私も妻もなかった、なかった。うん、でもねえ、心配してたかもなー。……その、でも私にはなかった。星ヶ峯からその鹿大（鹿児島大学）に来るまでは、そういう（危険な）ところを通ることがなかったから、ないから、でも妻は実家（中津野）から、自分の仕事場までは、10号線を通るから、いつも車で、……妊娠してからは実家からです。その前はもちろん星ヶ峯、自分のうちから。……で実家からの時は必ず10号線を通る。ですね。でもまだそういう水害が起きてなかったから、不安はなかったかもしれないね……うん。そんな、なかった……そんなに。で私は、あのー、週末になると妻の実家に行く。それで10号線を使うでしょ？まあ、美しいイメージしかなかったからねえ。そうで、あつ、10号線好きですよ。今でも。で、……桜島の前を通るからね、今でもその好きで、……えーと、毎回、しっかり見ると言いますか、……できるだけ高速などを使わないように、10号線を走るように、綺麗だからね、私

にはそれが重要なんですわね……うん……そう……それで雨が……来た……で、降り続けていた……で、あんな水害……があった。で、妻は……そのときに、その（8月6日）日に、でもまだ（出産）2ヶ月前だから、その時のことをはっきり覚えていなくて、えーと、時間的には、ちよど夕方だから、要はその1、仕事が終わって、帰る時間ですわね、……うん、もしかして、妻が、（鹿児島市）内にある保育園から、実家に帰る途中だったかもしれない……でもそういう話は覚えていないから、……これ今のことと、昔、前のこととかぶってしまつて、はっきり覚えてない。じゃあはつきり覚えていることを話しましょうね。そう、水害の後、テレビではずーっと見えましたね、でもまだ、その、女房さえ、安全であれば、人間ですから、他人事になっちゃうからね、その、他人事ではない。でもやはりちよつと違う。……私の場合、他人事じゃないんですよ。その、スポーツクラブに通っていて、2階のジムにテレビがついていて、……ああいう（水害時の）ニュースが流れてくる。でああいう（水害時の）ニュースを見ながら走る人がいます。私は走れ

ない。もうその見ていられない。だから、そういう意味では、他人事ではないとわかつている。でも、あの日は、その日は……妻は安全だったと思いますが、それほど深刻、ではなかつた。でも、（妻の）出産を担当していた先生、それもそれは私も一緒に（病院に）行きましたから、何度もその先生に会つたから。……スウ（息を呑む）……（先生が）亡くなつたと、その水害で。……そうそう、水害で亡くなつたと……その、亡くなつたと聞いてショックだつたね。それはもう一気に、……もう他人事ではないかと、一瞬、思いましたね……。それからその……だいぶ経つてから、なぜ亡くなつたのか……先生はちよどその、車で（国道10号線を通つて）（鹿児島）市内に向かつている途中だつた……で、もう、これは動けないから、みんな、通行止めになつてるらしいのね。もう動けない。そのこのことは要はとにかく、（土砂が）崩れてしまつて……巻き込まれてしまつたと……ということがあつたね。……それが、ものすごくショックだつた。……その夜は、えーと、雨の怖さ、土砂崩れの怖さが、……もう肌でわかるようになった……これは、

とつても大きかったね、……うーん……その数日前まで先生
のところに、まあ要は女房と2人でいって、先生に、(赤ちゃ
んの)様子を見てもらって、男の子なのか、女の子なの
か。もう二ヶ月前だったから、もうわかっているはずだか
ら、それを見せてもらってたりした。……だから全部覚
えてる。……で、数日前の先生……記憶にあるから。で
それで、亡くなったということでしょう。……うーん、で、
その水害の、……水害が私にとつてどれくらい大きかっ
たか、という話をしましたね。で、これだけじゃなくて、
でそれから私は、……これ(大雨について)2点目は、
私には大きかったというのは、それから雨降る度に、雨
降る度にその心配する。どれくらい心配するのか、……
(妻に)電話する、メールする、10号線通らないよう
にとか、……うん、自分もそうですよね。自分も鹿屋に
行く、……今日もこの後行きますね、……鹿屋も(土砂
が)崩れた。10号線の辺りが一番酷かった、(けれど)
鹿屋も崩れていた……たぶんその、何人か亡くなったと。
そこも私は毎回毎週この木曜日はそのを通るんですよ。
うん、で、要は、雨……が……降るとなると心配する……

で、妻は重富から、その今でも実家ではないんだけどね、
今二ヶ所あつてお家。星ヶ峯と……その(別のもう一箇所
がある)……今回(2023年6月末ごろの大雨)も心
配でいつも連絡している。大丈夫か(と奥さんに)。う
ん、だからもう、車で高速……を使っていると逆に遠く
なる。すごく気になる(被害に遭っていないか)。……で、
子供もそうだね、雨の時はその外出をしないように、山
の近くに行かないように……自分のところも、星ヶ峰だけ
れども、高台のちよつと下、やっぱ崩れやすいところが
あつて、そこを私はジョギングでよく通るから、今工事
をやつていて、また、その心配は少しは、要はコンクリー
トで固めた工事をやつたから、まあ少しは安心できるで
しょうけど、でもその完全には安心できない。その一、
それぐらい心配するようになった。で、そのさらに、(大
雨について)3点目ですね、さらに、私は日中比較をし
ているから、……日本に来る前に自然に、その、自然の
恐怖感、その自然災害に対するその、……(被害)にあつ
たこと、経験したことがないですね」
——そうなんです。へえー。

「うん。(陳曜さんの実家) 私は18(歳)まで上海にいましたから。一回だけ、川の水が溢れて、で、その、一回は、そのここまで浸水したでしょうね。でも子供だったから、大喜びしていて、水に入って遊んだりした……地震は、(鹿児島) 大学に行った頃、新聞社に行った時だけ、一回だけでした。で、当時は私は20(歳)……まあ(インタビュアー)さんと同じくらいか。あついや、私はその22の歳から大学に入ったから、それまでは(中国で)革命があつて、大学はいつてなかった。だから、22の時一回だけ。だから30年間中国にいたから、その一回だけ(地震を)経験した。でも震度3の地震でしたからね。大したことないでしょ?」

—— ないですね。笑

「そう、それが3点目ですね。それを少しずつ、あの、分かるようになってきたことがあつて、それは、自然……への、自然との接しかたに、日本と中国の違いがあるなという、ことがあるから。で、中国人は(大雨や地震が)怖くないもん」

—— そうなんですか

「あ、その、(大雨や地震が)ある時はあるよ。あるところはある。あの自然の大地震はとかある。限られた場所とかで、私は、上海という場所にいる(いた)から。……昔ね大きな地震が(中国で)あつた。その何十万人が地震で亡くなった。ほら日本では聞いたことがない規模の大地震が北京であつた。私が高校、高校生だった頃(に)ありましたね。でも、それは他人事なのね。その報道、ニュースで知った訳で、その……肌(経験したこと)ではなかったのね。うん……おそらくここでも数値化が重要になる(日中相違を明確化するために)。中国人みんな怖い(という気持ち)、地震、要は自然災害への恐怖感を抱いてないのか。そうじゃない。(中国人の)7割くらいの人が、要は数値化大事だね。数値化。数字化じゃない。数値化大事。その7割以上の人が(自然災害を)経験してない。3割の人が経験している。そう言うことになるから。でその、自然との接しかたが、自然災害によって、……変わるから、(日中相違を)すごく感じる。私は、水害は、水害のおかげで自然への恐怖感を抱くようになっただけでなく、自然、人が自然との接

しかたから、その、人と人との接しかたのそのつながりを今考え、私にとっては、そこはとても重要ですね」

「台風なんて甘つちよろい」

山内幸蔵さん

インタビュアー 松坂嘉士

文字おこし 松坂嘉士

「ちようど(国道) 10号線のあいなか(真ん中を) 走つちよつて、竜ヶ水の手前の右側に、あの採石場があるの。あの竜ヶ水の事故があったところの……1キロもな いね、手前ほんどの(手前ぐらいいのところ) ね」

——うん

「採石場のところに来たらもう、もうもうもうもう行きもならん、くだりもならんUターンもできない。そしてUターンしよと(しようど) おもつたら、もうその3号線(10号線) じたいがさ、山からの水であふれて」

——水で？

「行きもできんかったもう」

——まあそつか竜ヶ水あそこ山か

「山だよ」

——全部山だもんね

「その当時あそこに挟まったのが、何千台？2000台がどつかおつたんでしょ？」

——そんないたの？

「うん、それでほらUターンしようとおもつたら始良のその、(少しの日常会話)。うんそいでじいちゃんのはさいまれた(挟まれた) ところの遙か始良寄りのところも、もう水でほら行きもならん、帰りもならんで状況だつて。ちようどあの……(国道) 10号線のところには始良の山の上のところに神社があるわけよ、そつからの水がすごかったもんもう半端じゃなかった。ドーツとながれてきてよ、これはやべえやべえ(と) おもつて急いだんよ、ほんなら(そしたら) それがかえつてダメだった」

——急いだのがダメだったの？

「うん、ほいで(それで) ちよーど、あの(国道) 3号線(10号線) の上り坂になってね、ほいで平坦になる

ところ、そのちょうど右側にその採石場があるわけよ。その目の前付近で完全に前も詰まり、後ろも車で詰まったような、もう身動きが取れない。で、そこではさまって」

——うん

「で、その時も雨がね、もう半端じゃない。もちろん高速ワイパーもほら高速で使うけどなんもならない」

——ふーん、嵐とかそういうレベルじゃないんだ

「うん、もう……あいで（それで）雨粒が大きいのでね。その大げさに言えばよ、あの普通の雨が米粒だとしたら大つまみくらいのおおきさあんだ（だった）、わーすごかど（とても、凄かった）。だってその雨で滝が見えないんだもん。雨ん自体だよ」

——ああもう

「大体想像がつくでしょ？」

——想像がつくね。要は台風よりもひどい状態って

「んにゃんにゃんにゃ（いやいやいや）、そんなもんじゃねえ、台風なんて甘っちょろい」

——笑、台風なんてってレベルなんだ

「はー、ほいではも（それはもう）降りも降ったわ、ほ

いでしちょっとたらき（そうしてたらき）、やべねって自分でもおもつとて（危なくなつたと自分で思つて）Uターンしようとおもつたらもう後ろもダーって降ってるんだもん。そしたら（後から）聞いたら私は上りきつたところやつたどんね、ひゅつと後ろ見たら……こう、下から（坂を）上るあたりはもう水がほら、もう浸かつてるんだよ山からの水で。

んだ、こーはいかん（これはいかん）と思つて、ほいでもうまっすぐ行つてみようと思つたら、ほら車が動かんだつと（動かなかつた）」

——もう車と雨のせいぞろい？

「もうそこでやばいと思つてやっばみんなジーツと止つた。もそう危ないと思つて」

——まあ動けないもんね

「そう、それで私なんかは一番頂上で一番地盤がいいところだったもんで、後で聞いたら。その採石場があるくらいだから地盤がものすごい硬いところでよ。でそこで止まつたんだ。でその時、まあ、あらぬ噂が流れるわけよ、ああいうときにはね。すごいよ」

——すごいスピードで？

「おお、テレビで言うけどよほんとだよ。その採石場がね、……崩れるよつち。ほいで採石場自体が見えるわけよね。ほいでね(国道)10号線から。あの崩れだしたつちゅつてよ。」

もうそのまことしやかにそういう話がばーって広がるわけよ」

——うん

「そしたら、んにゃみんなこは(これは)逃げもならん、もうどうしようってなつてよ。」

したらたしかにね、あの採石場で多分いろいろその採石自体、岩自体が動いたんじゃないか、臭いがするよね。あの火打石つち知らないよね？あの、こう石と石をこすれば火が出るやつ」

——あー、火打石のあれねなるほど

「臭いがするのよね、あの独特の臭いが。その臭いがしたのよ。つちゅつちは完全にこそらく、まあ後で皆言っただけでおそらくその採石場の岩と岩が」

——あー擦れて

「うん、じゃないだろうか。すごい臭いだったもん、その火打石の石の臭いがね」

——ふーん

「ほいで、そこがそこが(そこが、あそこが)崩れた、いや崩れるつち(噂に)なって、ほしたら、もうそれはそこらあたりの人がパニックになってよ、まあそうなるわな」

——まあ、それはね。崩れ落ちるってなつたらね。

「もちよつと行けば竜ヶ水駅、あの汽車やら電車やらあれが全部ほら土砂で流されたところやね……で、そこまですべてもじゃないけど行けなかつた、車が。で、結局そこで……みんな、なんちゅうの(なんていうのか)諦めよねその時点で。もうなるようにしかならんわけだから。でもそうでない人も多いわけよね。自分だけは(助かりたい)つて人も」

——あー、はは(笑い)

「まあ気持ちはわからんでもないけど、もうそれはあんたは自分たちでできないもん。それで自分一人で行動する、(行動を)とろうとしたひとは……みんな総すかん

喰らうもんね。みんなやつぱり必死になつてよ、お互いに助け合つてそれがみんなああいうときは、そういう連帯感が生まれるつよね。あの『無事に帰るまであの助け合いましようよ』つちて（と言つて）、まあそういう連帯感が湧くんだけど、その意に反して『自分だけが（助かりたい）』つて人が何人かおるわけよね。でそういう人たちは全然私たちなんかは相手にもしない」

「道路が至る所泥だらけでぐちやぐちや」

新田浩之さん

インタビュ― 勝部智也

文字おこし 上村素陽香

——はい、じゃあ5分ほどちよつとお話をさせていたできたくて。えつと……多分30年前にあのその8・6水害があつたと思うんですけど新田さんそのころは鹿児島にはおられ……

「いましたよ。大学……2年生のころ」

——あ、2年生のころ。ちなみにお住まいはーどの辺だったんですか？

「は、えつと……郡元」

——あ！

「郡元駅の近く」

——あ、郡元。あーあのおそこJ Rの……

「そうそうそう」

——その辺もなんか被害があつたりとかは……

「直接の被害は……道路がどんくらいかね、10cmか12cmか冠水して……その後は一日だけ水道が止まつた感じかな。水道がちよつと止まつて……風呂は友達のところへ借りに行つたりしたかな」

——そのお風呂を借りに行かれたそのご友人の家は……

「鴨池」

——あ、鴨池……

「鴨池は大丈夫だった」

——あ、そうなんですわね。……海が近かつたかなとかは関係あるんですか？

「どーうなんだろうね、まあ新川が氾濫したのも関係あ

るかもしれない」

——でも鴨池の方は……

「(鴨池)は全然大丈夫だった」

——その日は家にずっと……

「いや、実家に帰ろうとして……西駅(西鹿児島駅 現鹿児島中央駅)行って荷物をクロネコヤマトに重たいから運んでもらって手続きして、電車までちょっと時間あるからパチンコ屋行って、予想よりちよっとパチンコ屋に長くいて外出たら大雨で、で電車動かないよって言われて……荷物を取りに行ったら荷物だけ先に行行って、仕方なく家に帰った。フフツ」

——じゃあその日は本当は山口に帰る予定……

「でした」

——じゃあもう鹿児島から出られずに……

「うんそうね、しばらく。で……次の日にその時は先輩の家に行って、家の前が冠水してた。次の日にお金をおろしに(鹿児島)中央駅の……今の中央駅のね、郵便局がもうATMが使えなくて……で、タクシー代も持ってなかったから(鹿児島)東郵便局なら使えるということ

で東まで歩いて行ったら、まあ道路が至る所泥だらけでぐちゃぐちゃで……」

——じゃあそれは8月の7日……

「7日。うん」

——東の郵便局というところ……

「宝山ホールの隣の」

——あー、あそこまで(笑)

「あそこまで一生懸命歩いて」

——じゃあもう公共交通機関も全部……

「どうだったかな、市電は……ああ次の日はまだ動いてなかったかもしれない」

——バスとかも……なかった？

「バスもなかった……苦労しました」

——あ、でもライフライン止まったのは水道だけですか？

「うん、水道だけ。電気は動いてたし」

——あ、電気もガスも……

「ガスも。大丈夫だったはず」

——でも8月だから大学ももう休み……

「そうそう夏休み」

——大学の校内がどうだったとかはあんまりご存じないですかね？

「校内は……あ、校内はこつち（奥さん）の方が知ってるかもしれない」

——（奥さんに向けて）じゃあすみません。また後でお願いします。それではすみません、ありがとうございました。

「道路がとにかく使えない」

新田久美子さん

インタビュアー 勝部智也

文字おこし 長谷川凜々花

——奥さんの方は当時大学生…

「大学生、（夫と）同じ大学二年生で、コンクールの九州大会の練習をしていて当時は、」

——あーそうですね、この時期はそうですね

「演奏旅行とかもあってそのマネージに行く6月くらいから雨は多かったのよね、その年は、当日もコンクールの練習をして、雨ひどいねってみんな言いながら普通に練習終えて夕方か、五時くらいだけ…五時から九時に終わって帰ろうとしたら、なんか中央駅（鹿児島中央駅。当時は西鹿児島駅）の方に向かった、車で帰ってる先輩たちが帰ってきて、『どうしたんですか』と聞いたら、いやとてもじゃないけど帰れないっていうことになって、で自分も雨がひどかったから、いつもはバイクだったんですね、でもその日はバスで帰ろうとしたら、もうバスも出ないよって言われて、バス停の方に行ったら水が」

——あーー浸水……

「うん、してたので、このお店（『DOS多摩川』）の方にみんな集まっていたので、親に連絡、てか家の方に連絡して、『今日帰れないよ』って言ったたら、『なんで？』って……紫原なので状況がよくつかめていかなかったみたいで、その、雨がひどくなってきたころは、まだ水道も通ったし、電気もガスも普通だったので、『タクシーでも何

でもいいから帰ってきなさい』ってタクシーで2時間かけて、(帰宅した)」

——に、2時間ですか？

「あのもう、唐湊の方も通れないし、中郡も当時は川のころしかなかったの、道が、まず新川が渡れないので、(鴨池の) 県庁の方に向かって、県庁の方はちょっと浸かって、タクシーのおじさんも、僕はもう谷山方面に向かって家に帰る、でその途中だから乗せてあげるけど後で引き返す可能性もあるよって、乗って」

——ラッキーといえばラッキー……

「ラッキー、でもまあ賭け。で2時間かけてタクシーのおじさんがいい人で、途中でメーターを止めてくれて、どうにか家にはたどり着いたんだけど、二日後かなあ、水がもうでなくなつて、で、お風呂にも入れないで、宇宿の方の親戚のおうちのお風呂を借りたり、後、銭湯でお風呂。……しばらく……結構長かった……紫原(の断水)」

——地域によってなんか水道が止まつた……止まる時期(断水の期間)は違うんですか？

「当時コンビニでバイトしてて、コンビニにやつぱりみんなお買い物に来てて、お水がとにかく先になくなつて(売れて)、おばあちゃんとかが『お水を売ってくれ……』『いやないです』って言うって、『あるでしょ』って言われて、『ないです』っていうので……揉めたのはよく覚えています。お米が炊けないというので、ご苦労された方もたくさんいると思います。(うちは) 一応親戚のおうちからお水をもらつて、お米は炊けたんですけども、」

——宇宿の方はそうでもなかったんですか？

「うん、親戚のうちは脇田川の近くなのであつちの方はお水は普通に出ててお風呂に入れたりとかも」

——当日も……

「うん、当日も全然大丈夫だった……当日には行つてない、当日はお水出たから、紫原も……でも次の日になるとでなくなつたから」

——六日以降でたまつて……

「うん、かえつて、当日お風呂いったかな……まあとりあえず使えなくなつた……でもそのあとの鹿大の練習も

ちよつと大変だったのも覚えているけど……あと聞きたいことは……？」

——大学——校内とかの様子は——

「当日は何もなくて……練習もしたんじゃないかな、そのあとも……」

——そのあとも！？

「うん、コンクールの練習をして……始良方面から通つて後輩と先輩たちがすぐく遠回りをして、車で三人通つてきていたのは覚えています。道路がとにかく使えないから竜ヶ水のあのあたりが崩れていたので高速（道路）で来てたんじゃないかな……練習もままならないまま……」

——忙しい時期ですもんね

「大学の中は（水が）使えてたんじゃない」

——水産（キャンパス）の方は結構なんともなかったと教授が言つてたんですけれども。

「だからうちも何ともなかった……きづかなかつたらいだから、帰るまでは。普通にだつて楽器片付ける時は水道も使っていたはずですし……なんかちよつと大学の

中の低いところもちやつぽちやつぽとお水が多いなつていう感じは……（でも、）まさかこんななつているとは思わなかつた」

——なるほど……すみません、ありがとうございました。

「すごい怖い」

荒河美喜さん

インタビュー—— 鎌田杏乃

文字おこし—— 鎌田杏乃

——えっと、水害のときどこにいましたか。

「私は鹿児島市内にいました。その日は仕事で」

——はい。

「えっと、お店に行かないと、夜の仕事をしてたんでお店に行かないといけなくて、お店に行つて、で、子供と2人暮らしたつたので子供を託児所に預けて、それから出勤して。え……あれよあれよという間に……雨がすごい降つてたんだらうね。外あんまり見えないから窓

がなくて、でもゴーって音はしたから何の音だろうって
言って一緒に働いてた人と（店の外に）見にいったら、
もう、地下に水が流れて、本当滝のように流れて」

——うん。

「そこら辺の水が水かさが増してきてたから……これで
帰れるのかと」

——うん。

「でも帰れなかったのね。タクシーも全部通ってないし、
バスなんかもストップだったし。……で、子供を託児所
に預けてたから心配で電話するけど電話も混線してて繋
がらないのね、携帯なんかもそのときはあんまりもう主
流じゃないから」

——うん。

「みんな携帯なんて持ってないし、とりあえず、あの
……雨が止むのを待って、収まった頃にお店を出て、も
う時間はあんまり覚えてないけど、子供迎えに行って、
……で、子供のところも託児所が2階だったから被害もな
かったんだけど、で、お店に働いてる子は車で来てて、
その車はもう水没して全然駄目で、『一緒にじゃあうち

に泊まる』っていうことで、うちまで歩いて帰ったんだ
けど、そういう水かさがすごかったから、本当に自分の
胸辺りぐらいまで来るぐらいの水の量だったから」

——うん。

「その中を友達と2人で友達に荷物を持ってもらって、
私は子供を肩車して、おうちまで帰って……。で、おうち
で少しずつ、もう水が出なくて、チョロチョロチョロ
チョロと、シャワーの水がチョロチョロ出るやつで、一
応体を2人でもう、子供も入れて3人とも洗って……そ
の日次の日に起きるまでやつぱり少しはまたそつからも
降ったり止んだりとしてたはずね……。で、朝起きて、
……昼ぐらい前には引いてたんじゃなかなたぶん。す
ごい道路も水満たしというか泥だらけも……（道路は
泥だらけの）ような感じだったよね」

——そのとき誰かその被害に。（あつたんですか？）

「そうそう、うちなんかのその働いてたビルの地下に
……あの、水が流れてた地下では1人亡くなつたってい
うのは後から聞いたのね。そんなときにはわからなかつた
けど」

——そのときのお店は2階だった？

「そのとき3階、うちなんかは3階のお店だったから」

——で、住んでるところは2階だった？

「2階だった。で、地下のところのその店は、物が椅子とかテーブルが全部もう上のその照明とかに引っかかってたつて、後から分かった」

——へー。

「そこで1人亡くなつてたね」

——あー……そのときの感じつてどんな感じでした。気持ち（はどんな感じでしたか？）

「気持ち、こんな大雨にあつたことがないつていうのが、あつたもんで何がつて子供のことが心配で、もう仕事に來なきやよかつたなつて後悔はしたけどね」

——怖かつたんじゃないですか？

「怖かつたね。流れていくやつばあの勢いを見たときがやつぱ怖いよね」

——あー……

「すごい怖こ」

——その水害があつて、今後踏まえて、気をつけておき

たいなと思うことは。（なにかありますか？）

「何かあつたときには、お水を風呂場に溜めておくとか、ペットボトルに何か用意しとくとか。今は、あの大きなペットボトルなんかも普通に売つてて買えるからあれだけど、その当時水……水をペットボトルで買うつていうのはたぶんあんまりなかつたんじゃないかなと思つんだよね、私なんかの頃」

——携帯もなかつたしね。

「うん、携帯もなかつたしね。今はもう携帯電話あるから、携帯はもう常に充電しとくし、まあ何かそういうことがあつたときには、あの……すぐ避難できるようにしとくよね、やつぱり」

——うん。水とかは準備しとく。

「そうそう準備して、大事なものも一つまとめにあの、持つて持ち出せるバックを薬とか何か通帳とかもなんかいろいろ入れて、置いてあるバックがあるんだけどそれをパツて持つて出れるようにはしてるね」

——うん……わかりました。ありがとうございます。

「冷蔵庫も天井までプカプカ」

上別府雅子さん

インタビュアー 上別府慶
文字おこし 中島丈太郎

——よろしくお願ひします。えー当時は何をしていますか。

「えー当時は高校生だったので、高校にいました」

——うーん、じゃ高校にいる時、どんな状況でしたか？
「朝から一日中雨が降ってて、雷も鳴ってて、……3時くらいにもう帰ろうかなーと思って、上伊集院駅に行きました。そしたら、線路が水であふれていて、電車はもう通っていませんでした。だから、バスで帰ろうかなーと思つたら、バスももう通つてなくて、……お母さんに電話をしないとと思つて、駅前の公衆電話で電話をかけました。『母親に』帰れないからタクシーで帰るね』と伝えたら、ブツツてもう電話も通じなくなりました。……とりあえずタクシーは一台いたから、そのタクシー

に乗つて家に帰りました」

——ああ、なるほど。ええじゃあ、まあ具体的についていか、どんな被害を受けましたか。

「うーん、家は高台にあつたから水はこなかつたけど、その当時は、被害ではなくて、後々気づいたことがあるかな」

——ああ、そうだったんですね。それは何ですか。

「うーん、高校を卒業して、成人式のあとに小学校と中学校の集まり……中学校に集まりました。小学生の卒業式の前に埋めていたタイムカプセルがあつて、たしかそのタイムカプセルが、全部8・6水害のせいで流れてなくなつて……てました。でそのタイムカプセルの中に、大人になつたらお酒が飲めるようになるから、親にお願いして、結構高いお酒を埋めてた人がいて、それも全部なくなつていて、すごくショックを受けていたかなあ」
——ああ、なるほど。ええじゃあ、その8・6水害に関するところで、その自分が、まあ何かその……その時とかでもいいんですけど、何か一番、記憶に残っているようなことは何ですか。

「うーん、記憶に残っていることは、さつき話したけど、タクシーで帰るときに、ドアの横を見ると、水が……高さがすごかったことかなあ……川も濁っていて、勢いがすごかったこと。友達の家が一階で、水がどんどん入ってきたから、冷蔵庫も天井までプカプカ、家具も全部浮かんで、全部濡れちゃったから、二階は無事だったから二階の家に避難していたことかなあ。もうアルバムも全部なくなってたつて。えー確か、家が水害にあった人たちは、元の生活に戻るのに一年くらいかかってたかも。畳とかはもう全部濡れてたから、全部上げたりしてたかなあ」

——うーん、なるほど。貴重なお話をありがとうございます。

「関心を持ってもらうことが、大事じゃないかな」

二宮和明さん

インタビュアー 二宮里圭
文字おこし 中島丈太郎

——その頃何歳でしたか。

「47歳です」

——47歳ですか。それとお仕事は何を、その当時に何をされてましたか。

「えーと、その当時はデスクワークで、総務の仕事をしていました」

——総務のお仕事。では、その1993年8月6日は、どこで何をしてましたか。

「えつと事務所で、えーやはり仕事をしてました」

——うーん。

「ビルの5階建てですけど、4階が事務所でしたので、そこで仕事をしてました」

——ああ、結構高いところですね。えーと、その……8・

6水害が起こったときにどのような、何か変化が起こったか覚えてますか。

「まああの、雨がすごかったし、今までない……豪雨だったと思うんですけど。えー100年に一度の……豪雨……だったと思います」

——その、何か普段と違う……どのように行動されましたか。

「えーっと……夕方でしたので、えーまああの、職員の皆さんが安全に帰れるように……早めにまああの、退出するように、皆さんを促しました」

——その……当時どう思いましたか。何か雨について

「ええまああの、当時はテレビをつけて、いろいろな情報を入れていましたので、これは大変なことになるなあというふうに思っていました。まあ、あの……農地とかそういう関係の仕事もしていましたので、やはり農業関係にも、大いに被害が出てくるんじゃないかなというふうに心配をしてました」

——そうですか。えーと、振り返ってみて……何か普段と他に変わりがあったことってありますか。例えば……

ご家族の方はどうでしたか。

「えー、あの……当時はその……当時は長男が、あの山形屋の近くに、塾に行っていましたので、それでちょうど、あの……この……災害にあつて、えー……帰れなくなって、まああの、私のところで一時預かったということになります」

——私のところという職場ですか。

「はい、職場に」

——ああなるほど。そつか。じゃあ、奥さんは、おうちにいらつしやつたのですか。

「はい、あの、他の家族は、えー星ヶ峯（ニュータウン）というところの高台でしたので、まあ水害の関係は、まあ心配はしてなかったです」

——よかった。じゃあ、何かその当時、こうしておけば良かったなつて思ったところかありますか。

「えーっと、そうですね……まあ雨対策は、まあなかなか……想定しなかったような事態がありましたので、ええまあ、準備も何もしてないというのが実情でした」
——はい。そうですね……では、何かこの8・6水害を

体験して変わったこととかはありますか。

「はい、まああれ、やはり……災害というのはやっぱり事前に準備をいろいろ、対策をされておかなきゃ、そのときになって慌ててしまいますので、やはり事前の対策が必要じゃないかなあと、いうふうに思っています」

——では、今回はありがとうございます。

「あ、それでは」

——はい。

「もう一つ言おうかな」

——もう一つ、お願いします。

「まあそれとあの……これは、地球全体の、まあ、今いろいろマスコミでも言われている内容ですけど、やはり地球環境というのが……大事です、全世界の人々がやはり、そういう……環境問題について……関心を持ってもらうことが大事じゃないかな、というふうに思っています」

——はい。ありがとうございます。

「は」

——すみません他には何かありますかでしょうか。

「はい、あの職員からあとで聞いた話ですけども、えーまあ3例ほどあるんですが、1人は、えー男性職員ですけども、始良方面に帰る途中、自家用車で帰る途中ですけど、えー例の、あの（国道10号線が寸断し約3000人が孤立した）竜が水の土石流にあいまして、で車を置いて、えー……漁船、あの鹿児島市が手配した漁船に助けられたというのが、一人目でありました。もう1人は、事務職員ですけども、バスで……帰宅しようという……バスに乗ってましたけれども、えー天文館のところ浸水に遭い、えーバスも動けなくなつて、それで、あの林田ホテルが、そういう方々を受け入れてくれたので、えー林田ホテルのフロアに、一時避難したというのがありました。それともう一つは、えー……天文館の居酒屋に、えー3人ほど職員がいました。あの飲みに行つてましたけれども、えーそれが地下の店だったんですけれども、えー水が浸水してきたので、えー地上の入口のところで、土嚢を積んで、えー水を食い止めたということ、その居酒屋の店員さんから大いに、まあ感謝をされたということもありました。まあ、以上……」

です」

——貴重なご時間いただきありがとうございます。

「はい(笑)」

「高校一年生の時の経験」

迫まゆみさん

インタビュー 比江島歩花

文字おこし 比江島歩花

——じゃあまず平成5年の8月86水害について

その日何歳だった？

「高校1年の夏休み中の15歳です」

——15歳

じゃあ高校はどこだった？

「昔でいう樟南高校(旧称鹿児島商工高校)」

——樟南高校ってどこにあるわけ？

「今は武岡。昔は86水害があった時は荒田にあった」

——じゃあその日は学校に行ってた？

「いえ」

——じゃあ何してた？

「野球部の応援で吹奏楽部の一員として高校に行く準備をして、交通機関が乱れてたから桜島フェリーを使って、20時間かけて阪神甲子園球場に行きました。そのめっちゃ雨降ってた」

——まだその時は竜ヶ水とかの土砂災害とか氾濫とかはなかった？

「ありました」

——あつたけど行つた？家に帰る一時帰宅とかじゃなくて

「行つて、行く準備で、そこはちよつと不明だな。でも電車は使えなかったはずだから、何らかあつたと思う」

——桜島フェリーでどこまで行つたの？

「桜島フェリーで垂水かどこか？」

——垂水まで行つてそこから新幹線？

「バスず〜っと」

——桜島フェリーまではまた車で？

「バスず〜っとバス学校から」

——桜島フェリーまでのバスの道のりで水害の被害にあつたとか？

「特に覚えてないけどなかったと思う」

——甲子園から帰ってきたのはいつ？

「いつか覚えてないけど、一試合目だったら一試合目（1試合ごとに）で一回帰ってくる来てたはず」

——一日行ってその日に帰ってくるの？

「うん」

——遠くない？どこだっけ甲子園って

「大阪（正確には兵庫県西宮市）。だから20時間かけてバスで行って、応援が済んで勝ったとしても一試合目（1試合ごとに）では一回帰ってくるから、また20時間かけて帰ってきた」

——帰ってきたのは次の日ってこと？その日に帰ってきた？

「その日だから2日くらい、中2日くらい？8. 6水害があつた日に出発して」

——その前に出発して帰ってきた時が8. 6水害があつ

たってこと？

「もう雨がすごかったのよね」

——もうその時から

「行く前からバスで行くって決まったから」

——そうなんだ。何が聞きたかったんだっけ。普通だったら（例年通り）雨がなかったら電車で行って電車で大坂まで行って、（鹿児島）中央駅から大阪まで行って、それだったら時間もつと短かったわけだよな。

「そうそう」

——電車が動いてないのか、だからバスで行ったのか

「被害も多分雨もひどかったから安全ルートで。高速（道路）は確か高速では行っているはず」

——じゃあ高速は大丈夫だったんだ、雨だったけど。

「ある程度」

——その雨8. 6水害の時って、前日から雨が降っていたとしても、どうだった？当日と前日と比べて。

「今でいう何とか雨がジャーっと」

——線状降水帯？

「うん、それがずっと続いていた感じ、雨は同じ感じだつ

た何日も」

——その日に土砂災害が積もりに積もってあつたつてことだよ。竜ヶ水とか他のところ川の氾濫とかの影響は、車のバスのやつ以外で何かあつた？

「帰ってきてから」

——樟南高校に？

「荒田にまだ高校があつたから、(学校が)水で浸かつてた、浸水。あと寮に入っていたからそこも浸かつて」

——どのくらいとか覚えてる？

「もう引いてたりはしたけど、膝とか腰とか深いところはあつたみたい」

——机とか寮だつたらソファーみたいなところも全部濡れてたり汚れてたりしたこと？

「そうかな。寮は床上ちよつと浸水ぐらい」

——当日は寮にいなかった？

「いなかった。次の日に帰ってきてから寮に行つて」

——寮にいた人たちから話とか聞いたりした？

「ほとんど(実家に)帰つてたから」

——帰れ帰れみたいな学校から？

「うん」

——帰つて実家つてこと？

「そうそう、学校の掃除はした記憶はある」

——寮に入つてたら、家つて遠いんじゃないの？

「遠い」

——けど帰らされた？

「一応、うーん」

——避難所に行つたりとか？

「ううん」

——家に？

「2時間ぐらいかかるところを5、6時間で帰つた」

——じゃあ、めっちゃ帰るのもまた来るのも大変だよな。

寮に帰ってくるのも。

「寮に帰つてくるときは送ってもらつたから。だけど時間迂回路、迂回路で」

——じゃあ学校の掃除とかを後片付けをしたつてことで

「そう、いたから。吹奏楽のメンバーとか野球のまあ、残つたメンバーとか、あと部活で来てる人とか。生徒会もいたから」

——その他にしたこととかある？

「その時は学校の指示に従うしかなかった」

——15歳だからね、分かんないよね。知らないよ。

「終わったらとにかく帰宅待機（自宅待機）？みたいな感じ」

——あの大口の実家に？

「そうそう」

——いともう何日か？

「うん」

——自宅待機だったの？

「2学期が始まるまで一応目処が。でも何だろう、なんだっけ？」

——何？

「もつと自分でできることがあったのかなとは思う」

——ボランティアみたいな感じで。お父さんの友達が竜ヶ水のやつに巻き込まれる寸前で人を救助してみたみたいな（ことを）言ってた。

「兄ちゃんなんかも出かけてて、帰れずに桜島フェリー経由で何時間もかかって帰ってきた」

——出かけてたって（鹿児島）市内についてこと？

「免許講習所」

——どこだっけ？

「帖佐」

——あ、だったね。やっぱり怖かった？

「怖かった、何が起きたのか分からない。でも甲子園に行った時には周りが鹿児島県の災害支援金っていうのをすごく一致団結してて、相手の高校とか、よその高校とか（寄付してくれた）」

——甲子園に来てた（人たち）？

「甲子園に来てた人たちがすごく協力的だった。甲子園の高校野球の大会期間だったから、その間に募金とか募っててくれたんだ」

——ええ、すごいね

「あと帰る時とかは水とかケースで、必要最低限、帰ってみんなが困らないような水とか（寄付してくれた）。災害支援の時に使うような、持って帰れるような」

——家にある災害バッグみたいな、避難用のやつみたいなセットみたいなやつ？

「(飲料) 水が多かったね」

——確かに断水してるから

「あとカップ麺とか、すぐ食べられるようなものとか。20時間かかるから、その時の食料とかも全部甲子園にいた人たちが。鹿児島会とか大阪にあるのね」

——そうなの？

「鹿児島会とかいうのがあって、その人たちが甲子園球場も一緒に応援するんだけど。その人たちが全部準備してて」

——それは大阪とかに周辺に住んでる、鹿児島出身の人とかが立ち上げたやつ？

「そうそう」

——じゃあ支援したくなるもんね。で、それをバスに入れて帰って、学校とかでも使った？

「自分たちの分は振り分けられて、あとは学校に」

——でも、断水とか学校もしてた？電気とかも(停電)してた？

「覚えてないけど、とにかく学校が真ん中、校舎がコの字？四角形で中が体育館みたいな感じで、そこから1階

の校舎とか掃除して」

——最後に振り返ってどうすればよかったかって、さっきボランティアしとけばよかったなとか言ってたけど。どんなボランティアが当時15歳だけだし、できたと思う？自分で。

「どうなんだろう自然災害は防ぐことできないけどボランティア活動や災害の知識を持っていたら、もつと多くのができたんじゃないかなって思って、8・6水害の後、自分でできるボランティア活動を始めて、今もそれに至ることをしている。で、最後になんだろう。当たり前の日常っていうのは、時にそうじゃないこともある。非日常じゃなくなることもあるし、だから日々の今ある日常に感謝して過ごしたいなって、過ごせればなって思う」

——避難訓練とかがあるけどさ、洪水とかの避難訓練とかないもんね。その後どうすればいいとか、よく分かってない部分があるから。

「天文館も今の中央駅も地下は全部浸かって、天文館で一番ひどいところは腰まで」

——なんか写真見たことある

「うん、あったりして。そういうの見れば怖いと思うけど何かできてたらとか、何かできたらって。だから今でも近所に住んでるところ、いつも冠水するところのそばに住んでる友達とかには連絡をすぐ電話したりとか」

——雨がいつばい降ってたりとかしたらこの前の授業とかで事前避難っていうのをする人は少ないみたいになって言ってたから。やっぱりそういう声かけが大事だよね。

「多分あの時帰りに、帰りか、そのタイミング的に電車に乗ってたら巻き込まれてたのかなって」

——そういうの分かんないけども、やっぱり自然災害だから怖い？恐怖心？

「その時にどういふ連絡を取るべきか、家族に。一本でも連絡が取れたら『ここにいるよ』って言える。その時にだから連絡が取れなかったから家族にも兄弟にも友達にも電話が普通にやっぱりみんなかけてた、集中でかけたりすればね（電話がかけれないから）。だから今で言う、LINEとかSNSとかで『自分はここにいます』とか一言発信できればまだ、昔の8・6水害の時よりは

ここに誰々がいるからって言えるのになって。今はね」

——8・6水害の時ってLINEとかないよね。
「携帯もなかった」

——スマホ？ガラケー？

「ガラケーもなかったと思う」

——ポケベル？

「ポケベルとかピッチ（PHS）」

——こんなちよつと、なんかアンテナが出るやつか
「ポケベル持っても連絡はできないのね。電話じゃないと」

——なんか数字でうつんだよね、文字うてないから。

「今で言う携帯スマホの文字起こしの番号だから」

——連絡手段とかがなかったから余計に不安だよね

「だから多分そういうの持ってて、緊急のボタンとか居場所とかの、ああいう機能がついてればまだ助かった人も多かったのかなと思う。でもここだから起きたって言う訳ではないと思う」

——鹿児島だから

「たまたま竜ヶ水だった」

——でも今はじゃあもう、指宿とかある程度決まってる場所なのになんでそういう工事を、崖崩れとかが起きそうな場所

「(工事を)しても崩れるところは崩れるんだろうけど、分かかって、場所が特定されてるし昔崩れて分かかってのに、そういう工事をなんでもしないんだろっかとか」

——手が足りないって言うのもあるだろうしね

「自宅の前、実家の前は冠水するのに工事をしたのにも関わらず冠水した。何のための工事だったのかな」

——じゃあこの、分かっているのにすることがまだ全然できてないからこれからはそういうあつたんだから被害が。もつと考えて予備の予備を作っていけばいいってことだよ。

「自分も発信できる、例えば議員さんとかにここ崩れます。崩れます。冠水します。困ってる人がいますっていう連絡発信方法が今はSNS、LINEとかでできるからするようにしてる。そういう時自分も怖いけど、今障害があるからそういうの怖いけど見逃したら誰かが危ない目に遭うから、とにかく行かなくても

発信ができる状況だったら伝えてる。市役所にも動いてくれる議員さんがいたりするからその人にも」

——でも狭いコミュニティだからできることってのがあるからね。小さい町だけど、小さい町の方がいい時ってあるよね。災害とか情報が行き渡りやすいから。大きい所になればなるだけ、お隣さん知らないとかあるけどよくテレビでも言うけど、本当は知ってた方が挨拶だけでもいいから知ってた方がいいと思う。ちょっとだけでも他人の、他人っていうか周りの人とコミュニケーション取った方が災害の時も役に立つ

「そうだね」

——20分喋ってた笑

「笑」

——大切なやつだから5分じゃ収まらないよね、こういう話。じゃあ一応ここまで。ありがとうございました。

「道路脇から水がどんどん落ちてきて」

山下廣文さん

インタビュー 馬場園晃陽
文字おこし 川添愛生

——八六水害の被害にあったと思うのですが、その頃は
何歳で、何をしていましたか。

「そのときは四十二歳で、大工をしていました」

——その日はどこで何をしていましたか。

「その日は市内の荒田でマンション工事をしていました」
——その日ちょうど被害が起きたときに状況ってどんな
風に変化していきましたか。

「えー、その時は朝から雨が降っていて、会社の監督が
二時ごろだったと思うけど、なんか、『高速（道路）も
通れんし雨もすごいし、もう仕事はもうやめてください
い』って言われて、それから、まあとりあえず国分から
仕事で来てるから磯（磯庭園のところ）まで行ってみた
ら、道路が通れるか通れんかわかるから、行ったらよかつ

たんだけど、もうあの（車が）数珠つなぎ状態でＵター
ンもできない状態で、もうしょうがなくてそのままずつ
と。まあ、車は動いて。だから磯から三船病院のところ
まで行くのが、大変だったかな。一車線だから道路脇か
ら水がどんどん落ちてきて。中央はみ出してちよつと
通つて。三船病院のところまで行ったら二車線になった
から、もうみんなほとんど中央線沿いに寄つて走行して
……。でない、と、鉄道沿いから滝のように水やらぐんぐ
ん流れてきて……。そしたら竜ヶ水駅のところに行つて、
ちよつとガソリンスタンドがあるからそこにパトカーが
止まつた。そこを通り過ぎて百メートルも行かないか
な、行ったらもう車が全然動かなくて、前から人が、加
治木からの方の人が『もう、ちよつとだめですよ。前か
ら水やら壊れて崩れてきて、もう動ける状態じゃない』つ
て言われて。で、たまたま止まつた場所が旧道の広い場
所でもいつもかねて仕事で通るときに、ああ、ここがいつ
も水が出るところか、とはいつも思っていて、場所は大
体安全な場所だと思つて。たまたま近くに自動販売機と
その頃ちよつとした弁当屋があつたから、どうせこれは

もう動けんと思つてジュースと弁当買いに行つて、そこで車の中にずっと待機。自分より前が十台くらい、後ろが十台くらいだからもう車が流されたりやられたりして。あの、ちょうど弁当買いに行つた頃、時間はよくわからんけど、もう薄暗いときだった。あの竜ヶ水駅の上、確か稲光がして、それで停電になつて、真つ暗になつて。おそらくその時壊れたのかわからないけど、あとでそれは分かってくる。もうその状況は、前は崩れて、後ろも崩れて。竜ヶ水が崩れたのはみんな分からなかつたから、あつちに行つて答え聞いたりもするから、『もう動かないほうがいいよ。』つて言つて、『ここは安全な場所だから。』つて。背中の子供背負つた人がいて、スリッパも履いてないで、素足であつちこつち。もう、不安で行つたり来たりしようと……。だけでも、なんか一台トレーラーの人が後ろを開けて、その中にみんな避難した。そして、そこでもう自分おそらくもうここから動けないのは明日の朝まで動けんやろうと思つて、車の中で動かないほうがいいねと思つて、車の中でじーっと見てた。それから五時間、その時確か五時ごろだったから、十時、

十一時ごろ、なんか駅の前のあたりの船が電気つけてぐるぐるしているのをみんな見ていて、たまたまいた場所が下に海に下りる階段があつて、そこで人が一人発煙筒を焚いて……。十時か十一時ごろ、瀬渡し船がやつと来てくれて。車が安全な場所があつたから、そこで停めて、乗せてもらつて。そして沖に出たら巡視艇が待つて、そこで住所と名前を全部控えて……。それから、港の方に連れて行つてもらつて、避難所に、港に着いたら、その頃はまだ携帯電話を持つてなかつたから、家の方に公衆電話で、『大丈夫、無事だから。』と言つて。元の県庁の横に小学校があり、そこが避難所になつていたから……。そこに行つたときは、日にちが変わるとかで、もう十二時から一時、十二時半から一時の頃だった。だから、いつも通るときは、雨が多い時とか、できるだけ通らないようにしないとけないと思つてた」

——最後に振り返つてみて、どう感じましたか。

「その時は家族もあつたし、できるだけ帰れるようになるか、帰りたいと思つたけど、できるだけさういふときは動かないほうがいいなと思つた。それを経験して、雨

が降るときはできるだけ磯街道通らないように、高速に乗るように。すごいときは休むように常に決めていた」

——ありがとうございます。

「橋も流された」

福留ハルミさん

インタビュアー 花牟礼渚彩

文字おこし 川添愛生

——当時はおいくつだったんですか。

「三十年だよね……五十（歳）？」

——あ、そうなんですか。超意外！もうちょっとお若いかと思っていました。

「もう……シミが……」

——最近ですか？

「しわはねそんなにだけシミがすごい。実家が吹上で、いっつも貝取りに行ってたの」

——あー、日なたで。

「だから母は『あんたの顔はさるみたいに真っ赤だよ』って言ってた。けどそれでも貝取りが好きで……昔は日焼け止めクリームってなかったから。見てごらん、このしみ」

——でも、意外と（だいじょうぶ）ですよ。そんなにない。

「でも、しわはあんまりないっていうね、みんな」

——すぐく若く見えるから。今六十くらいかと思つてました。

「八十……」

——あ、そうなんですか……で、当時はここから下が水浸し？

「うん、全部水に浸かって……清水町、稲荷町、池之上町、ほとんど浸かったの、水に。その川が溢れてね。で、池之上町に行く箸も流された。だから、市バスの二番線が通れなかったの。橋が流れたから」

——あー、あの清水中の橋ですよ。

「そうそう。もう、稲荷町の神社の近くにいたおうち……川に近いところにおった家ごと流されて亡くなられた。お年寄りの夫婦二人ね。で、その二人がその水が

その……あなたの家の隣、階段があるところ、あそこ
に死体二人おいてあって、消防がついてた。救急車が来
るまでね。で、こっちの保育園の隣の前田さんと『大変
ですね』って言ってね、お茶をあげてたよ」

——やっぱり停電とかしました？

「うん」

——やばかったですか？

「清水小学校が避難所だったけど、清水小学校は浸かっ
たから……」

——黒板にありましたよね。

「うんうん。だから急遽この隣の上町福祉館が避難所にな
って、それからずっとここが避難所」

——だから、夜中雨が降ったらここにお年寄りの方が集
まって、電気がつくんですね。

「うん。だから、台風とかが来るときは、ここの上町福
祉館は避難所になってる。だから、八六でやられたよう
な人たちは、もう、そのときを思い出してすごく怖いか
ら、すぐここに逃げてくるの……」

——なるほど。

「だから、清水町、池之上町、それから稲荷町の商売人
の中でうちだけが浸からなかったんだって。だから、コ
カ・コーラがきて、『お宅だけが浸からなかったから、
頑張ってるだけ売ってください』って。そこにタイヨー
の清水店があるよね、あそこもやられたって言ってた」

——あそこもやられたんですね。でも、ことあんまり
変わらないんじゃないですか？

「いや、坂になっててさ……」

——ここがこら辺でいうところのちよつと上ぐらい
だったんですね、高さが……。じゃあ、このお店自体は
被害はなかったんですか？

「うちはどうもなかった」

——あー、なるほど。周りが（やられたから）？

「うん、だからそこ（水害の後）からでも商売できたよね。
コカ・コーラが『手伝いに来ますから。売るだけ売って
ください』って卸屋が言ったの。でも、居たのはたった
一時間くらい……」

——あははは。

「あとはもう、一人でして……それで、（お客さんは）お

昼のお茶をしようと、次の三時のを予約して帰るの。『冷やす暇はないですよ』って言っても、『それでもいい』って」

——周りが売ってないからですか？

「うん。で、私はもう疲れて疲れて……」

——ですよね。

「四、五日経ったらね、目が霞んで、病院通いだった」

——えー。。

「八六水害ね……」

——でも、ここが残ってくれたおかげで、すごく助かりました。

「大変だったの……、この辺はね。でも、稲荷川はそれからあとでね、川幅を広げて、底をちよつと深くしたら、もう心配はないだろうとは言われるよね」

——あんまり（溢れそうとか）聞かないですもんね。

「うん……」

——せっかくこちら辺に住んでるから、こちら辺の話が聞きたいなって思っ……今日はありがとうございました。

「家にいてよかった」

進藤穰さん

インタビュー 勝部智也

文字おこし 北村透吾

——86水害があった日のころ

「学生だった」

——ちなみに鹿児島大学（でしたか？）

「鹿児島大学」

——では、ここで（鹿児島大学で86水害を体験されたのですか？）

「ここですっていうかね……家にいたよ。それがなんか雨が強いなあと思っちよつと行かないほうがいいかなあて（笑）（大学には）電話かけて『休みます』と言っ（笑）。その前からずっと降っていたから（笑）」

——ちなみにお家はどのあたりに（住んでいらっしやいましたか？）

「あー、鹿児島市内。あー、昭和からだねー。えっとね、

西の方なんだよね、西陵っていうところそこに（住んだ）

——じゃあその日は自宅の方で一応待機（されていたのですか？）

「そうそう（笑）」

——ちなみに雨が降ってきたのって大体（何時ごろですか？）

「朝から結構降ってたと思うけどね」

——じゃあもう一日中

「うんそうそうそう、これはちょっと行かない方がいいんじゃないかって（笑）」

——西陵というと丘の上とかでは？

「そう丘の上だから……そこにいた方が安心だろうねと（笑）」

——崩れない限りは……

「崩れるようなところではなかったし」

——例えば住んでた周りで少し被害があったりとかは「それはないね……だからニュースかなんかで見てあと実際に次の日とかで町の中すごくなくなってんだっていう感

じで（笑）」

——次の日ぐらいには外を出歩けるくらいには雨はあがっていましたか？

「次の日て言ったらなあ、確か上がったのかなあ、ちょっと記憶にないんだけどまあすかかったですよ（鹿兒島）中央駅（当時は西鹿兒島駅）の前なんか……あの甲突川から流れていた土砂がもう詰まってね車もたーくさん放置されたまんまで水が浸かったまんま（笑）……あのパス通りのとことどだったけ（笑）」

——甲突川というとあの橋がある（ところですよ）

「そうそうそう」

——じゃあもうそこが溢れて

「あそこ（甲突川）が溢れて……橋も流された（笑）」

——その（地図を指す）
「えーとね、そこじゃなくて、ここのえーとね電車通りその電車通りで昔の交通局のところのこの橋がな甲突橋（正しくは高麗橋）っていう……そこが昔石橋だったのね……その石橋が崩されたり、流されたりして」
——あーその橋なんですね

「だから……あとはね大変だったのはね水道が止まったね」

——水道ですか？

「あの……甲突川のちよつと上行つたところに浄水場がある……甲突川があふれて浄水場に土砂が流れて」

——じゃあそこもだめになつて

「そうそう……それで水道が止まつてここの研究室も……止まつて確かでなかつた」

——止まつたのは水道だけ（ですか？）

「水道だけ」

——ガスとか電気は

「はついてた」

——ライフラインはぎりぎり

「だから道路だけよね」

——あー交通機関が

「うん……あと家屋浸水」

——ここの研究室は浸水は（大丈夫でしたか？）

「ここは大丈夫大丈夫」

——下の階とかは

「ここも大丈夫。このね、水産学部のあたりはね水に浸からない……わからないもんでねそのみずほ通りの横側が危ない……なんか平らなように見えるけど向こう側が（危ない）」

——徳洲会（病院のあつた）

「そうそうそう」

——じゃあ、ぼくんちは多分沈みますね（笑）

「あはは」

——あーじゃあこちら辺は沈まなかつたんですね

「こちらへんね」

——お話ありがとうございますこのくらいでもう

「いいの？」

——ここまでお話を聞かせていただけたら

「まあ……あれが来てから（8・6水害が起こつてから）ほんと鹿児島市内の治水はよくなつたよ」

——らしいですねそういう話はほかの方からもお伺いはしたんですけも。なんか最後にその日自分がこうして

たらよかつたなあとかは（ありますか？）

「特にない（笑）家においてよかつたなど（笑）……下手

に行つて帰り車で帰つてきたら巻き込まれてただらうな
あと思つて（笑）」

——すみません（笑）お時間ありがとうございました

「線路伝いに歩いて」

田島律子さん

インタビュアー 小森瑞姫

文字おこし 岩永百加・小森瑞姫

——それではよろしくお願ひします。ばあちゃんはその
時何歳でしたか？

「45、6歳ね。娘が迎えにおいでつて言つたから迎えに
行つて、帰りは車で行こうと思つたとたけど、帰りはもう
車が全然通らなくて……どうしよう、水が川からあふれ
てると思つて若宮神社の方に行つて。あそこ（若宮神社）
はまだ高台でしょ。ここに車止めて、娘を二人どうしよ
うつて言いながら、もう歩いて帰るしかない、車通らな
いからつて言つて……そしてまだ橋が通れたの、向こうの

海岸の……」

——八坂？

「そう。八坂の橋のところはまだ大丈夫だったから、あ
そこの方に渡つて線路づてに帰つてきたの。線路歩いて、
もう全然通るとこがなかった……」

——どこが通れなかったのですか？

「もう国道水浸し！もう道路の方までずっと（水位が）
上がつて、車も止めれない人間も歩けない状態で、そ
れで線路高くなつてるでしょ。そこを歩いて、娘と二人
で歩いて帰つて

怖かったねつて言いながら……その晩はまた、夜中にゴロ
ゴロゴロつて音がしたから、何かかと思つてみたら、上
から大きな石が、道路の方にガタガタに落ちてきて、わ、
やばい、これは大変ことになったと思つて、窓から眺め
て……」

——逃げなかつたのですか？

「逃げるまでに、もうこっちへ水が来てた」

——ここ（インタビュアーの家）も？

「そう、周り全部泥！」

——線路の底には水があったのですか？

「線路にはみんな(水は)流れてて、水は溜まらない。泥が、山とか石とか、駐車場があるから駐車場に入らなかつたけど、すごいことになって歩けなかつたの。その中をね、Fさんが見に来たから、Fさんと、どうしよう、この辺どうなっているか見に行こうと言って、二人で、この朝、雨靴履いてトボトボこの中を歩きながら、途中までトンネルに近くまで見に行つて……川が溢れていた」

——稲荷川？

「そう、稲荷川が溢れていて、そしてドキドキしながら帰ってきた。怖かつたよーそして、あくる日はおじいちゃんが近くにおじいちゃんが死んでいたのを見ながら……」

——なぜですか？

「土砂に埋もれて……」

——土砂に埋もれて亡くなったということですか？

「そうそうそう。それはあくる日はあつたの。近くまでFさんと二人で行つたの」

——Fさんはその時は民生(民生委員)だったのですか？

「そう。それでFさんが私を眺めていた。それで見に行こうかつて言つて、二人で歩いて、トボトボ泥の中をね。そして、その人は亡くなつていたけど、近くの人が後で、ここのおじいちゃん亡くなつていたのよつて……」

——八六水害のせいですか？

「そう、近くの人、土砂が家に入りこんで埋もれて死んだ」

——その後、片付けとかは？道路の土とか？

「道路は市がしてくれるから。うちの方は高台だから家には全然入つて来なかつた……川の音が、ゴゴゴゴするしね」

——おじいちゃんは警察官ですよね？

「警察官だから、おじいちゃんは仕事だから、おじいちゃんには来ないうちに。仕事だから帰つてこなかつたよ。娘と二人でいたからね……その夕方になって、崩れる前よね。上の人が二人、夫婦で来て、田島さん(家の中に)『入つてもいい？』つて、『いいよいいよおいで』つて言つて。崩れる前に来たよ。その後(お礼に)お芋さん1箱持つてきた」

——崩れたときに逃げ道はないつてことですか？

「崩れたの、夜中でしょ。ゴロゴロ明け方、音がするから、何事かなど、見たらもう上から石ころがいっぱい落ちてきた。うちの上がほら、潰れてる……あの時は本当に怖かった」

——Fさんと、その次の日の朝ぐらいに歩いたのですか？

「そうそう、朝」

——翌朝、家の外を見にいかれた時の様子はとうでしたか？

「まだ泥んこだった。水は捌けて線路に落ちて……。こっち（家の横にある）の線路は低いからね。全部道路には泥だけ詰まって、水は全部線路に流れるわけ」

——線路を渡って家に帰ってきたとありましたが、どうやってですか？

「向こうの（家から少し離れた）線路だったから。こっち（家の横にある線路）は低いけどあつちは高くなってるでしょ。上松酒店からこっちの坂で上がってこれるのよ。水浸しだった……こっちの線路ね」

——お迎えは誰のお迎えに行っただんですか？

「娘！高校の学校に迎えに行っただのかな……。とにかく娘を乗せるとにかく高台に行っただけよ。車は若宮神社において、後から水が引けてから取りに行った。あの辺車いっぱい停まっていたよ。だって走れないでしょ」

——災害とか学校の体育館に避難したりしますが、それはしなかったんですか？

「いや、もう逃げられない。だってもう逃げられないもん。土砂が入ってきてるから……道路が。歩けないもん。だからもう上松酒店のところまでまだ線路が高いから、そこから辺まで歩いて、そこから向こうまで進んだ。怖かったよね……。うちなんか渡った後はもう通行止めだったよ。そこ川が溢れて通れなかった。ここ（国道）通れなかったから若宮神社に（車を）おいて……。怖かったよね……。あの時は不思議だね。娘とどうにかして帰らんと（つて思ったら）どうにかして帰れるもんだよね。怖かったけど。今思ってもゾツとする。私なんか線路がほら上にあつたから良かったけどねえ……。もう大変よ川が横にあるし。八坂神社のところにも川があるでしょ。その線路渡ってきたの。ちょっと高くなってるでしょ。」

そこ歩いて橋渡つて。あの線路伝いに途中まで歩いてきて、途中からほらこっち（家の近くの坂）歩いてきたの。怖かったあ」

——こちら辺も亡くなった方はいるんですか？

「亡くなった人は一人だけだけど、家壊れた人は2、3人いる。上の方壊れた。二軒くらい壊れた。そしてほら向こうは土砂で埋もれてもう今廃屋になつて、その人はもうそのままいないし……。独り住まいだったの。いないない思つたら中で死んでたの。近くまで見に行つただけど中には入らなかつたけどね。Fさんが民生委員しとつたからあれはなんだこうだつて言いながらFさんと歩いてたんだよね」

——朝はもう落ち着いてたんですか？

「もう明るくなつた時はね。夜中はガンガンガンンつて石とか落ちたりしたけど。怖かつたけどFさんが『見に行くが』つて言つたから行つたのよ。まだ若かつたら。Fさんが田島さーんつて一緒に行きましようつて、ちよーど私が見てたから（外の様子）。うんうん行きましよう行きましようつて雨靴履いて行つて、泥んこの中

歩いて……。雨靴だつたと思うよ、わからんけど。靴だつたかな。とにかく泥んこの中歩いて……。」

——ありがとうございます

「家族と過ごした30年前の8月6日」

田原ひとえさん

インタビュアー 小森瑞姫

文字おこし 緒方綾乃・小森瑞姫

——30年前の8月6日水害の出来事を覚えていますか？

「はい、大体覚えてます」

——その時、ひとえちゃんは何歳でしたか？

「えっと、歳、歳……」

——そう、いくつぐらい？ だいたい、だいたい。高校生、とか？

「いや、40？ 子どもたちがおつたね」

——そうか、ママたちが高校生か……。

「子どもたちが高校生」

——子どもたちが高校生で……

「子どもたちが高校生で、家の長男が高校生で、次男が中学生で受験生で、長男は玉龍高校行っていました」

——はい。

「その帰りに電話が来て、『あのお母さん』って。『バスが乗れないの』って。そこね、そこ乗るからね。稲荷町をね。(子どもたちがバスに) 乗れないからうち何とかして迎えに行きました。迎えに行った時はよかったですけど、この吉野町に上がる時はその道路が、坂道が川のように水が上から流れてきたの。で、そのもしかしたら車はそのまま流されないかなあっち思いながら一生懸命運転して我が家に帰りました。そしてその後、夫は海上保安庁に務めていて、緊急の呼び出しがありました。ほして、出ていくってバイクで出て行ったんだけど、その滝の上(かみ)の、何つけなあ、トンネル？が崩れて、もう通れなくなっただ」

——えっ、そこ？磯ってこと？

「いや、その上」

——あ、上のトンネル？

「それが壊れて通れなくなっただけで、救助に主人……夫は迎えに向かったんだけど行けなくなりました」

——えーっ。

「で、そういうことがあつてそれで海上保安庁の船はあのね、あそこ何つけ、あれは。えーっと、あそこでがけ崩れあつたがね」

——竜ヶ水？

「竜ヶ水のそこまで行かないといけなかつたけど、行けなかつた。あの、もうとつてもかわいそうな、あの、みんなのことを気になつたんだけど、どうしようもないけど本人は行けなくて……。で、気になつていたのよね。私、もう……。私は家族だから、夫がそこに行けなかつた危ない目に合わなかつたって内心ほつとしたところがあつたのよ……。本当はね……。もしそこに巻き込まれたらどうしよううち思うがね、やつぱり。それがありません」

——海上保安庁ってことはあれ？なんかその竜ヶ水に取り残された人たちが船(で助けに行こうとしたの?)

「竜ヶ水に取り残された人たちを助けに行くためにあの巡視船を出さないといけなかつたのよね。でそれに乗れ

なかつたわけ、夫はね。助けに行けなかつたの。(夫は) それすごく残念だつたんだけど、家族としてはそういう事故に巻き込まれなくてよかつたつち本当のこと言つたら……。ね……。正直なところそういう気持ちがありました」

——まあ、まあね……。

「で、その後、子どもを迎えに行つて家に居たら、結局今度は水がなくなつたのね。水道が止まつて断水してすごく困つただけど、まあ水は一応家に置いてあつたらそれで助かつたのね」

——うん。

「そういうことがあつて、そうしたら同じ社宅、社宅に住んでたから、社宅の人の息子さんが、えっと、塾に通つとつて(通つていて)、その奥さんから電話があつて『自分たちは帰れない』って」

——おうちに？

「うん。『もう車で泊まる。水があつて帰れなくて自分は高台に避難してるけど、(塾から)子供が帰ってくるんだけど』(つて電話があつて)、結局まだ小学生だから預

かつたことはある。小学校の息子さんをね。そういうこといっばいあつて。そしてスーパ―に行つたらもう食べ物も、あの、なんか飲み物やらが少なくなつて。向こうに上がらないから車が。それですごく困つたことがありました」

「まだ……？まだ話さないかんの？(笑) いいじゃろ」

——もうだいたいこんぐらいで(笑) ありがとうございます

「これでよかつたかしら」

——うん。1個。その吉野のさあ川みたいに流れてるつてさあ全然想像がつかないんだけど、どんなん？

「結局、結局やつと車が通れたから流れはしたのよ。深さはわからないのね。とにかく流れてきたからさ水がザーザーザー。それでまあその押し流されることはなかつただけど。怖かつた。すごく恐怖……」

——吉野は山だけど土砂崩れとかなかつたの？

「土砂崩れはそのほらトンネルのところであつたのね。それだけかなあ、私が覚えてるのは」

——ありがとうございます

「はい、そんなことよかったかしら」

——はい。ご協力ありがとうございました。

「高いところに逃げる」

逆瀬川実さん（仮名）

インタビュアー 前鶴公介

文字おこし 徳浜瑠

——今から86水害のインタビュアーをしたいと思えます。インタビュアーに協力してくれる方を逆瀬川さんと呼びます。よろしくお願ひします。

「よろしくお願ひします」

——逆瀬川さんはその頃、何歳で、何かお仕事はされていましたか。

「その頃は24歳で学校の仕事をしていました」

——学校というものはどのような

「期限付き教諭です」

——なるほど。えーじゃあ86水害の被害にあったとい

うことですが、その日、どこでどうしていましたか。

「その日はお昼から友達と坊津の方にドライブに行っていました」

——じゃ、どのように状況が変化しましたか。

「その日はずっと雨が降っていて、鹿児島に帰ってきた頃にすごく雨が強くなっていたのに恐怖を感じました」

——その日、予報などではどのような予報をされていたか。

「予報はよく覚えていません」

——雨が降るといふ感じでしたか？

「とにかくずっと降っているなっていう印象でした」

——どのように状況が変化したっていうのはこう、雨がすごく多くなつていくときにどこらへんで危険を感じましたか？

「その頃、唐湊を通った時にすごく雨が強くなつていてすごく早く帰らなきゃっていうのが怖い思いをした記憶があります」

——なるほど。じゃあその雨が多く降った時に具体的にどのような行動をとりましたか？

「特には覚えていませんが、とにかくなにか車をいつもの駐車場と違うところに止めなきやっという気がしたのを覚えてます」

——逆瀬川さんの家は大丈夫でしたか？

「はい、5階だったので大丈夫でしたが、すぐ甲突川の近くだったので、上から下を見たときにたくさんの人が膝までつかりながら歩いてたのを覚えてます」

——なるほど、逆瀬川さんに直接的な被害はありましたか？

「自分にはありませんでしたが、車が半分浸かりました」
——その車はどのような感じになりましたか？

「どのようなかというと、水が半分浸かって、次の日には水は引いていましたが、動かない状態でした」

——86水害が起きた次の日などはかなりこう、断水などがニュースであったのですが、逆瀬川さんの住んでいる地域は断水などはしましたか？

「しました。何日も水は来ませんでした」

——その時はどのような感じでその断水をしのいでいたんですか？

「とにかく一番困ったのはトイレだったので、近くのピルのところに水が底は出たんでしようね。そこにトイレに行った記憶があります」

——なるほど、やはり86水害はすごく怖かったというイメージがありましたか？

「そうですね。もう、周りの、天文館が近くだったので、天文館の地下に止めてた車がもう何台も廃車のようになっていたし、もう、がれきとかがすごかったのを覚えてます」

——86水害を振り返って、どのようにすればよかったですか？

「まあ一番は自分の車が浸かったっていうのもあるので、そういう雨の日とかはなるべく近いところに住んでるときは高いところに車を止めるとか高いところに逃げるっていうのが教訓としてあります」

——なるほど、やはりこう86水害は今までにないぐらいの雨の量だったんでしようかね。

「とにかく、ずっと降っていました。朝から、そしてまた夕方にかけて強くなっていたという印象です」

——ありがとうございます。以上で86水害のインタビューを終わらせていただきます。逆瀬川さん、ご協力ありがとうございました。

「ありがとうございます」

「二次災害になったらいけない」

多田美智子さん

インタビュー 前鶴公介

文字おこし 徳浜瑠

——これから86水害のインタビューを始めます。協力してくれるのは多田さんです。お願いします。

「はい、お願いします」

——えーでは、そのころ何歳で何をしていましたか？

「多分50歳で」

——はい。

「何をしていたか？主婦」

——主婦。はい、えー86水害があった日はどこでどのようなことをしていましたか？

「家でみんなで飲み会をしました。雨がすっごい降ってた日だったの」

——その日は一日中？

「一日中降ってました。それが尋常じゃない降り方だと」

——いつもと違う感じの降り方で？

「私は高台の方に家があったもんだから、そんなに水害があるとは思いません。後からニュースでわかるような感じで」

——ニュースでわかったような感じですか？ありがとうございます。えーじゃあどのように状況が変化したというの

「もう雨がひどかったっていうのだけ。別に家の中に住んでいて何がどう、何もなし。普通の、普通、普通に足元が濡れるでもなく、なんでもなくただ家にさえいれば別になんてことはなかった」

——高台だから大丈夫だったって感じですか？

「そうですそうです」

——じゃ、どのように行動しましたか？そのときは「その時はみんなで呑んでたから、だからみんなでワー

ワー言って、それこそ家の中でカラオケみたいにくらやってワーワーやってた。そしたら電話がかかって誰からかかってきたかはちよつと覚えてないんだけど、主人にかかつてきたの」

——はい。

「で、下の方がものすごい状態なんだけどって言われて。知り合いがいたのはいたんです、天文館の方に。で、じゃあつていうことで消防団みたいなのに入つていたりしたもんだから、うちには大きなボートがあつたんですよ。趣味で」

——あ、趣味で！はい。

「なんていう、木のボートじゃないよ、ゴムで膨らましてこようするボート。結構人数が乗れるものなんで、自衛隊が使うような。あんなボートがあつたもんだからそれを二人で担いでいった。お友達と二人で担いでいって、そしてそれに膨らませて、あの甲突川の近くのあの辺は何道路つていうのかな、すつごい水没したところがつたらしいの」

——はい。

「そこに助けに行つたの要するに」

——助けに？

「そうそうそうそう」

——助けにとはどのような感じ？

「あのね、行つたら、あの冷蔵庫が流れてたり、車が浮いてたりとかいろんなしたんですつて。そしてちようど民家のね、屋根の平屋だつたんですけど、私は現物を見ていないからわからないんだけどサッシの半分くらいまで水がこよう入つてたつて。そこになんか、なんか心配を感じたらしくて。ま、開けられないから壊して、戻を壊して二人でこよう覗いたんですつて。そしたら中になんていうのかな、おじいさんなんだけど、きつと寝てらつしゃつたのか具合が悪かつたのか、あの畳ごと、畳の布団、ひいた畳があつて。お布団ひいてますよ昔だからベツドじゃなくて。で、そのお布団も全部一緒に畳ごと上がったんです。浮いてた」

——えー！浮いてて。

「そう。それをその人を助けて、ボート乗せて、ちよつとこいでいつたら、消防の人とかが、救急車とかの係の

方がいらつしやつて、引き渡してつて言われたんですつて。もう仕事ですよ、『この災害はちよつと大きいから危ないから引き上げてください』つて言われて、そして帰つてきたんです」

——それまではずつと救助活動を？

「そうそうそう。そういうことですねその人（夫）が一番印象に残つたという。その方（救助した老人）がどうなつたかはわかりませんが。あの要するにきれいに布団がその畳の上にひいてあつたんでしようね。だからそのままずつと落ちもせずそのまま浮いちやつてるわけよね」

——もうボートで救助に行くのが必要なくらい冠水してたつてことですよね？

「そういうことさういふこと」

——そのときどのように感じましたか？

「いや私は全然わかんない。行つてないから。聞いた。その主人から報告を聞くまでだつたから。私は馬鹿だね、そんな危ないことしない方がいいのに、とは言いましたけど。ほんとのこと言つとね。まあそれはその話で、うん。」

そうね、よかつたね助かるといいね。つて終わつて消防とか警察の方から二次災害になつたらいけないからその引き上げてくださいつてボートが署のでもないし、救急隊のでもないからとにかく引き上げてくださいつて言われて引き上げてきたつて言つてましたから」

——じゃあやはりこう危険とは感じましたか？

「そうでしょうね。『危なかつたよ』つて言つてましたよ。漕いでると何が流れてくるかわかんないつていうのはそんな（こと）は言いましたね」

——じゃあもう最後の質問になるんですけど、振り返つてどうすればよかつたなつていう教訓みたいなものはありましたか？

「あー本人がそのときは何も言いませんでしたけど、亡くなつてから何とも言いませんけど、私は何も、あの人はもともと人助けが好きというか、ちよつと変わった人。船から飛び降りたのを落ちたと思つて自分も飛び込んで助けるような人ですから。桜島のコールなんかのときは一年分のチケットをもらいましたよ」

——すごいな。救助活動みたい。

「亡くならなかったからその女の人が。ちゃんと助けて、うん。本当は飛び込み自殺だったらしいんですけど」

——そうなんですか？

「それ知らないもんね。落ちたと思つて一緒に飛び込んでしまった。だからちよつと正義というか、うん、なんかちよつと変わったところの人でした」

——正義感が強かった？

「うん、そうですね。きれいに言えばそう。おせっかい焼きでもある」

——多田さん的にはこう、大雨が起きたから？

「それも気になります。この間もすごい雨だったでしょ？ そしたら気にはなる。やつぱり、ないだろうけども。はい、で、ここに移つてからそこのお花屋さんなんかも全部(店の)中が水浸しになつて大きな冷蔵庫が動いたつてのを聞きましたから。大きな冷蔵庫があるんですけど、それがバーツと動いたつていいますから中で。だからよつぽどのことだ。だから雨が降ると怖いですよ。気にはします」

——やつぱりその8・6水害とか。

「そうそういやな思いしかないから。怖いってことしかない。自分の身内が亡くなつても何でもないんだけど、結果なにもなかったんだけど、それはありますね」

——じゃもう雨の影響がすごく強くて雨に対する警戒心なんかも。

「強いですね。もうひよつとしたら人いるつていうかもしれない。はい」

——ありがとうございます。これで、8・6水害のインタビューを終わります。どうもありがとうございました。

「どうも、ご苦勞様でした」

「8・6災害からの復旧に向けて」

田村耕一さん

インタビュー 内園麟斗

文字おこし 内園麟斗

——よろしくお願ひします。8・6水害についてなんですけれども、その当時は、おいくつぐらいで何をされた

んですか？

「えーとですね、私は鹿児島市の水道局に勤務しております、確か1993年の8月6日ですよ。だから、当時私は43（歳）か44（歳）になるちょっと前ぐらいです。そして、8・6水害のあった当日はもう、雨が降る中結構もうズブ濡れ（になり）ながら、帰ってきたんです。そしてあくる日（翌日）が確か土曜日だったと思うんですけど、これは結構晴れてましてね。あの土曜日だったか休みで（家に）いたんですけど、昼ごろだったかな。（電話で）『もう水道局の方も被害がもう甚大になつたから来てくれ』というところで行ったら、浄水場は滝の神浄水場、河頭浄水場、平川浄水場、三つの大きな浄水場がありますね。それで平川（浄水場）は谷山の方だったからそんなに被害がなかったんですけど、もう河頭浄水場なんかもう、水を流入させるとこなんかもう全部泥で浸かって。滝の神浄水場は、浄水場自体はそんなにやられてなかった（被害を受けてなかった）んですけど、水を取水口からもってくる導水管、配水管が全部やられて、結局もう水を市内に送れない状態になって、

市内で稼働できたのは平川浄水場が（あった）。そこから配水したんですけども、大部分の地区は、河頭（浄水場）か滝の神（浄水場）の浄水場の配水だったから、結局断水が起きましてですね。そして、配水機自体ももう、あの配水機は大体高台にあるんですけど、高台もほら、山の土砂が来てとかで結構やられて（被害を受けて）、どのぐらい断水したのか知らんですけど、1週間ぐらいは、浄水場の、んー1週間じゃ効かんでしょうね。そして、結局応急給水のため、私らがまずそのそういう土砂に埋まった浄水場の土砂撤去とか、それはもちろん職員だけじゃ無理だし業者も頼んだりして。その応急給水なんかは給排水管つちゅうのがあるんですけど、それと自衛隊にお願いで、いわゆる給水車で市内に水を配ってましたね。そしてもちろんほら、浄水場なんかは土砂で埋まって、それ（土砂）を取り除いても機器がやられてますから。そんなんの修理に結構（復旧までの時間が）かかってましたね。それ今度は終末処理場はその当時は、今もうそこにはないけど、錦江処理場、それに南部処理場、谷山処理場。大体おつきな処理場、それと祇園之洲なんか

上町中継ポンプ場なんかがあったんですけど、そういうところも結局土砂とかがあって。土砂もなんですけど、要するに処理場つちゅうのは、いわゆる汚水いわゆるトイレの水なんかだね、だから多めなもんだから、雨水なんかも混ぜて終末処理場も結局ほら、本当は下水つちゅうのは処理をして、海に放流するんですけど、もうそんなもほら、満足にはできない状態。もう要するに追いつかない状態で、ポンプ場なんかも水に埋まったりして、結構復旧に時間がかかったということですね。そして災害つちゅうのは国の補助金なんかで復旧しないとでも自治体だけでは復旧ができないんで、そういう災害復旧をして、国のお金を貰いながらしていくんですけど、災害復旧での工事、いわゆる処理場から浄水場から配管に至るまで終わるのに大体3年ぐらいかかりました。もうちよっと金額は覚えてないですけど、結構国の方から補助金をいただいて、やった（災害復旧をした）覚えがあります。そしてやつぱあれですね。そういう断水のとぎ一番困るのはやつぱ病院関係が一番困りますね、というのは通常の生活用水だったら、もうほら緊急の場合だっ

たら1人20リッターとかで短期間であれば済ませれるんだけど、病院の透析患者がいる病院とかは大量に水を使うもんですから、それこそそういうところは優先して自衛隊とか給水車で病院のなんつうかね水を溜めとくこの中に、水を回して（融通）して行った覚えがあります」

——直接持つていくってことですか？

「要するに給水タンクに入れて車で運んで、その向こうのほら、そういう何か水を溜めておくところがあるんですけど持つていったっていうような感じですね。特に8・6水害つちゅうのはそのときはですね、もうずっと梅雨から梅雨時期の雨がですね、もう長く続いて梅雨明けもない状態で、続いてまた特に4、5、6（8月4、5、6日）か、こちら辺で極度に雨が強かったもんですから、もうああいう状態なったと思います。それでその8月6日の夕方、仕事を終えて帰るとき、私はほら水道局はその鴨池ですから、割かしほら長靴とかで（家に）帰れたんですけど、もう私の友達なんかはもう帰る途中に、車がですね、天文館で、もうドアぐらいままで（水が）来てですね、怖くなって、結局ドアが開けれずに窓割って窓から

出てったという人も結構いますね。そういう状態のすこい雨でしたな」

—— 8・6水害で呼ばれたって（いのは？）

「もう、いわゆる私は公務員ですから、こういう緊急事態になつてからすぐ来てくれつち、あくる日行つたら、もうあそこまでやられると思わんかつたけど、行つてそのほら私は呼ばれて。河頭浄水場（は）伊敷の向こうの方にあるんですけど、今度は行き着くまでが道路がです、もう寸断された状態で、あくる日は結局はもう雨降つてなかつたから。だけど、ほらもうゴミが散乱して道路は寸断されて、すごい状態で着いたら、今度はもう浄水場の取水場なんかもう泥で埋まつてるといふ状態でした。

—— 呼ばれるまではご自宅で過ごされてたつてことですか？

「そう。というのはそこまではほらそういう方が被害起きてるつち知らんかつたもんですから」

—— それで実際にいろんなところが被害を受けて大雨になつてつていふので、どう感じられましたか実際に体験

してみて

「やつぱこういう自然の力というのは恐ろしいというか、もう、壊滅的だったですね。というのがもう、さつき言つたように処理場は水で埋まるわ、導水管とかが、大きさが800ミリぐらいある、80センチ。そんながもうほら、完全に抜け落ちてバランバラになつてる状態なんですよ。というのが、ほら滝の神浄水場なんか結構ほら、斜面を導水管が降りてたもんですから。それがあつて今度川は水管というのがあつて、橋を作つて、水道管それもほら流されたような状態。もう川の原型が変わつてましたね。滝の神のあつこは稲荷川か。谷山の方がまだ雨はちよつと少なかつたんじゃないですか。吉野とあつちの方が酷かつたと思いますよ」

—— それで多分その水害による被害つていふのは、その水害自体が終わつても、まだしばらくは続いてたと思ふんですけれども、仕事に影響とかは（ありましたか？）

「仕事はアレですよ、もう1週間はもう本当にもう家に帰れなかつたね。それからもほら、そういう応急復旧する災害対策チームを開かれて、そこでもう、もう夜遅く

までで仕事してましたね。だから、その災害、特に下水道より水道の方が被害が大きかったですから。その復旧工事が終わるのに大体3年、3年はかかりましたね。もう公務員は災害のときには、ほらもうそれやるのが使命ですから」

——それで振り返ってみて、もつとこう行動した方が良かったなというのはいかがでしょうか。

「あれだけの雨に備える施設を作るというのは、現実的にもすごいお金がかかりそうですね。どこまでやるのかは難しいけれど、何か災害起きたときに、どう対処すべきか。要するにほらそういう少ない水でも、どこを優先的に配るのか、病院に配るのか、そういうのはほら、マニュアルで決めときゃいいから。(そういう風に)していくべきかなとは思いましたね。というのが災害もですけど、地震もなんですけど、そういう災害はもう100年に一度の水害、地震は500年に一度の地震につちゅうけど、それに対応するべく本来施設を作るつてもう莫大な費用がかかるんでね。それで大体施設つちゅうのは(耐久年数が)通常50年ですよ。そして

延命対策をしても100年残るかわからんけど、それを何百年の(に)一度(の災害)に対応するような施設をつくるつちゅうのは、費用対効果を考えればちよつと無理な面もあるから。要するに効率よくするには、なんていうかねその全部の処理場がやられたり浄水場がやられたりしたら駄目ですけど、1ヶ所がやられるんやったら、それを補充するほら、あの給水なり配水の連携システムとか、そういう給水の優先順位とか、あるいは災害が起きて、事故なんかにあった人の優先順位をつけるでしょ。あんな感じで災害に対しても、どこを優先的するかそういうマニュアル(を)作るのが先なのかなと思うんですけど。それをもう、被害に対応する施設を作るつちゅうのは、ちよつと財政的にこれから人口が減っていくし税金も伸びらんのに。昔はですよ人口が伸びる中でいわゆるどんどん拡大路線だったけど、今は人口が減ってきた。言うたら今まで整備しよつたところ、整備をするのに、人が住まなくなつたら今度はそれを維持していかなきゃいけないですよ。そういう面を考えれば、なかなか難しいのかなと」

——それほどでかい災害でもあったということですね。

「うん。鹿児島市にとってはあれだけ大きい災害ちゅうのは、なかなかなかったんですね。それでですね、ちょうど本当に8月6日が豪雨やったけど、9月の初め台風が来たんですよ。またやられたんですよ。そのときはたまたま、だからもう、本当大変だったですね」

——ありがとうございます。

「自然の力は凄い……」

石田節子さん・田平エツ子さん

インタビュアー 野村唯斗

文字おこし 西牟禮隼人・野村唯斗

——86水害について教えていただきたいんですけど。まずその86水害の時に何をされてました？

石田さん「いやー家の中になかにいましたよ、そのときは」

——家の中ですか？

石田さん「その時は、うーん」

田平さん「建物が……」

石田さん「こういつて……」

田平さん「高麗本通りが……高麗本通りが……凄かったもん」

石田さん「うーん」

田平さん「外に出れなかったもん」

——外に出られなかったんですか？

石田さん「でもー私なんか2階でしたけど、下にお母さんがおったからもう……『お母さんが』助けて』って言った時にはもー、私なんか助けに行つたときには、もうヘソの上というのは腋ぐらい水が……もう一階が全部浸かったですもん。うーん」

田平さん「どこおった？」

石田さん「鷹師町におった」

田平さん「あー」

石田さん「みるみるタンスが浮いてきてさ、あ、もう大変だったよ。ほいで、2階にやっとお母さん2人で（力

を併せて) 上がらせて……あー……家が流れるんじゃないかな
いかなっていうぐらい、心配したけど……うーん、(無
事で) 良かったよお」

田平さん「うん。うーん」

石田さん「天文館なんかもうテレビで出たけど……もー、
みんなほとんど浸かって……もー、私の友達に商売して
いるのに地下水、水が入っせ(入って)、どげんして(ど
うやって) 逃げたか分からんちって(分からないと言っ
てた)」

田平さん「……(ききとれない) でしょ?」

石田さん「うーん」

石田さん「……なあ……あっち(天文館) も酷かったけ
ど……市内(天文館以外の鹿児島市内) も酷かったよお」

田平さん「うーん……」

石田さん「だからもう……」

田平さん「あんたなんか、こう覚え……わからん(知ら
ない) でしょ?」

——わかんないですね……

石田さん「ちょっとまだわからない……(インタビューア

の私かわからないという意)」

田平さん「生まれてた?」

——生まれてないですし……

田平さん「でしょう」

——私あの大学で……愛知県からこっちの大学に来まし
て

田平さん「愛知県?」

——あの一、86水害について、鹿児島大学(の授業)で
……初めて知りました。

石田さん「テレビで今、ちょっと、あれ言っとるけど、
もう30年経ったんだけど、あれも……」

田平さん「30年?」

石田さん「また酷かったね」

石田さん「あーん……汽車がほらもうあれが、崖が崩れ
て……」

田平さん「うーん」

石田さん「人が乗ってて、海の中にあれして(落ちて)
……船があの、助けに来たけどね。テレビではね、見た

けど……」

——竜ケ水……竜ケ水……（の話ですよ）

石田さん「あれもね……」

田平さん「竜ケ水ね？」

——そうですね。竜ケ水ですね。

石田さん「あれもね、亡くなった（人がいた）し。病院やら崩れたから……年寄りん（の）人たちが……（亡くなった）」

——おいくつの時でしたか。おいくつの時ですか。

石田さん「……は？」

——おいくつの時ですか。それを（経験したのは？）

石田さん「今からじゃから50歳……ぐらいだった……」

田平さん「今、80歳だから……50歳ぐらい」

——そうですね。

石田さん「50歳ねえ」

田平さん「若いころ」

石田さん「若いころ……そん頃（その頃）はテキパキできたけど今はできない……今、そんな、あれ（若さ）がない……」

田平さん「凄かった……もう、ねえ……」

田平さん「洗濯機がゴロゴロと……道をねえ……こう……洗濯機が流れてくる……」

石田さん「フッフッフ……」

田平さん「冷蔵庫なんかもコロコロコロコロね……」

石田さん「わあ……」

——おう……

田平さん「上からね。私なんか（家が）上（高台）やったんだけど……」

石田さん「あーあ、あーあ……」

——凄かったんですね……

田平さん「すごいよ。水の力は……ねえ？」

石田さん「えっとー、1 m 7 0 cm って、あのー、公民館に書いてある。あっこ（あそこ）もまた、あたいげーの（私の家の近くの）公民館が鷹師町だったけど。あっこ……あっこ（あそこ）にいつも（目印が）立っているけどなあ、1 m 7 0（cm）だっちて（だっただっ）。だから私なんかの……背（身長）より、高いわけよな。うーん」

——凄いですね……

——その時、どうしたらどうすれば良かったとかありません

すか。どうすれば良かったとかは……？

石田さん「……は？（聞き返す）」

——どうすればよかったとか……？

田平さん「どうしたらよかったか、だって」

——後悔、後悔、後悔……。そうです、後悔とかなりますかね。

田平さん「後悔もなんも（後悔も何も）……」

田平さん「ん、ねえ……皆、避難をした人なんかがいるんでしょ？」

石田さん「んだ？（聞き返す）」

田平さん「避難をした人がいるんでしょ？」

石田さん「あーん、そう」

田平さん「私なんかは避難しなかったけど……」

——避難……避難できなかったんですね。

田平さん「こう、（家から通りを流れる川を）見てたけど……」

石田さん「その後がね、（水が）引いた後がねえ、泥がねえ、ものすごくてね。みんなね、あつこらへん（あそこら辺り）の男ん人たちが2、3人。ほら、疲れてねえ、年寄りでしょ

……みんな。だから男ん人たちは一所懸命、泥を上つせあげたり（片づけたり）、しっせ（していて）、一所懸命しやつたけどね。そんなにね。（今はもう）亡くなった人が多かったですよ」

——そうなんですな……

石田さん「男の人だわね……あの、ほらその頃はもうね60（歳）、70（歳）やつたかもね（亡くなった人たち）。元気で……」

田平さん「話題を切り替えて」どうしたら、よかったか？ちゆうことは……その……なんていうのか、あれ、水害に……床上浸水とかよねえ……水害におうた（遭った）人じゃなきやわからないよねえ」

——ああ、そうですね……

田平さん「私なんかね……おうちにいてすごいなって……水の流れを見て怖かっただけ……」

——そうですね。そうですね……

田平さん「……流れてくるから。自転車が流れてきたり……それは凄かったよ」

——何もできないって感じですか？

田平さん「何もできん（できない）のよ」

石田さん「何もできやらん（できない）」

田平さん「みんな、出来ない。その場にいたらできないと思う。後でね、後でね、その後が大変だけど……」

——そうですね……。

石田さん「……流れるもん……流されてしまうもん……
ねえ……」

田平さん「自然の……自然って、大変……すごい」

——すごいですね……

石田さん「凄かったねえ……」

田平さん「自然の力ちやー（とは）凄い……。そのときは思ったよね、うわー、自然の力って凄いなあって……」

石田さん「私げん（私の家の）近くに『タイヨー（スーパーマーケット）』があったのよ。まあ、あそこ（あそこ）も、一階が全部浸かったもんな。もう、みーんな（商品が）流れてきてなこっちに。ほーで（それで）、病院がそこにあつたから、もうその（病院の）人たちも一所懸命、上に……なんて、患者さんをあげたて（病院のスタッ

フが患者を上階に上げる様子）、見えたもん、おうちから……うーん……私は二階だったからねえ、二階はそこまでなかつたけどねえ」

田平さん「自然の力ってすごいっちゅう、それだけがもう……」

——それだけですな。

田平さん「ほで（それで）、なんかちよつと（危ないと思つたら）……避難しなきゃよお。もう、先、先かん（早く行動しない）と……もう……間に合わないもんね。（水が）来たときはもう……（水が）流れてくりや、もう……ぞおつとくる（ゾーっとする）わけだから」

——そうですよな。

田平さん「その前、みんな気をつけてね。避難してね。

大雨にね……」

石田さん「私はね、お母さんにね……お母さんにね、雨がちよつとおうちから、あれして、雨がちよつと（量が多いから）、『お母さん、ちよつと雨がおかしいねえ』つち言つたら、『いつもこれぐらいの雨じゃかな』って言われたの。ほーで、その何分もせんうちな、『早う降り

てきつ！（早く降りてきて！）』って言つてさあ、お母さんが……。もう、そんなときにや、もう……」

田平さん「道路沿いの……」

石田さん「水を汲みや来よつた（水を汲もうとした）けど。バケツ持っせ（バケツを持って）こう汲んだあけどさ、『お母さん、後ろからも水が流れて、タンズは流れ、あ、流れてきますよ』って言うたの（笑）……あーで（それで）……慌てて、お母さんの上っせあげた（二階に上げた）けど……あー……うち（の近く）にあら（あの）、病院の……（あそこ）やら、タイヨーやらさ、もう水が浮いてきて品物が浮いてきて……」

——品物、浮いてきたんですか。

石田さん「酷かつたよあれは。……も、第一、川がね……」

田平さん「何をすればよかつたかちゅう……」

石田さん「崩れたからほら、橋が、橋が崩れたからあげん（ああいう風に）なつたのよね。あいがなれば（あれがなければ）ねえ……ちつとはあれ（少しは抑えられた）じゃなかつたけど。今は深くこうきれいして、きれい

いにしてくいやつたから（くれているから）。

田平さん「ちゃんとしているから、心配はいらないと思う」

石田さん「今はね」

——そうなんですな。

田平さん「その前は浅かつたから……」

石田さん「うん……浅かつたし……あーねえ……橋がほら、崩れたから、第一。伊敷のあつちからねえ、橋が崩れたからねえ……だんだんほら、もう西田（の橋）も壊れたし、高麗橋も壊れたし、もうあらゆるこの橋がほら、つて……もう……水が、雨と水とごつちやんして……こう、市内の方にね、きたんじやないかなつて思つちゅう……」

田平さん「……とにかく、もう……」

石田さん「あれ（の）経験は若い人にはわからんねえ……」

田平さん「自然の力はすごい……それに限る。……何回も……ね、大雨とかよお……あ……」

おかしいねえ、と思つたときにはとにかく……自分で判

断して逃げ……ねえ、高いところに行くか……」

——避難、避難ですね……

田平さん「避難だよ、安全なところに行こうかつちゅう……大事なのは。あとからねえ、(水が)来てからはね……も……どうしようもないんだから……その、フッフ……」

——そうですね、怖いですね

石田さん「なんことたあねえ、こんなビルの高いのが出てくるからね」

田平さん「もう、あんたたちは絶対、そう。なんでもあんなところ(あなたがすること)は……もう……逃げることよ。ねえ……」

石田さん「ドア開けてね」

田平さん「それも、うーん。……もう、私はもう……(8・6の水害のとき)そろそろって……高校生の、甲南高校の高校生がねえ……(家の軒の)下に雨宿りしとったから……ほーで、もう(家の中に)上がらせ、うちに上げて二階、上げて……ほーで……あー……、その子ねえ……もー、電車で帰るとしとったから、あー、『(自宅に)電

話しなさい』って(言って)、……でないど、ねえ、親

が心配して(しまうから)……そうしてねえ、『(しばらくしたら)帰る』って言うから……(電話を)貸したのよ」

石田さん「私は(災害は)二度目なのよ。串木野におるとき、ちっさいときに、小学校三年の時にね、あの、ないっけ(なんだっけ)……台風におわれて(遭って)……あの、海がそばだったから、海のあい(アレ)が、船が飛ん(で)、あの中っせ(中に)、家の中っせ(家の中)へ飛ん来て(飛んできて)ね、その経験もあるんだけど。今度のの(8・6水害)は酷かったな」

——おー、そうなんですね。

石田さん「三〇年前のあれは」

田平さん「(私は水害に遭ったのが8・6水害が)初めてだから」

石田さん「……いろいろあるよ人生って」

——そうですね。凄いですね……

石田さん「また、あなたもこうして……あつ、へっへ……(聞いて)回るのも大変ね」

——そうですね。

石田さん「ウッフッフ……」

田平さん「学校のあれねえ……科目でするんだ」

——科目でします。

田平さん「ねえ、うーん……」

——貴重な経験談を……（聞かせて頂いてありがとうございます）
ざいます）

石田さん「頑張つてね」

——ありがとうございます。

「行政はなかなか来なくて」

上野原明美さん

インタビュー 山根大知

文字おこし 西牟禮隼人

「お願いします」

——八六水害のことで今回インタビューさせてもらおう
ですけど

「はい」

——その当時どういう事してました。

「どういうことってどういうことですか？」

——いやその当時その大雨が降った時に（どういう事を
していましたか？）

「結局」

——はい

「その時は、もうこんな防災とか何もなくて、テレビも
あまり言ってなくて。仕事が終わって」

——はい。

「保育園にまあ（インタビューアの友人の）お兄ちゃん
お姉ちゃんを迎えに行つて」

——はい

「家が永吉だったので、（家は）アリーナの近くなんです
けど、帰ろうと思つたら、もうなんかMBCのラジオ
でなんか中央駅（鹿児島中央駅。当時は西鹿児島駅）の
あたりが水が浸水して凄いことになってるっていう風にな
つてて。で、だんだんだんだんあのこつちの実家の方
の、（実家は）荒田なんですけど、そっちもちよつと水
が来てるよっていうのを友達から聞いて。これは大変

だつてことで。ちよつと実家が荒田なんですけど、まず荒田の実家の車をまず（水に）浸からないように、ちよつとなんか高さが低い高い低いってところがあるもんだから」

——はい

「まだまだ荒田1丁目の方はちよつと高いのでそつちに（車を）移動したんですよ」

——はい

「それでもうちよつと、もうラジオでも状態を聞くしかなかつたから。もうずつと。で、結局はもうすごいことになつてゐるつてなつて。で、結局甲突川が氾濫したんだつてことがわかつて」

——はい

「結局もう、その日は帰れなく……その夜つていうか、帰れなくて。夜中ちよつと水が引いたんですよ」

——そうなんですな。

「夜中から次の日かな？ 次の日かな？ 次の日水が引いたのね。それで行つてみたらもう家の中が、あの結局えつと床上浸水してて。タンクはもう倒れてて。もう冷蔵庫

もすぐくて。もうその辺一带なんか甲突川沿いのみーんな浸かつちゃつて」

——そうなんですな。

「そうなんですよ。だからあつち側だけだつたんです。甲突川の人たちだけ。他のところは何も（被害が）なくて。うちの会社でも（被害にあつたのは）私だけだつたんです。みんな団地の山の上に住んでたから」

——そうなんですな。

「そう。上に住んでる人たちは結局水が出ない（断水）ことが（あつた）。結局、河頭の浄水場のあの辺もやられたから」

——へー

「水害で。で、結局水道が止まつちゃつて。だから山の方の人たちは結局まあ水道が出ないだけで困つただけども。あの甲突川沿いのあの人たちが（被害が）すぐつて」

——はい

「でもうちはたまたま二階建てのおばちゃんちを借りてたもんだから。あの井戸水があつて」

——井戸水があつたんですね。

「そうそうそう。だった、お姉ちゃんだけ生まれてたんだ。うちの長女だけ、お姉ちゃん（長女）だけ生まれてたから、もうとにかくお姉ちゃんが六ヶ月で、もう菌があれだからもう洗える物ずつと洗つて。いろいろ、こう電気屋さんにおいて、『もし洗濯機とか回るんだつたらもう回してください』って（電気屋さんが言つて）。そうそうそうそうそう」

——洗わんとダメですもんね

「本当にね。その頃つて水害つてあんまりなかつたの。それから、ずーつと水害が起こつていつたから本当に始めみたいな感じで」

——やつばそうつすもんね。

「そうそう30年ぐらい前だからさ。兄ちゃん（息子）が生まれる前だから。そうすると30年ぐらい前だから。もう、その頃すぐくつて。ご近所さん水こないからうちも井戸水みんなに提供して。『いいです使つてください』つて。うちは井戸水提供して」

——そうなんですな。

「じゃないと行政もほら遅いし、来るのも」

——そうですもんね

「そう行政はなかなか来なくつて」

——はい

「それで結局なんか保険屋さんが来て『床上何センチで保険がおりる』とか、そんなのもなかなか来なかつたら」

——まあそうですもんね。

「（水害の）跡は残して、あとは洗わないと生活をやっていかなきゃいけないから。だから、もうね保険金とかも降りての結局は、やつぱりほら生活が全然元（戻らない）。畳を上げて……まず、畳を半年ぐらいは上げて生活が全然元に戻らなくて。一年以上はもう元に戻らなかつたよね」

——畳はやつば、なかなか大変ですもんね。

「それで、あの辺。それこそ永吉のあの辺は区各整理前でまだ水洗トイレじゃなかつたのよ」

——そうなんですな

「そう、すごい大変な時だったから。で、まあそう辛い

思いしましたよ。だからね、結局それから結構みんな車も浸かつちゃって。それから、8・6水害があつて結構みんな車に車両保険をかけるようになったの。それ覚えてる」

——あー対策としてですね

「そう。結局、車両保険かけてなんかみんなもう全損でもほら、もしローンが残つても、まだローンを支払わないといけない。でも、車乗れないっていう感じでほんとそれから結構ねそういう損害保険（をかけるようになった）」

——確かに金かかりますもんね

「車とかさ、そんなさ、火災保険とか、みんなそういうの保険屋がね、なんかみんなかけたような気がする。それから、本当になんか毎年のように、いろんなところで百年に一回じゃないけど水害が起つていた気が。本当初めのような気がして」

——そうなんですな

「そう凄かつたもん。もう泥は上がつててさ、ほんと水の力つてすごいんだなと思つた。タンクももう押し上

がつて、もうひっくり返つてるし、家の中もぐちゃぐちゃだつたもん」

——あーそうなんですな。なんかやつぱ映像とかで見たけど、やつぱ、もうそのままだつたんですね。

「そう水の力つてすごいんだなつて、すごい思つた、改めて」

——ああそうなんですな。

「そうなんです」

——いやー、すみません。ありがとうございます、貴重な時間を。すごい、たくさんのこと聞かせていただいてありがとうございます。

「すいませーん、じゃあよろしくお願ひしまーす」

——ありがとうございます。お疲れ様です。

「台所に鯉」

齊藤和代さん・中島幸子さん

インタビュアー 税所優斗
文字おこし 西牟禮隼人

——これで録音していきますね。えっとじゃあ何歳でしたか。8・6水害の時。

幸子さん「今から20年前でしょう(正しくは30年前)」

——あそうですか。

幸子さん「それと65(歳)ぐらい」

——じゃあ結構長生きで。

幸子さん「84(歳)」

和代さん「同じぐらい」

——すごいっすね。ずっと元気でいてください。

幸子さん「元氣ないよ」

——元氣ですよ全然。何されてるんですか?今日は

幸子さん「今日は健康教室に、そこに行くつもりなの」

——じゃ今から行くんですね

幸子さん「一時間半からですから。ちようどよかった」

——じゃ丁度いい時間で。じゃそのときどこで何をしていたんですか?

幸子さん「私の住んでるところは田上二丁目今※の※だけど、その頃は※の※だった。ちゅうところの住所がね。変電所の近く。川伝い。その下に川があるでしょう」

——ありますね

幸子さん「川のずっと上の方に。そしたらね、私のところは道路より下がってたのよね。ちよっと1Mぐらい。道路より斜めになってたの。そしたら8・6水害の水がね川から流れてきて床下浸水になったんだけど、その時はもうあんまり畳のストレスだったのね。畳はこのぐらいいからこんぐらいだったのね。ギリギリだったの。部屋(は)どうにもならなかったけど台所が低かったからちよっと台所は汚れたのね。泥でね。そしたら、そこが水が引いて片付けようとしたら川から流れた鯉が、その鯉の魚よ。その魚が下水のところにはまってね。バケツで四杯ぐらい、その鯉がね」

——それはすごいですね

和代さん「私は七丁目。私の所は高台。被害はあんまりない」

幸子さん「私のところは川沿いだったからね。町のところは大きな川があるから、そこは結構大変だったみたい。天文館のところが地下になつてるでしょう。私のところはベチャベチャにならんかったけど、部屋の畳のすれすれにまできたのね、水が。床下だったからダメなのよね。台所はこれぐらい下がってるわけね。畳の部屋とすると。だからそこはちょっとダメになつた」

———「すごいですね、鯉がすごいですね」

幸子さん「私の家の前、道路がこうあれば家がこう下がってるでしょう。ここに下水があつたのね、それに変電所の隣だから、そこにこれぐらいの鯉が水にはまつた。バケツで三つ四つぐらいこんな大きな鯉よ」

和代さん「食べたらいいのに」

幸子さん「いや、食べたいとも思わないわよ」

———「意外と食べれそうですけどね」

和代さん「怖いよねえ」

———「やつぱ怖かったですか？その時ニュースとかで結構

流れてきたんですか。結構避難とかしてる（つて）。

幸子さん「いや避難はしなかったよ。それより後に、私たちよつと水がきたことがあるのね。そんなときにね、もう部屋のギリギリで私は消防車に電話したの。水が来たらね、『ちよつとあの手伝つてもらえませんか』つて言つたらね、『お宅だけじゃない』つて言われた。言われたらね、もう絶対人に頼ることはしないつて決めたんだ。私がしようとしたら危ないんだけど」

———「じゃあ全部自分で水を運んだりとか」

幸子さん「うん、もうね怖くてね、こたつの上にいるんな食べ物のをせたのね。『畳に水が上がりそうですよ。すいません、どうにか来れませんかね』つて頼んだけど『お宅だけじゃない』つて言われた。それで呆れてねえ、二度とね頼らないと思つた。そういうところには」

———「まあ忙しそうですよね。なんか対策とかできそうですか？もう一回8・6水害とかあつたときに。」

幸子さん「今は大きな川だけど。底を取つてくださったから、もう深くなったからもう水は来ない。幅広いままだけど。結局、川は広いんだけど浅いから溢れるわけね。

でもね、今から五、六年前だね。川を工事して下さったからね」

——じゃあ結構対策とかされてるんですね

幸子さん「市から川を深くして下さったからもう水は来ないと思う」

——わかりました。ありがとうございます。

「家に帰ることができない」

松葉樹さん

インタビュアー 眞村朋希

文字おこし 西牟禮隼人

——まずは研究に、その同意していただきありがとうございます。まずです。ではさっそく質問させていただきますね。まずその頃何歳で何をしていたかってことなんですけど。

「偉い細かいね。30（歳）ぐらいですね。で、鹿児島大学で」

——このこの大学

「僕は建物を建てたりとか、管理するところにいましたので。施設部にいました。あんま知らないと思うけど」

——すいません。あんまり詳しくなくて

「大学の建物を整備したりとか、キャンパス整備をするところですよ。そこで仕事をしてました」

——2つ目ですね。その日、その起こった日は、どこで何をされていたのですか？

「事務局ってわかる？あなたの授業料とか、入学のお金を払うところがあるでしょ？白い建物があるでしょ。あそこの四階で仕事の打ち合わせをしていました」

——打ち合わせをしてる最中に（どうなりましたか）

「2、3日前か、4、5日前かわからないけど結構大雨が降って、（当日は）周りが結構『（雨が）強いよね』とか（言ったり）、周りが見えないぐらい雨が降っていて、という話だけど打ち合わせをしているから、あそっだねぐらしいしか気付いてないわけですよ。洪水とかかわかってないわけですから。ちょうど5時半から6時ぐらい」

——まあ結構夜遅め

「まあ夏場じゃないから、いや夏場だから結構陽は高い

わけですよ。そこまで夕方つて認識もないし雨が降って

いるから薄暗いねつてぐらいで。で当時テレビとかラジ
オぐらいしかないわけじゃないですか。インターネット
とかがようやく普及されたぐらいで。リアルタイムでの
あれがなかったですね。学内メールとか学内の情報では
私は打ち合わせしてるからあれだったけど4時半ぐらい
にはちよつと危険な感じで雨が降ってるから帰れる人は
帰つてくさいつてアナウンスがあつたみたいですよ
ど、当然我々のところまでは聞こえてこなかった。スマ
ホなどはもう何もないから。結局その後に誰かが冠水し
てるよとか、帰れないよねつて話をしているわけですよ」

——その日は結局

「大学に泊まった」

——結構水が溜まつて

「自分が通勤している、自分の家が吉野町つていつてこ
こから車で40分ぐらい」

——結構遠いんですね

「で、途中の（国道）3号線や（国道）10号線が浸かっ
てるわけですから帰れないんですよ」

——車進まなくなりますね

「で、帰れないもんだから、大学つて今でも何かあれば
泊まろうと思えば夏場だし雑魚寝できるじゃん。男だ
しつてどこもあるんだけど。例えば学習交流プラザだつ
て極端な話床で寝るような感じじゃない。停電はしてな
かつたんで。で結局大学にその日は泊まつて次の日も観
察したけど、私は次の日も帰れなくて次の日とか……2
泊したのか。で三泊目に帰れたつて感じですよ」

——二泊目の、まず一泊泊まつてその次の日のご飯つて
のは

「たしかコンビニかどつかで（買って）食べられた記憶
はあるので、食べました」

——2日目から水が引いてたつて感じですか。一泊され
た後にコンビニに行かれたつて事ですか。

「コンビニかスーパー（マーケット）に行ったかはつき
り憶えていないんですけど、とりあえず買って食べた。
覚えがあるね。停電もしてないし。まあこの前話したけ
どさ大学基本的に井戸水使っているので電気がきてたら
水は出る。なので水にも困らない。電気にも困らない。

それでまだ周りも皆さんが状況が把握できてない時だから食料が急激になくなる事も無いって状態だったよね」

「じゃあ次の質問にいかしていただきます。どのような状況が変化したか。」

「水が引いて？」

「あ水が引いて、あ、水が溜まって（どちらの状況か聞きたいのか。）」

「ここキャンパス水が溜まって無いですよ。このキャンパスはね多分1メートルか2メートルぐらい高く、ちよほど高麗橋かな？あそこ近くまでは浸かってたので共研公園あたりは浸かってましたね。ここは全然冠水はしてないですね」

「キャンパスはセーフだったんですね。」

「はいセーフだった。まああとはいつ帰れるかどうかってというのが1番の心配事でした」

「自分結構てつきりキャンパスも貯まってるって思ってたて」

「キャンパス自体は浸かってないですね」

「じゃあどのように行動したのですか」

「結構、情報を仕入れるのがテレビとかラジオしかなくて」

「スマホがないときついですね。」

「そうですね周りと共に（情報）をしながら。かといってキャンパス自体は大きな被害がないわけじゃないですか。あんどき困ったのは上水が足りないってこと。井戸水はですすけど鹿児島市が供給している水は出ない。一部の先生方は困ったみたいだけど一応大学の水は、井戸水は消毒をしているし基準値も取ってあるので、そこでのこのこうのはいないけど気持的に飲みたくない人っているじゃないですか。そういう人たちはちよつと困ったのかなって感じですね。あとは大雨が降っても大学の建物としての被害はほとんどなかったんじゃないかな。大雨の被害だから。昨日今日も大雨降ったよね」

「そうですね」

「ほとんど被害ないでしょう。若干水が少し貯まってる、すぐ捌けて。後には残らないってぐらいなので。当時もそんな感じですよね」

「昨日今日の雨と比べてもつと酷かったって感じですか」

ね。

「ひどかったような気がしますね。ちよつと白くて前が見えないみたいだね。そんな感じでしたね。まあ行動つていっても、自分の家にいつ帰れるんだろうかっていうことと、私も施設系だったので建物の被害はまだ当時は皆さんに協力貰わないと全数把握できないので。見た感じでは壊れたりとかはなかったかなって。今後の話としては、上司が来てからかと。人命は大学の外に帰っちゃった人たちはどうなったかという話になっちゃうから。大学の中としては人命に何もないと想定していましたけど。で、いったん帰って。翌日又来て、被害状況の再確認をしたというところですね」

——次の質問です。どのように(災害)を感じたか。ちよつとセンシティブな話ですけど

「30年ぐらい前の話だから(憶えていない)。今は結構まあ情報がいっぱいあるじゃないですか。緊急地震速報とか、大雨(警報とか)」

——昨日とかもすごかったですね。

「あとはね当たり前かもしれないけど、例えば津波があつ

た時に何メートルまでとかよく電信柱に書いてありますね。まあ、そういう危険に対する意識が高まった。あと、河川工事。新川というキャンパスの近くの川も結構広く河川工事して。あれは昔は結構氾濫していたが今は少なくなつた。それから、本当は面白くないんだけど甲突川、あそこに石橋がかかっている、あれが結局、土木がひっかかって、そこがまた崩れてしまった洪水の元に繋がるって、あれも移転された。景観的にはよろしくないと思っていますが」

——そうかもですね

「河川工事も済んだ。避難意識も凄く高まった。というところでまあ良くなってきたなあとは思ってますけど。ただやはり異常気象が多くなつてきたので各自が情報を持って対応することが常日頃とできればいいのかなって思ってますけど。はい、そんな感じですよ」

——じゃあ最後の質問です。水害を振り返ってどうすれば良かったのかな

「どうすれば……難しいですね。ここにいたからね。本当まさか僕が仕事の関係で打ち合わせの5時半6時長引

いてたと。帰ってないでしょ。帰った方々で被害に遭った方が多くてその方は5時前に出てるわけですよ。で結局あの冠水して洪水になって車が詰まって渋滞で動けないんですよ。それで危険な状態になって車を降りて命からがら近くの建物の高いところに逃げたとは聞いてますけど。まあ昔は情報がなかった、っていうこともあったんだろうけど、まあ今だったら自分の目でみたりとか人に流されないってのは大事かなあと。あと、この場所が浸かるのか浸からないのかなど。だから逆に急いであわてないってのは大事かな。状況を見て判断してって方が……命のほうが大切ですからね」

——そうですね、やっぱり命が一番大事ですからね。

「例えば、よくあるけど、おじいさんが台風とかの時に田んぼ見に行つて流されちゃったりとか。そういうようなことは考えなきゃいけないのかなと思つてます。いいですか？」

——逆に水害が起きてここの大学におられた方のほうが安全だったということですか？

「命的にはね。あとは家族とか、そつちの方を皆さん心

配してたと思いますけどね。それとあとその後の経過としては貯留場つて知ってる？水を浄化するところ。あれが洪水で破壊されたもんだから一ヶ月か二ヶ月近く水が出ないんですよ」

——それぐらいでないんですね

「流水が流れ込んでるとかいろいろしちゃったもんから浄水所ぶつ壊れてしまつて、やはり結構断水になつて皆さん困つたのかなど。大学としては井戸水使つてますから場所を指定してご自由にどうぞつて感じにしましたけど当時は。やっぱりまあそういうことが、地震じゃないけどある程度水を確保してたのがいいのかなと。まあそこはね、皆さんのいろいろな災害のグッズもあるし」

——自然災害恐ろしいですね

「そんな感じでした」

——ありがとうございます。じゃあ失礼しますね。

「怖かったよね、考えたら」

渡辺秀一さん・渡辺悦子さん

インタビュアー 福田祐真

文字おこし 福田祐真

秀一さん「当時40歳ぐらいっけ？」

悦子さん「40ぐらいだよな」

秀一さん「40前後かな。まだ若いバリバリのころで」

悦子さん「30年前」

秀一さん「何時から雨が降ってた？」

悦子さん「もうずーっと、あの…」

秀一さん「ずっと降ってたんだ」

悦子さん「ずーっと何時からじゃなくって、もう毎日ずつ

と雨が続いたの。7月の1カ月、2カ月」

秀一さん「うん、雨がずつと続いているねつちゅうのはあつ

たんよね。そして、急な土砂降りが来たんじゃない？」

悦子さん「土砂降りのなのはずつと続いていた」

秀一さん「そしてすごい雨で」

悦子さん「本当雨すごいねって」

秀一さん「そしたら川が氾濫してね」

悦子さん「あつ、その甲突川（※1）」

秀一さん「そのうちの近くには稲荷川（※2）っていうのがあるんだけど、ここはもう甲突川よね。この辺は。うのがあるんですけど、ここはもう甲突川よね。この辺は。んで、稲荷川っていうと、玉籠高校（鹿児島市池之上町）

のあの辺のあたりに流れてる川なんだけど、あそこが氾

濫して、甲突川ももちろん氾濫して、そして道路が通れ

なくなつて、車で動いてたんだけど、車がもう使えなく

なつて、うちはお家に帰れなかつたつて。（笑）ほいで、

玉籠、今玉籠高校の近くまでは行けるの、車がね。ほいで

でそれから先はがけ崩れがあつたり」

悦子さん「とても水がいつぱい溜まつて」

秀一さん「水が溜まつてね。もう冠水して水はあそこの

辺が全然もう上に上がる、上の方だから家が上がれない

っていうことで、そしてもう車も全然使えないから、

動くんだけど、もう全然上に上がっちゃいけないもんだ

から、確か玉籠高校の近くのもう道路にね、車を停めて、

とりあえず帰ろうかあととして、帰らないと……」

悦子さん「連絡がやっと取れてね」

秀一さん「連絡が取れ取れなかったのよね。それで、車で、確か私、行方不明者になったんじゃないかねえかな、家の人が帰ってこないということまで」

悦子さん「NHKの」

秀一さん「うん、ラジオで聞いたような気がする」

悦子さん「あのね、ばあちゃんが（ラジオに）名前出してたみたい。行方不明者で」

秀一さん「どうなんだ、（ラジオは）聞こえてるけど電話がもう使えないし、もちろん携帯なんてないし、その頃は。ほいで」

悦子さん「私はおばあちゃんとは連絡が取れて」

秀一さん「電話で連絡とって大丈夫だようちゅうことも言えないし、とりあえずもう帰ってから無事な顔を見せようちゅうことだけで帰ろうと言って、そしたらまたまこっちも仕事で、その近くにいたのよね。そしたら偶然会って」

悦子さん「偶然会ったんじゃない、お母さんが」

秀一さん「あっ」

悦子さん「電話をして」

秀一さん「そのときは電話した。公衆電話並んで電話したんだよね」

悦子さん「並んで電話した。公衆電話で」

秀一さん「で私に、私がおの辺にいるちゅうことやったのかな。でそこで会って『ああ』って言って、でも帰れずに、で歩いて帰った」

悦子さん「私は、稲荷川がもう、こう流れるのを公園から見た、公園にみんな避難っていうか、あの周りに」

秀一さん「あの近くの公園にね」

悦子さん「うん、あの公園、ちよつと高めに行った公園に、あのー上がっていった避難みたいにしてたから、私もどこ行こうと思って人がいっぱいいるところに行こうと思って、清水小学校か、あそこにはもう入れないくらい人がいて、清水だっけ？」

秀一さん「うん、うん」

悦子さん「でも絶対」

秀一さん「あ、大龍じゃない？」

悦子さん「大龍小学校（鹿児島市大竜町）」

秀一さん「大龍小学校」

悦子さん「人が入れないぐらいいっぱいいいて、ああどうしようと思ひながら、公園の方があつて、そこに行つたらいっぱい人が避難してて、で、そこから濁流が見えるの。あのー何だっけ、稲荷川が氾濫して、2階まで、家の2階まで水が流れてるから」

秀一さん「うーん、来てたよ。すごかったよ」

悦子さん『あそこ家だったんだよ、道路だったんだよ』つておじさんたちが教えてくれて、『ああ、そうなんですか』つて。『あそこも普通の道路だったんだよ』とか言われて、そこがもう川みたいに流れてて、すごかった。びつくりした」

秀一さん「それから、8時、夜の8時か9時頃かな。ちよつと水が引いてきたから、今のうち帰ろうと思つて歩いてね。このままでもいけないから。がけ崩れがあつたの、途中で、帰る道だよ。そして車も通行止めになつてたから、それをよけながら帰り着いて、そしてうちの近くに昔からあるね太鼓橋（※3）ちゅうのがあるんだけど、その橋が流れてね。で、ぐるーつと回つて帰つて」

悦子さん「歩いてね」

秀一さん「やつと帰り着いて、それから無事で無事だったちゅうことで」

悦子さん「で、帰りついて2時か3時夜中ね」

秀一さん「うん、もう夜中だね。もう」

悦子さん「んで、もう泥だらけになつてるから、もう膝まで水浸かつたりして。だからそれで私シャワー浴びようと思つて、シャワーは出て」

秀一さん「シャワー出たんだ」

悦子さん「でも次の何時間後かには止まつたね。水道、電気も止まつて」

秀一さん「電気は止まつてたね」

———「ずっと電気は止まつてたんですか？」

秀一さん「電気は止まつてたみたいね。うん、止まつてた」
悦子さん「うん、停電がね1週間ぐらい続いたのかな。もう最悪だった。そして、水も断水もあつて、ずっと遠く温泉まで行つたんだよ」

秀一さん「でも、谷山（現在の鹿児島中央駅より8kmほど南）の方面はそんななかつたみたいね。雨降つてな

かった、市内でも吉野（現在の鹿兒島中央より6KMほど北東）とかあつちの方面とかまあ街中やね、その辺も全部水に浸かったから」

悦子さん「停電とあれで大変だった」

秀一さん「すごかって、帰って、明るる日、また起きて、車を今度は」

悦子さん「そして真夏でしょう。梅雨明けよねちようど今ぐらい（7月上旬）からもうこの時期ごろからずっと雨降ってたわけだから、7月の、8月6日だから、まあとにかく暑くて暑くて、停電でしょう。1週間ぐらい停電なったのかなあ。暑いし、水は出ないし、大変だった」

——ちようどその大雨がすごかった時間帯はどこにいらつしやつたんですか？

秀一さん「仕事。普通に仕事。もうずっと雨が続けてたからね。普通に仕事はできてたの、まだね。車で運転してね、車を使うような仕事もしてたから。それで途中で冠水しだしたつちゆうような、道路がね」

——夕方ぐらいですかね。

秀一さん「うん、そう、夕方やね。それでもう冠水して

これは早く帰った方がいいかなと思って」

悦子さん「山形屋（百貨店）が結局閉めたのが6時だったんだもんね。あのデパートが」

——じゃあ通常よりもその日は早く？

悦子さん「早く、通常より早く閉めたんだけど、もう遅かったのね。その時点でもうその時点でバスもめちゃくちやも時間もやつぱめちやくちやだし。やつぱそれからはもう、デパートの山形屋なんかも、もうそんな台風とか、なんかいろいろあるときは、必ず早め早めで閉めたりするようになった」

秀一さん「それは教訓になったね」

悦子さん「うん、教訓になった」

秀一さん「バス動いてたんだろうか？」

悦子さん「バスは動いてたの。動いてたけど、時間もまあ例えば7時20分の時刻なのにもう全然そんなのも関係なく、もう8時過ぎちゃって」

秀一さん「ああもう遅れてたんだ」

悦子さん「そしてそのバス乗ってたら、いっぱい乗ってもう入口まであふれてるから乗れないし、で結局私は

そこから、いずろ（鹿児島市天文館周辺）から、歩いたんだよね。鼓川（町）まで。膝まで浸かりながらね。冷たい」

——じゃあまだ時間帯的には、その会社に出勤されてる方が帰る時間帯、より前だった？

秀一さん「うん、うん、うん」

——にはもう止まってた？

悦子さん「ひどくなったのはね」

秀一さん「うん、そうだよ。まだそこまでみんなそんなにあれはなかったからね」

——じゃあ帰ろうと思った人たちがなかなか帰れない感じだった？

悦子さん「そうそう」

秀一さん「うん、『もう帰れないよ』ちゅうもう噂がね」

悦子さん「帰れなくなった」

秀一さん「あそこ甲突川が氾濫したよっていうことを聞いて、ああそれは大変、あの大きな川が氾濫したら大変なこと」

悦子さん「バス停立ってたら、あの一、立ってるおばさ

んたちが草牟田（現在の鹿児島中央駅から2.5KMほど北）のあつちは冷蔵庫が流れてるらしいよとか」

秀一さん「あー、なんかもう」

悦子さん「いろんなこと言ってたから、えーすごいことなってるだと思って立ち止まってただけ」

秀一さん「結局、（国道）3号線やね。こう伊敷（鹿児島中央駅から5kmほど北）の方に向かう大きな国道が、あれがもう全部川みたいになって」

悦子さん「甲突川が」

秀一さん「もうあの辺だったらもう車ももちろん走れないし。水没した車も…」

悦子さん「（鹿児島）中央駅もひどかったんじゃないの？中央駅のあたりも」

秀一さん「中央駅ね。まあ結局この辺もね」

——したらもう大きい通りが、ことごとく動かなかった感じなんですかね？

秀一さん「そうそう、そうそう」

悦子さん「そうそう。それでもバスは動いてたんだよね。その時間帯でも。もう後から、動いてるけど、途中でも

う行けなくなってるの」

秀一さん「止まったりしてね」

悦子さん「あの結局、冠水あっちこっちしてて、途中まではバスいくけども途中からうちの吉野の方も上がれないって。トンネルのあっちの方も」

秀一さん「天文館もすごかったでしょ」

悦子さん「天文館も。天文館は、だからホテルとかああいう所で、あのー避難、おうち帰れなくて避難した人たち、あのーそこで休ませてもらったりとか。山形屋も、社員食堂とかで帰れなくなってお客さんとか従業員が一晩夜を明かしたって。そういうのも。だけど一軒だけ〇〇っていうホテルが」

秀一さん「まあそれは言わなくていいよ(笑)。その、入れなかった、入れなかったホテルもあった」

悦子さん「他のホテルでひとつ」

秀一さん「後で叩かれたみたい」

悦子さん「結局、みんなもどうしようもなくなってるんだよね。あっちこちで立ち往生してるのに、一つのホテルだけが、あのー、ピシャッと閉めて、あの一切入れな

かったっていう」

秀一さん「まあそういうとこやからね。あるんだよね。そういうのはね後々でね話が出てくるって」

悦子さん「まあそれはそれで。何か：」

秀一さん「まあそこもそんなことをしたら大変なことになるもんね。家だったりしたらね」

——歩いて帰られるときは、水位はどのぐらいで：

秀一さん「それ、それぐらいだったのかな」

——膝下くらい？

悦子さん「私は山形屋から鼓川(町)までは膝ぐらい」

——膝くらい。

悦子さん「もう膝にガツツリ。だから、ズボンはいてたから、靴も全部もう駄目だったもんね。膝まで」

——膝まで浸かるくらい。

秀一さん「みんなそうして歩いてたんじゃない？」

悦子さん「みんな歩いてるから怖くはないのよね。もう、あの、暗いんだけど、みんないっばい歩いてるから、怖いというのとはなかった」

——もうじゃあその夜はもう電気も消えて、割と暗い状

態で？

秀一さん「うんうん」

悦子さん「真つ暗な中歩いて」

秀一さん「うちの家としては、別にそんなに大きな被害は受けてなくてね。2階建てに寝れたもんね。もう本当にちよつと疲れたのもあつてよく寝たような気がする。やつと家に帰り着いたというような」

——安心感ですな

秀一さん「うん」

悦子さん「で、たまたま家に帰り着いた2時過ぎだったと思うけど」

秀一さん「夜中ね」

悦子さん「シャワーが使えたのが幸いだった。もうその次の日から断水だし、お天気もあれだしシャワーが使えないし、本当それだけは良かったと思つたもんね。帰り着いてすぐ、シャワー浴びれたことはね。よかつたほん」とに

——さっきのその水（帰りに足が漬かっていた水）は、なんていうんですか、普通の雨水だったんですか？それ

とも土砂がもう？

秀一さん「もう土砂も混ざつてたのかな」

悦子さん「だから病気が結構出たんじゃないかな。皮膚病なんかがね」

秀一さん「川の水ばかりじゃないもんね。下水とかいろんなものも流れたんじゃないかな。そんなこと言つてもね、死ぬよりは……」

——本当に命が大事

秀一さん「命が大事だからみんな素足で帰つたんだろうけど」

——その水が引くのにどれぐらいかかったんですか？

秀一さん「一晩、俺らが家にいる頃に引いたんじゃないか？ たつけ？そして明くる朝は帰れた、引いてたから、もう、泊まつてね。その夜中に結局川は収まつてきたのかな」
悦子さん「あのね、磯（鹿児島中央駅から5KMほど北東）わかる？あつち磯」

——はい。あの仙巖園（鹿児島市吉野町）とかの……

悦子さん「あ、そうそう。あそこのちよつと先が土砂崩れがあつたのよね」

秀一さん「がけ崩れがあったとこね」

——竜ヶ水（鹿児島中央駅から10 kmほど北東）？

秀一さん「あ、そうそうそう。あそこね」

悦子さん「あそこがねすごいことに。んで、私がたまたま次の日休みだったんでね、どうなってんだろうと思って、テレビついたのかな？いや、次の次の日くらいかな休みを取ってる。あんまり言わないからあれ？と思って。何かしたんだよね。テレビはついたのかな？停電だったんだよね」

秀一さん「停電」

悦子さん「うちの〇〇（自宅住所）のお家のちよつと手前のバス停までは電気が何日か後に来たけど、そつから先のうちあたりがまだ停電のまま、なんかだったね。もう目と鼻の先なのにこつからとこつからで点いて、電気が点くところと点いてないところと」

秀一さん「もうちよつとのことだね」

悦子さん「うん。もうほんの少しだったよね」

秀一さん「停電、停電なってるってことで全然関係ないところもあつたみたいだけどね」

悦子さん「まあでも竜ヶ水のあれは……」

秀一さん「まあでも結局一番きつかったのは、通信手段だね。ポケッットベルって知ってる？」

——聞いたことはありません

秀一さん「うん。ポケベルしかない時代じゃないかな。もうPHSもないし、携帯ももちろんないし、あとは公衆電話は普通にあつたからね、あつちこつちに。ポケベルで、連絡があるときはそこにポケベルに電話したら、それをピッピッってなつたら、何だつたらうか、用事はなんだろうかって言つて公衆電話から（電話）するつちゅう時代。でもその頃も鳴つてたんだらうけど公衆電話はずらつと人が100人くらい並んで、で、何の役にも立つてない、ポケベルなんてね。どこ行つても。ね。そんな時代だったからまあ一番……」

——じゃあ安否確認とかがやつぱり難しかったということですか？

秀一さん「そうそう。今はできるだらうけどね、こういうあれで（スマートフォン）。あの頃はそういうことを知らせるようにも知らせる手段がなかったもんね。」

『あつ、無事だよ』 ちちゅうことも言いようもない。電話が使えないからね。使えるんだけど並んでいて、人が。ずっとね……』

悦子さん「NHKの行方不明者ので名前を」

秀一さん「そういう人ほんと多かったみたい。連絡が取れない人は。帰るにも帰れないからね、連絡しようもないし。まあ大変な」

——じゃあ向こう側は割と本当大変だったんですね。市内でも、市街地側というか。繁華街側というか

秀一さん「そうね。あっちの方がすごかったね。もう竜ヶ水の辺りも含めてね。中央駅の、まあそうやな、平田橋（※4）から先やな。向こうだな。天文館かな」

——なんかやつぱり人が多いところでそういうのが起ると割と混乱しがちだと思っんですけど状況としてはどうだったんですか？

秀一さん「そこまで、もう、あの状況がわかんないっていうのが一つあるのと、こっだけじゃない、もう、鹿児島中そうなんじゃないかなっていうのが一つ。もうそこまでパニックもみんななってる様子は、あとは『すぐ

い雨だね、あれだね』って、あとは川氾濫したっていうのはこんなふうになるんだちちゅうことはそれぐらいの。まあでもあちこちで起こってることだろうと思ってたんだけど」

悦子さん「なんかさ、人がいっぱいいたから、何かそうパニックになるわけでもないし、もう真つ暗なだけで、怖いというのもないし、みんな一緒にいるから」

秀一さん「それはね1人2人で動いてたらそりゃ怖いかも知れんけどね」

——逆に人がいるからっていう感じ？

秀一さん「そうそうそう」

悦子さん「知らない人たちだけど、おじさんたちがあの『あそこ道路だったんだよ』とかいろいろ公園で教えてくれて、すごい濁流ををずっと見て……」

秀一さん「結局みんな帰るにも帰れずにそこでたむろしてたんだよね。帰る道のところで。冠水してたからね」
悦子さん「その公園に避難している人たちはもう帰るに帰れない人たちだったんだと思う」

秀一さん「だからそのうち誰かが『通れるみたいよー』

とか何とか言うたんじゃないかな」

悦子さん「言ったんだよね」

秀一さん「だから帰ったみたい」

悦子さん「歩いたけど、あっちこっち崩れてたね」

秀一さん「崩れてたよね。怖かったよね。考えたら。がけ崩れが」

——がけ崩れが？

秀一さん「うん」

——建物の倒壊とかではなくて？

秀一さん「建物の倒壊……」

悦子さん「建物の倒壊はわかんなかったけど、結局、道路のこっちの山があるからその山が崩れて、もうあっちこっちだったよね。小さくても……」

秀一さん「もう歩いて帰るしかない。今考えたら怖いよね、もっと大きながけ崩れがあった」

悦子さん「ほっとしたもん。帰り着いて」

秀一さん「よう帰り着いた」

——じゃあもう元の状態に戻るには時間がかかった感じ？

秀一さん「かかったねー」

悦子さん「結構かかったかもね」

秀一さん「うん。それはそう。もう車で帰れるように、1週間以上かかったんじゃないかな。家に帰れるようになったのは。道路がまず通れないから。で、川が流れて、そこも、あれ、使ってた道なんだけど、それはもう橋はもう1年ぐらいかかるとるかね。直すのは。普通の昔から伝わる、結構……」

悦子さん「有名な橋だった。太鼓橋って言って」

秀一さん「昔の眼鏡橋みたいなあんなので作って、それがあつという間になくなって」

悦子さん「有名な橋だった。あれが壊れて。川が増水して……うちは、あの川の付近の人たちは、もう家が浸水したって、うちはそれよりちよつと坂になったちよつと上だったから、別に何にもなかった。ただ、ちよつと下った太鼓橋のその川の付近のところは全部……」

秀一さん「みんなきつかっただろうね」

悦子さん「大変だったみたい」

——救急とか消防とかも機能してたんですか？機能して

たというか

秀一さん「してたかな」

悦子さん「してたかもしれないけど……」

秀一さん「まあ、してたかもしれないけど、まあ、消防車いれたのかもしれないね。まあ、通行、ああ、もちろんあの冠水してるところには立ってたよ。消防車の人たちが、通れませんかと言ってたね、そういう所にも捕まってる、全然その動きはならんと思う（全然動けなかったと思う）」

悦子さん「でも、竜ヶ水が一番印象に残ってた……」

秀一さん「まあそうね。後々ね、わかったら何でも、列車が流れちゃうんだもんね」

悦子さん「漁船の人たち、あの漁師の方たちがあの、こう、避難をさせるのに、運んだりしたみたいだもんね。あの竜ヶ水に立ち往生された人達をね。でもほんと汽車のまま海に押し流されちゃって、見たときはもうほんとにびっくりしたもんね。列車もだもんね」

秀一さん「列車も流れた」

悦子さん「列車ももうそこで止まったのがそのまま」

——何かあそこ結構（道路が）一車線ずつとかで狭かったりするじゃないですか

秀一さん「うんうん」

悦子さん「うんうん」

——それで、すぐこっちに崖が、崖というかがあったりして……

秀一さん「病院があるところね」

悦子さん「あそこはだから雨降りの日通るのはやっぱりちょっと怖い」

秀一さん「今も止めるんじゃない？大きな雨が降ったときは。国道止めるはずだよ。10号線は」

——へえー、そうなんですな。

悦子さん「電車も、汽車っていうかあれも。セーブするもんね」

秀一さん「それこそ何ミリ以上降ったら、国道止める」

——そうなんですな

秀一さん「うん。もう、前のあれがあるからね。だから、また崩れる可能性もあるっていうことも……」

——でも割とその始良方面（※5）に行くには主要道路

じゃないですか？

秀一さん「メインだよね」

悦子さん「そこなのよね」

秀一さん「高速を使うか、裏道を使うか」

悦子さん「裏道も山だもんね。裏道あるけど、あそこも山ばっかりだし」

秀一さん「(国道) 10号線だもんね」

——なんか夕方とかもすごく渋滞している印象なんですけど

秀一さん「うん。渋滞するあそこは」

悦子さん「みたい。だから……」

秀一さん「あの時も結構いたんだろうね車もね。時間は、時間帯からいえばみんな帰る人とかそんな人たちがいっぱいいたんだろうね。そんな人が巻き込まれた人がいたかもね」

悦子さん「やつぱ友達が1本早いので、帰ってたら押し流された電車に乗ったかもしれない。でもそれに乗らないうで、国分(※6)の子なんだけど、友達の家泊まったのかな、それか何かで大丈夫だったみたい。そしたら

よかったねあの電車乗ってなくて。本当みんな大変な思いしてね」

——なんか本当に最近、何十年に一度雨が毎年のようにどこかであるじゃないですか？なので何かそういうのに対して対策というか、何か言えることってありますか？

秀一さん「うーん、あそこ、あの後ね、うちの近所の人たちもみんな集まって、市の担当者の人が来たときかな、結局そういう災害、下のほうでいるんな災害があつたでしょ、うちの近くのね、家が壊れてどうのこうの、そのときの説明、住民説明会みたいな市の人が来たつげ。また今後こんなことはあつたら、ん、まあ、どんな対策をするのかというようなとき、市の人なんか、『いや、あれは、100年に一度の災害ですから』って、しかし、100年に一度またあるかもしれんね、明日あつても100年に一度つて言えば、ね。いやしかし、そしたらみんなものすごくあれしてね、そんな簡単なあれで、何か川を大きくしてね橋が流れないように、ちゃんと丈夫の橋を架けるとかね。なんかそんなね。100年一度の災害ですからって、今違うような感じがするもんね」

悦子さん「今はもうすごいもんね。いつも」

秀一さん「100年に一度が本当に50年に一度ぐらいになってるんじゃないかな」

悦子さん「だって災害があつたところの人たちって、『こんなの初めてだ』って大概仰るもんね。テレビとかで」

秀一さん「あれもそうだもんね、もう本当に初めてだもんね。こんなのは、災害は。甲突川もちよろちよろと氾濫したかもしれないのよね。ちよこつとぐらい水かさが増して。しかしあれはもう完全にその断じやなかつたもんね。結局上の住宅、いろんなところは住んでる人が上の方にもいるからその人これ山からも水が全部甲突川に入り込んだんじゃないかな。狭かつたんじゃないかな、あの当時」

悦子さん「うん。だから上の方の河川工事があつたみたいね、甲突川は、あの上流の方を広く工事をしたみたいね。それからそんな大きな災害はないんじゃないの？甲突川は。うん。この2、3日前の新聞で載ってたのが、稲荷川か」

秀一さん「うん」

悦子さん「家のあの稲荷川が、手付かずなんだって。早くしてほしい」

—— 当時から？

悦子さん「うん。当時から」

—— 変わっていない？

悦子さん『『するする』って言つて、地権者とのなんかいろいろ絡みがあつて、その河川工事ができてないみたい。新川（※7）も甲突川も』

秀一さん「ああそうね」

悦子さん「上流の方を工事をして広くして、なんかしてるみたい。だから大きな災害が今のところ起きない。だけど、稲荷川、私だけ上から見た稲荷川は、そこまで来てたんだって。昨日か一昨日の新聞に載ってたかな。んで、その周りに住んでる人は『早く、もうあれから何年経つか』って言つて、話し合いをするっていう風になつてたんだけど、地権者がやっぱりいるんだってね。こう、いろんな」

秀一さん「ああ、土地のね」

悦子さん「あの土地をね広げる。その地権者が反対した

りとか、いろいろあつて手つかずつて言つてた」

——何かその災害以降で対策とか、個人でやられてるご
ととかあるんですか？

秀一さん「んー、そこまではないけど、まあ、気にはす
るようになったよね」

悦子さん「避難先とか」

秀一さん「うん。もしこんなあつたらつて。それで、雨が、
きょうはちよつと雨が降るねちゆうような感じで、気は
はなつてきだしたよね。雨なんかにもね。そんなに昔は
雨でつて、なるつていうことはなかつたけどね。台風以
外じゃあ。まあ雨も怖いもんだなあと思つて」

——じゃあ、家の立地としてはもうそんなにその浸水と
かの心配がないからつて感じだつたんですかね？

秀一さん「うん、そうね。うちはね」

悦子さん「そうね。うん。まあ、うちは何も無いもんね。
山が崩れるとか」

秀一さん「山が崩れるつちゆう近くでもない」

悦子さん「川も下の方だから、あの、横の道路を川が下
に流れていつちやうから、川を……」

秀一さん「そういう被害を受けた人はやっぱり全然また
違つたろうしね」

悦子さん「子供が小っちゃい頃は、あの、側溝があふれ
るから、学校へ行くときに、それはちよつと気になつた
けどね。あの、どうしても雨だと、あの、側溝のほら、
あれ、排水がうまくできなくてね」

秀一さん「追いつかずにね」

悦子さん「すつごく溢れてたね。あんな綺麗だつたけど」
——鹿児島は結構、その、水害もですけど、桜島もある
じゃないですか。

秀一さん「うんうん」

悦子さん「うん」

——そういう点で割と何か心配事が多いのかなと思つた
りするんですけど。

秀一さん「うーん」

悦子さん「うん。桜島はね」

秀一さん「慣れつこになつたつちゆうかね、桜島、まあ
桜島怖いんだもんね」

悦子さん「まあでも、桜島に住みたいとは思わないもん

ね」

秀一さん「まあそう…」

悦子さん「住んでる人もいるけどやっぱり怖いよね」

秀一さん「怖いよね。そこまでもう、この間の8・6水害に比べたらね、桜島なんてそこまではもう。大正のときにまあ大噴火したけど、まあうちにはちよつとだいたいぶ離れてるから桜島から、ああいう風になってもそこも直接の被害はないんだろうけど。桜島の人はまた別だろうけど。まあしかし、雨とかああいうのは怖いよなあ」

悦子さん「生まれてないんだもんね？」

——あつ、そうです。

悦子さん「8・6水害のときは」

——そうです。

悦子さん「うん、30年前だから」

秀一さん「(笑い) ああ、そうか」

悦子さん「8・6水害があつて、そして9月の13日には台風(※8)、大きな台風が来た」

——同じ年のですか？

悦子さん「そう」

——えー

悦子さん「だから今年の、まあ、8月、8・6水害があつたとしたら、その次の月の9月13日、忘れもしない、大きな台風が来て、まだほら片付けも」

秀一さん「うーん」

悦子さん「きちんとなくなつてないうちに台風が、大きな台風が来て、2次災害みたいになつてね」

——そうなんですネ。

秀一さん「自然てやね、怖いんだよね」

悦子さん「なんか今は年寄りが多いでしょう。もう鹿児島は、1位か2位ぐらいなんじゃない？年寄りが多いあれで」

——えー

悦子さん「だから、災害が起きたらね、もう本当大変かも。片付けとか」

——昨日もあれでしたね、避難勧告(※9)みたいなので。

秀一さん「うん。出たね」

——出てましたよね。

秀一さん「なんか、ああいうの気になるよね。前を経験

してるから。うん。安全に留意するようになってあれやっただけど。だからこういうのになったとき、川が氾濫してないかつちゅうのは気になるよね」

悦子さん「やっぱり、本当に年寄りが多いもん、鹿児島は。だからね」

秀一さん「そうね」

悦子さん「逃げるって言っても本当早め早めにならないとね。あの、若者の歩く速さと、年寄りの歩く速さって違うしね。で、水の、もう、水が溢れたりしても、そのさばき方から違うと、年寄りはずぐ転ぶと思う。若者はスツスツと水の中歩いていってもね。だから、本当に早め早めに避難することをしないと……」

——「すいません、ありがとうございます。時間いただけます。」

秀一さん「こんなんで良かった？」

悦子さん「なんか参考になった？」

——「その、どういう体験をされたかっていうの体験記を聞ければよかったです……」

秀一さん「うん、我々はそういう体験してるからね」

——「そうですね。いや、なかなかやっぱりそういうのって、

秀一さん「うん、そうね」

——「遭遇するものではないので。」

秀一さん「聞いて、聞いて、ふーん、そんなあったんだっていうのとは、体験してる人はね、怖いなあって」

悦子さん「私たちはまだいいほうだったんだもんね」

秀一さん「うんうん」

悦子さん「家も別に、あのー」

秀一さん「普通にあれしてね」

悦子さん「水に浸かった訳でもないし。あの、ただ、電とあれが嫌だったけど、熱くて、もう本当に何もね、いいほうだったよね。まだ、あの、川あれ、流されたり、本当にかわいそうだった」

——「時期的にはきついですね。8月のその暑さの中。」

秀一さん「んーそう。暑いなかね。これから暑くなるっ

ちゅうときだもん」

悦子さん「だからクーラーも点けられないし……」

——「ありがとうございました。」

注釈

※1 甲突川・鹿児島市を流れる二級河川。花尾町(旧郡山町)八重山の中腹にある甲突池から始まり、市街地中心部を流れる。(鹿児島県HP 『甲突川の源流「甲突池」周辺を紹介します』より抜粋) 1993年8月6日の豪雨の際には氾濫し、市街地に大量の水が流れ込んだ。

※2 稲荷川・鹿児島市の吉田町赤峰(標高 579M)にその源を発し、鹿児島市吉野台地を貫流して市内清水町、稲荷町を経て鹿児島湾に注ぐ幹川流路延長 13.4 km、流域面積 31.82 km²の二級河川(鹿児島県HP 『稲荷川水系河川整備計画』より抜粋)。

※3 太鼓橋・鹿児島市吉野町にかつて存在した「実方太鼓橋(さねかたたいこばし)」。江戸時代に鹿児島と重富方面を結ぶ重要な道路にかかる橋として、交通上、大切な役割を持っていた。美しいアーチの橋であったが、水害により流出した(『かごしまデジタルミュージアム』より抜粋)

※4 平田橋・鹿児島県鹿児島市平之町の甲突川にかかる橋(MAPIONより抜粋)。

※5 始良・始良市は、南国鹿児島県のほぼ中央、薩摩半島と大隅半島の結末点に位置し、暖かく豊かな自然の恵みと人々の活気があふれるまち(始良市HPより抜粋)。鹿児島市内からは、海沿いの竜ヶ水などを通って行くルートと、高速道路を使って行くルートとがある。

※6 国分・鹿児島県霧島市に位置する。かつてはひとつの市として独立していたが、1市6町(国分市、溝辺町、横川町、牧園町、霧島町、隼人町、福山町)が合併して現在に至る。国分は県本土のほぼ中央部、薩摩半島と大隅半島の接点に位置し、南に波静かな錦江湾に浮かぶ桜島、北に高千穂峰をはじめとする霧島連山を仰ぎみるところ(霧島市HP 『合併前の1市6町の概要と歴史』より抜粋)。

中心気圧が低かった。

※7 新川・日置郡松元町仁田尾(にたお)付近の標高200メートル程度の山体を源に発して南東に流れ、上流部の西別府町で田上川を合わせ、鹿児島市街地を流下した後、鹿児島市三和地区において鹿児島湾に注ぐ幹川流路延長12.5km・流域面積19.12km²キロメートルの二級河川(鹿児島市HP 河川整備基本方針・河川整備計画『新川水系河川市日基本方針』より抜粋)。

※8 9月の13日には台風…平成5年台風第13号は、1993年(平成5年)9月3日に鹿児島県薩摩半島南部に上陸し、強風・大雨による大きな被害を出した台風。日本に過去上陸した台風の中では、第2室戸台風、伊勢湾台風に次いで統計開始以降3番目に上陸時の中心気圧が低かった。

※9 避難勧告…2023年7月3日、九州南部を中心に大雨となり、土砂災害警戒情報、避難指示、高齢者等避難が鹿児島市とその周辺の市区町村に対して発表された。

『8・6の雨 8・6 水害についての 55 人のインタビュー』

2023 年 8 月 6 日発行

Ver1.4

編集・発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒 890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30

鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 3F

TEL : 099-285-7532 FAX : 099-285-7625

E-MAIL : kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp